沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第61集

基地内文化財 5

普天間飛行場内範囲確認調査

喜友名前原第三遺跡

喜友名東原第三遺跡

2011（平成23）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 61 集

基 地 内 文 化 財 5

普天間飛行場内範囲確認調査

喜友名前原第三遺跡

喜友名東原第三遺跡

2011（平成 23）年 3 月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した平成 17 年度の基地内埋蔵文化財分布調査の成果をまとめたものです。本調査は、沖縄県内に所在する米軍基地および自衛隊基地における埋蔵文化財の分布状況を把握するために、文化庁の補助を受け平成 9 年度から実施している継続事業であります。

本事業では、平成 9 年度は米軍基地内の現状および過去の調査の整理を行い、平成 10 年度はキャンプ瑞慶覧の試掘調査、平成 11 年度からは普天間飛行場の試掘調査、平成 15 年度からは並行して調査が可能な場所においては範囲確認調査も実施しています。

今回は、平成 11・12 年度の試掘調査により確認された喜友名前原第三遺跡と喜友名東原第三遺跡の範囲確認調査を実施しました。この範囲確認調査は、遺跡の詳細な範囲や性格を把握するために、数ヶ月から半年程度の調査期間が必要です。しかしながら、このような長期間の調査は、現在も稼動している普天間飛行場内では原則的には即日中に原状復旧が求められているため、許可を得る事が難しい場合もあります。幸いにも、今回は在沖米軍海兵隊環境保全課等関係者の協力・理解により、調査を実施することができました。

調査の結果、両遺跡は縄文時代の遺物包含層、グスク時代の耕作地および建物跡が点在していることが確認されました。ただ、両遺跡ともまだ遺構の内容については不十分な点も多く、今後も継続的な調査が必要と思われます。

将来、さらに必要とされる普天間飛行場を初めとする米軍基地内の分布調査、地域における埋蔵文化財の保存活用のための基礎資料となるよう供していただければ幸いです。

最後になりましたが、様々な御指導・御助言・御協力を戴きました諸機関および関係各位に対し、心から感謝を申し上げます。

2011（平成 23）年 3 月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　守内　泰三

例　言

１．本報告書は、沖縄県宜野湾市字喜友名、在沖米軍普天間飛行場内に所在する喜友名前原第三遺跡および喜友名東原第三遺跡の範囲確認調査の成果を記したものである。

２．本調査は、文化庁の補助（８／10）を受けた基地内埋蔵文化財分布調査事業に伴うもので、沖縄県教育委員会の指導を元に、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

３．調査期間は、発掘作業を平成 17 年９月１日から平成 18 年１月 31 日、資料整理作業・報告書作成を平成 22 年４月１日から平成 23 年３月 31 日まで実施した。

４．本書に掲載した地図は、宜野湾市都市計画課作成の H20 都市計画基本図（縮尺１：2,500）を使用している。

５．本書に掲載した遺構図の座標軸は国土座標軸（第ＸＶ座標系）を使用し、その座標値は日本測地系である。

６．現地調査および資料整理に際して、下記の諸氏・機関に協力・指導・助言を戴いた（順不同）。
文化庁文化財部記念物課　坂井秀弥（現奈良大学）・禰冝田佳男・清野孝之（現独立行政法人奈良文化財研究所）
宜野湾市教育委員会　　呉屋義勝・豊里友哉・仲村健・城間肇・森田直哉・伊藤圭
タイ産陶器についての指導　向井亙（東南アジア考古学会）

７．本書の編集は、伊藝由希・金城政史の協力を得て、瀬戸哲也が行った。また、執筆は第７章をパリノ・サーヴェイ株式会社、それ以外を瀬戸が行った。なお、石器については大堀皓平、図面作成については中山晋の協力を受けた。

８．土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」2003 年度版を使用している。土質は肉眼で粒径を観察し、地質学によるウェントワース法（那須・趙 2003、文化庁監修 2010）で表記している。

９．時代については、『沖縄県史　各論編２　考古』に基づき、縄文時代（沖縄考古学会編年貝塚時代前～中期、高宮暫定編年前期）、弥生～平安並行時代（沖縄考古学会編年貝塚時代後期、高宮暫定編年後期）、グスク時代、近世として表記している。

10．両遺跡のトレンチを呼称する際、煩雑を避けるため、前原１トレンチや東原１トレンチなどと適宜省略して表記している。

11．本書に掲載された写真は、現地調査を瀬戸哲也・伊藤圭・長濱建起・久貝弥嗣、遺物を矢船章浩・伊佐えりなが撮影した。

12．現地調査で得られた遺物および実測図・写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目　次

序
例言

第1章　調査の経過 …… 1
　第1節　調査にいたる経緯 …… 1
　第2節 調査体制 …… 1
　第3節 調査の経過 …… 2
第2章 位置と環境 …… 6
第3章 調査の方法 …… 8
第4章 基本層序 …… 10
第5章 喜友名前原第三遺跡 …… 14
　第1節 概要 …… 14
　第2節 1トレンチ …… 15
　第3節 2トレンチ …… 18
　第4節 3トレンチ …… 20
　第5節 4トレンチ …… 22
　第6節 5－1トレンチ …… 29
　第7節 5－2トレンチ …… 32
　第8節 小結 …… 34
第6章 喜友名東原第三遺跡 …… 37
　第1節 概要 …… 37
　第2節 1トレンチ …… 38
　第3節 2トレンチ …… 46
　第4節 3トレンチ …… 47
　第5節 4トレンチ …… 49
　第6節 5トレンチ …… 50
　第7節 小結 …… 58
第7章 自然科学分析 …… 59
第8章 総括 …… 66
　第1節　調査成果のまとめ …… 66
　第2節　喜友名、伊佐地域におけるグスク時代の遺跡分布とその様相 …… 68

引用文献 …… 70
報告書抄録 …… 71

挿図目次

第1図　沖縄本島の位置 …… 3
第2図　普天間飛行場における予備調査の実績 …… 5
第3図　普天間飛行場内及び周辺の遺跡 …… 7
第4図　普天間飛行場地内区割 …… 9
第5図　平成17年度調査範囲図 …… 13
第6図　喜友名前原第三遺跡トレンチ配置図 …… 14
第7図　喜友名前原第三遺跡1トレンチ断面・遺構図 …… 15
第8図　喜友名前原第三遺跡2トレンチ断面図 …… 18
第9図　喜友名前原第三遺跡3トレンチ断面図 …… 21
第10図　喜友名前原第三遺跡4トレンチ断面・遺構図 …… 23
第11図　喜友名前原第三遺跡5-1トレンチ断面・遺構図 …… 30
第12図　喜友名前原第三遺跡5-2トレンチ断面図 …… 33
第13図　喜友名前原第三遺跡5-2トレンチ遺構図 …… 34
第14図　喜友名東原第三遺跡トレンチ配置図 …… 37
第15図　喜友名東原第三遺跡1トレンチ断面・遺構全体図 …… 39
第16図　喜友名東原第三遺跡1トレンチ ⅢB・ⅣB面遺構図 …… 41
第17図　喜友名東原第三遺跡2トレンチ断面図 …… 46
第18図　喜友名東原第三遺跡3トレンチ断面図 …… 48
第19図　喜友名東原第三遺跡4トレンチ断面図 …… 49
第20図　喜友名東原第三遺跡5トレンチ断面図 …… 52
第21図　喜友名東原第三遺跡5トレンチⅡ面遺構図 …… 54
第22図　喜友名東原第三遺跡5トレンチⅢB面遺構図 …… 55
第23図　喜友名東原第三遺跡5トレンチⅢC面遺構図 …… 56
第24図　喜友名東原第三遺跡5トレンチⅣA面遺構図 …… 57
第25図　喜友名東原第三遺跡1トレンチ　フテ13-G5-ウ 南壁模式柱状図及び資料採取位置 …… 59
第26図　喜友名前原第三遺跡・喜友名東原第三遺跡 遺構分布図 …… 67
第27図　喜友名周辺地域のグスク時代遺跡分布図 …… 69

図版目次

図版1　喜友名前原第三遺跡・喜友名東原第三遺跡遠景
図版2　作業状況 …… 4
図版3　基本層序 …… 11
図版4　喜友名東原第三遺跡1トレンチ …… 16
図版5　喜友名前原第三遺跡1・3・4トレンチ出土遺物 …… 17
図版6　喜友名前原第三遺跡2トレンチ …… 19
図版7　喜友名前原第三遺跡3トレンチ …… 20
図版8　喜友名前原第三遺跡4トレンチ(1) …… 25
図版9　喜友名前原第三遺跡4トレンチ(2) …… 26
図版10　喜友名前原第三遺跡4トレンチ(3) …… 27
図版11　喜友名前原第三遺跡4トレンチ(4) …… 28
図版12　喜友名前原第三遺跡4トレンチ(5) …… 29
図版13　喜友名前原第三遺跡5－1トレンチ …… 31
図版14　喜友名前原第三遺跡5－2トレンチ …… 35
図版15　喜友名前原第三遺跡5－1・2トレンチ 出土遺物 …… 36
図版16　喜友名東原第三遺跡1トレンチ(1) …… 43
図版17　喜友名東原第三遺跡1トレンチ(2) …… 44
図版18　喜友名東原第三遺跡1トレンチ(3) …… 45
図版19　喜友名東原第三遺跡1トレンチ出土遺物 …… 45
図版20　喜友名東原第三遺跡2トレンチ …… 47
図版21　喜友名東原第三遺跡3・4トレンチ …… 50
図版22　喜友名東原第三遺跡5トレンチ(1) …… 53
図版23　喜友名東原第三遺跡5トレンチ(2) …… 54
図版24　喜友名東原第三遺跡5トレンチ出土遺物 …… 54
図版25　喜友名東原第三遺跡5トレンチ(3) …… 55
図版26　喜友名東原第三遺跡5トレンチ(4) …… 56
図版27　喜友名東原第三遺跡5トレンチ(5) …… 57

表目次

第1表　層序対応表 …… 12
第2表　前原1トレンチ層序表 …… 15
第3表　前原2トレンチ層序表 …… 18
第4表　前原3トレンチ層序表 …… 21
第5表　前原4トレンチ層序表 …… 22
第6表　前原5－1トレンチ層序表 …… 30
第7表　前原5－2トレンチ層序表 …… 33
第8表　東原1トレンチ層序表 …… 39
第9表　東原2トレンチ層序表 …… 46
第10表　東原3トレンチ層序表 …… 48
第11表　東原4トレンチ層序表 …… 49
第12表　東原5トレンチ層序表 …… 52
第13表　分析試料・分析項目一覧 …… 59
第14表　放射性炭素年代測定結果 …… 63
第15表　暦年較正結果 …… 63
第16表　喜友名東原第三遺跡1トレンチにおける花粉分析結果 …… 64
第17表　喜友名東原第三遺跡1トレンチにおける土壌理化学分析・粒度分析結果 …… 64

図版1　喜友名前原第三遺跡、喜友名東原第三遺跡　遠景

第１章　経緯・経過

第１節　調査に至る経緯

基地内埋蔵文化財分布調査は、県内に所在する在沖米軍基地及び自衛隊基地内に所在する埋蔵文化財について実態を把握し、分布図などの基礎資料を作成することを目的として、平成９年度からの文化庁の補助を得て実施している事業である。

これまで、沖縄県立埋蔵文化財センター（平成 11 年度までは沖縄県教育庁文化課埋蔵文化財係）は、キャンプ瑞慶覧及び普天間飛行場において試掘調査及び範囲確認調査を行っている（県教委 1998、県埋文 2002・2004・2006）。また、宜野湾市教育委員会も平成 13 年度から普天間飛行場において同様の調査を行っており（宜野湾市 2005～2008）、調査の方法・範囲等について県側と共有、調整するように努めている。

これらの調査成果を受けて、平成 21 年度に宜野湾市教育委員会及び沖縄県教育委員会の共同で、現時点での普天間飛行場の試掘調査・範囲確認調査の成果を元に、『普天間飛行場内遺跡地図（中間報告）』（県教委・宜野湾市 2010）を刊行しており、飛行場内では 102 遺跡が確認されていることを報告している。

本報告書では、普天間飛行場内における分布調査の一環として、平成 17 年度に行った喜友名前原第二遺跡及び喜友名東原第二遺跡の範囲確認調査の成果を掲載している。この両遺跡は、平成 11・12 年度に沖縄県教育委員会が行った試掘調査によりピット等の遺構が確認されたことにより、周知の遺跡として認識されていたものである（県埋文 2002、宜野湾市 2002）。しかしながら、この試掘調査では、４×４ｍの試掘坑であったため、遺構の広がりや全体的な堆積状況は十分に明らかにすることは出来なかった。そこで今回の調査では、遺構が確認されたグリッドを中心に長さ 30～60m程度のトレンチを設定することにより、両遺跡の範囲・性格をより詳細に把握することを目的に行うことにしたのである。

しかしながら、現在稼動している普天間飛行場においては、原則即日埋め戻しが要求されており、１ヶ月程度はトレンチを開放した状況に保つ必要がある範囲確認調査については、飛行場を使用している在沖米軍の許可が難しい場所も多い。今回の調査においては、両遺跡の現状がススキの生い茂る原野であることから、文化財担当部局である在沖米軍海兵隊環境保全課の理解を得て、調査が終わったトレンチは速やかに埋め戻すなど安全面に配慮することで調査を実施することができた。

第２節　調査体制

本報告書に掲載している喜友名前原第三遺跡及び喜友名東原第三遺跡の範囲確認調査は、沖縄県立埋蔵文化財センター（以下、当センター）が沖縄県教育委員会の指導の下に平成 17 年度に発掘作業、平成 22 年度に資料整理作業・報告書作成を行ったものである。実施体制は以下のとおりである。

平成 17（2005）年度　発掘作業

事業主体　沖縄県教育委員会　仲宗根用英（教育長）

事業主管　沖縄県教育庁文化課　千木良芳範（課長）、島袋洋（課長補佐）、盛本勲（主幹兼記念物係長）、中山晋・知念隆博（専門員）

調査所管　沖縄県立埋蔵文化財センター　田場清志（所長）

庶務課　赤嶺正幸（副所長兼課長）、比嘉美佐子・山田恵美子（主査）、城間奈津子（主任）

調査課　総括…岸本義彦（課長）
調査担当…瀬戸哲也（専門員）、長濱建起・伊藤圭（臨時的任用専門員）
調査補助…久貝弥嗣（文化財調査嘱託員）
発掘調査作業員…安里仁男・松本義光・宮森敬・仲座進・親川守人・松門孝・桃原隆信・吉田正志・仲間勝也・諸見里安史・金城京子・大城輝子・大嶺愛子・前田和枝・知念栄子・知念真衣・桃原佐恵美

平成22（2010）年度　資料整理作業・報告書作成
事業主体　沖縄県教育委員会　金武正八郎（教育長）
事業主管　沖縄県教育庁文化課　大城慧（課長）、島袋洋（記念物班長）、上地博（主任専門員）、久高健（指導主事）
調査所管　沖縄県立埋蔵文化財センター　守内泰三（所長）
総務班　嘉手苅勤（班長）、恩河朝子・玉寄秀人（主査）
調査班　総括…金城亀信（班長）
整理担当…瀬戸哲也（主任）
資料整理嘱託員…赤嶺雅子・新垣みどり・伊藝由希・池原直美・伊佐えりな・石嶺敏子・伊藤恵美利・殷俞平・上田麻紀子・上地由紀子・上原園子・上原美穂子・上原留美・請盛智秋・大村由美子・荻堂さやか・喜屋武朋子・金城克子・金城政史・具志良子・國吉咲子・久保田有美・城間千鶴子・瑞慶覧尚美・高良三千代・玉城照美・玉城実子・知念愛・津多恵・照屋利子・土田智恵美・當山哲也・仲宗根三枝子・仲宗根めぐみ・中山まり・野村知子・比嘉登美子・譜久村泰子・外間瞳・山川由美子・又吉志麻子・宮里絵理・矢船章浩・吉村綾子

第３節　調査経過

発掘作業（平成17年度）

発掘作業は、平成 11・12 年度の試掘調査により周知の遺跡とされた喜友名前原第三遺跡・喜友名東原第三遺跡においてその範囲・内容の確認のために、平成17年８月１日から平成18年１月31日まで行った。

後述するが、試掘調査においては主にピットが点在的に見つかっている状況であるが明確な遺物は得られていないため、その時期が決めがたい状況であった。そのため、一つのグリッドを面的に広げるよりも、幾つかの細長いトレンチを設定し堆積状況を確認することで、ピットの広がりや時期が分かるのではないかと考えた。

そこで、調査地はススキ等が多く茂っていることから、遺構が確認されたグリッドを中心にして、その周辺の地形が把握できるようかなり広範囲の伐採を行うことから始めることにした。その後、Ⅰ層（造成土・表土）を重機で除去し、原則的にトレンチの北側を約１m以内で深掘りを行うことにより層序を確認した。そして、堆積状況から遺構の存在が想定される場合は、トレンチ内を全て掘削するのではなく、調査を行うグリッドを絞り込み、人力により層序ごとに掘り下げることで遺構・遺物の有無を確認していった。このように、設定した各トレンチ全体を掘削するのではなく、将来の保存活用を考慮し、最低限の掘削により調査を進めることにした。

８月１日から調査を開始し、まずは喜友名前原第三遺跡の範囲から伐採、トレンチ設定、層序の掘り下げを行い、最終的には６本のトレンチの調査を 12 月２日にかけて実施した。全てのトレンチでグスク時代以前の層を確認することとなり、１トレンチでは縄文時代後・晩期の焼土、４・５－２トレンチではグスク時代の耕作痕及び耕作土、５－１トレンチではグスク時代の柱穴群などを確認した。

11 月 28 日からは喜友名東原第三遺跡の調査も進めていき、順番に５本のトレンチを設定し、１月 31 日に終

120°
130°
140°
40°
30°
20°
10°
モンゴル
MONGOLIA
ロシア連邦
RUSSIAN FEDERATION
ウラジオストク Vladivostok
朝鮮民主主義人民共和国
NORTH KOREA
北京 Beijing
平壌 Pyongyang
ソウル Seoul
大韓民国
SOUTH KOREA
東京 Tokyo
中華人民共和国
CHINA
博多 Hakata
日本
JAPAN
上海 Shang hai
東中国海
EAST CHINA SEA
那覇 Naha
台北 Taipei
沖縄
OKINAWA
太平洋
PACIRIC OCEAN
台湾
TAIWAN
香港 Hong Kong
沖縄本島
N
東シナ海
宜野湾市
南中国海
SOUTH CHINA SEA
フィリピン諸島
PHILIPPINES
マニラ Manira
0
500
1000km

第１図　沖縄本島の位置

了した。１トレンチではグスク時代のピット群と縄文時代後・晩期の１mに及ぶ自然堆積層、３トレンチではグスク時代のピット、５トレンチではグスク時代の耕作痕及び耕作土を確認した。

全てのトレンチにおいて確認した遺構は、下層の調査を進めるために一部完掘したものもあるが、多くは半裁もしくは検出に留め、その後埋め戻して原状に戻した。なお、現地調査時には、文化庁記念物課埋蔵文化財部門の指導、共同で普天間飛行場内において調査を行っている宜野湾市教育委員会の協力を受けた。

資料整理作業・報告書作成（平成 22 年度）

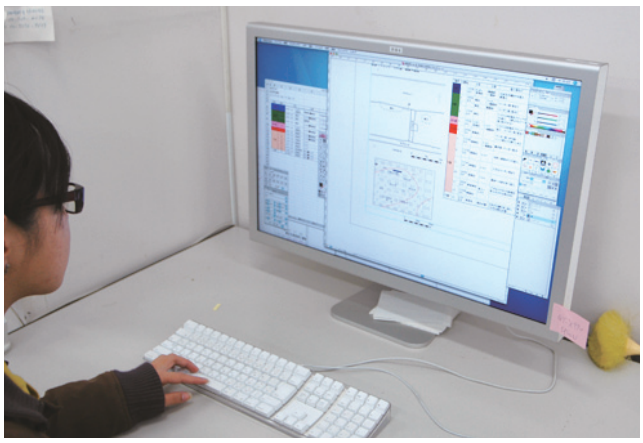
現地調査では、広範囲に複数のトレンチを設定したこと、また調査の進捗上により、層序の時期・性格の共通性を考慮しながらも、その利便性のため各トレンチにおいて土層を設定した。そこで、資料整理においては、まずは各トレンチ間の層序を把握するために、断面図の整理・検討から始め、今回の調査における基本層序を設定し、堆積状況、遺構の様相を全トレンチ共通で把握できるように努めた。結果的には、当センターが以前に刊行した『基地内文化財Ⅳ』で設定した６層に分けたものとほぼ同様の層序で理解することができた。遺構については、整理した基本層序を元にトレンチ間で共通した遺構面を設定し、報告に必要な遺構を選択していった。

一方、出土遺物については両遺跡合わせても小コンテナ２箱と非常に少なく、また小片であったため、層序・遺構の時期を示す遺物を選定し、写真のみ掲載することとした。層序・遺構図については、原図をスキャナで読み込み、パソコン上で作図ソフト（イラストレーター）を用いて、デジタルトレースにより作成した。また、写真についてもスキャナで取り込み、当センターにおいて色補正などを行い、レイアウトを作成した。このように、文字だけでなく図面・写真についてもデジタル原稿として、印刷会社に入稿することとした。

1.　伐採状況

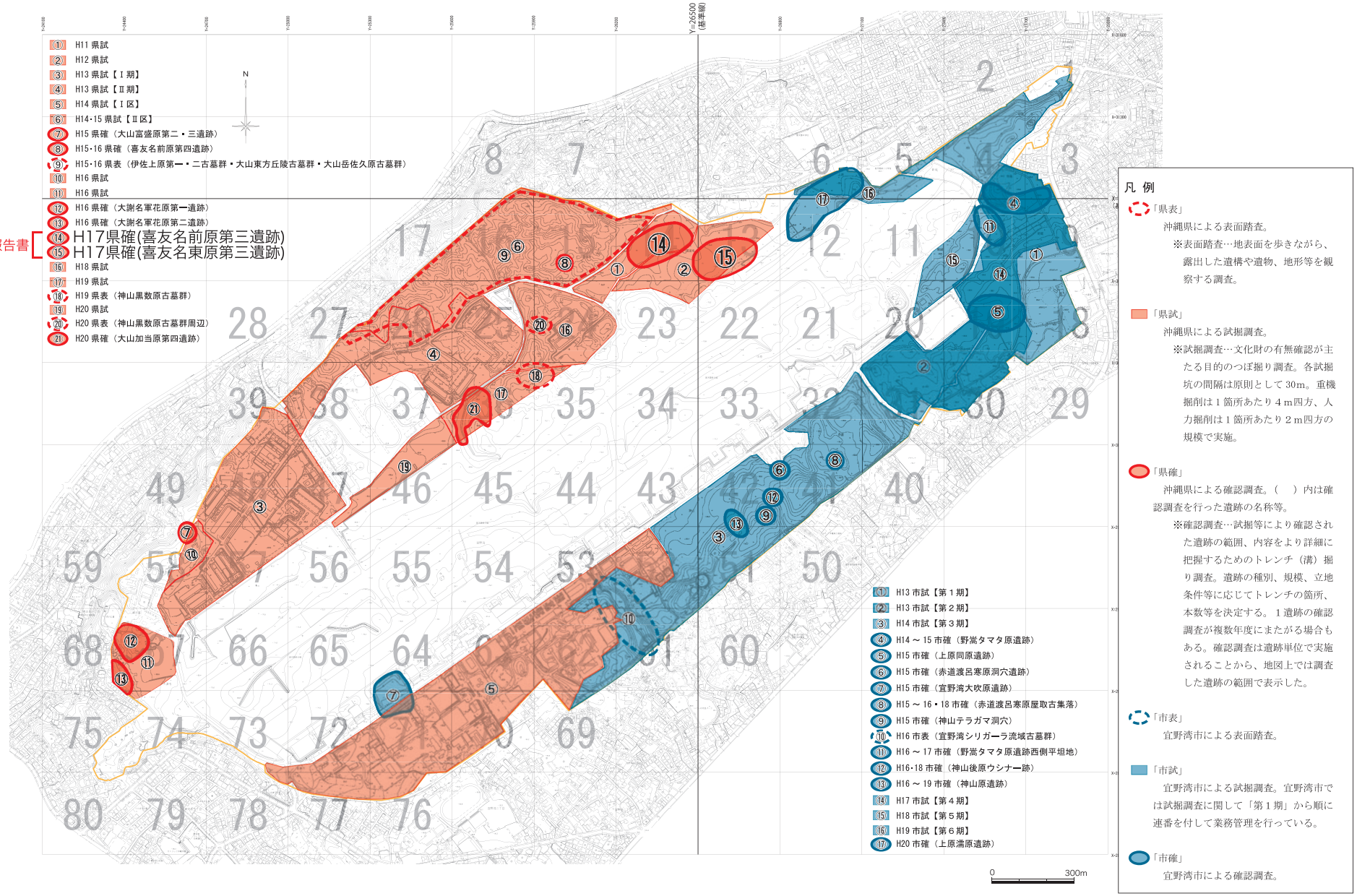
2.　喜友名前原第三遺跡　伐採後

3.　人力掘削状況



4.　遺構図トレース作業状況

図版2　作業状況



第2図　普天間飛行場における予備調査の実績

第２章　位置と環境

普天間飛行場は、宜野湾市の中央部に位置し、総面積が約 480.5ha で市面積の約 25%を占めている。東シナ海に面する西海岸から約１km 東方の琉球石灰岩で構成された中位段丘にあたり、標高は 70～90m前後である。この段丘はドリーネ状の地形が多く見られ、洞穴や湧泉も多く分布しており、遺跡の諸様相にも影響しているものと思われる。地質としては、青灰色のシルト質粘土である泥岩（クチャ）を基盤とする島尻層群にあたり、この上層には琉球石灰岩、その風化土もしくは風成累積土とも考えられる明褐色土（島尻マージ）が堆積しており、考古学では地山と考えている。この島尻マージは段丘の形成過程から 20 万年前以降と考えられている（成瀬・井上 1990、宜野湾市 2005）。

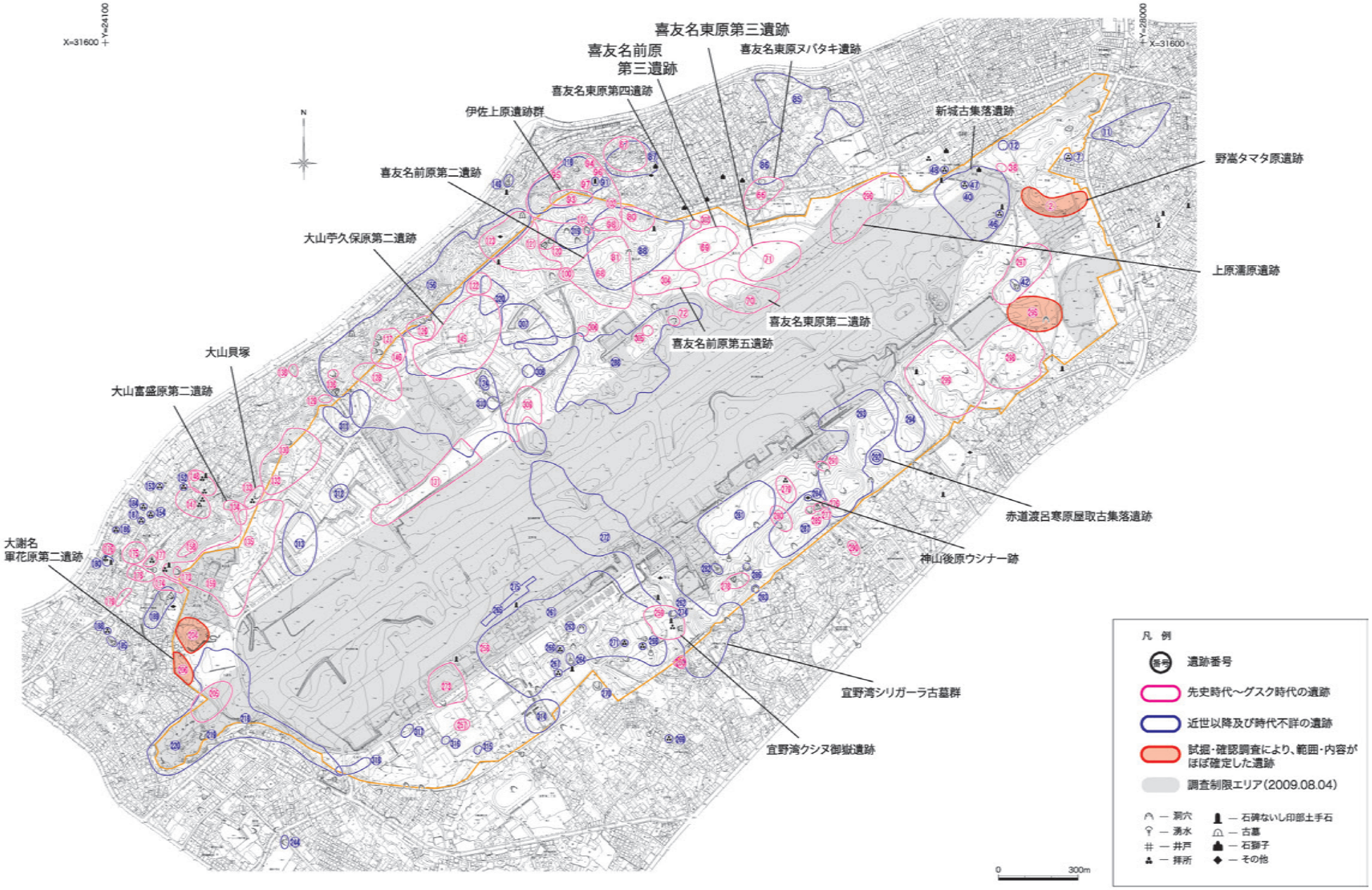
普天間飛行場内の遺跡数は、平成 22 年３月時点において 102 遺跡である（県教委・宜野湾市 2010）。その内訳は、先史～グスク時代が 55 遺跡、近世以降が 47 遺跡とされている。その分布状況は、近年の分布調査の進捗により、滑走路を挟んだ北西側と南東側に多く集中している。一方、滑走路部分は多くの谷地形が見られるとされ、近世・近代には墓地や畑であったようで、さらに多くの遺跡が埋蔵されているものと思われる。以下、近年の宜野湾市及び当センターが行っている分布調査の成果を中心に、時代ごとに遺跡を概観する（第３図）。

縄文時代　飛行場内北西の段丘縁辺において、多くの遺跡が見られる。竪穴建物跡が確認された遺跡として、喜友名前原第二遺跡（68）や伊佐上原遺跡群（93・98）、北方約 100mに国史跡の大山貝塚（133）（賀川・多和田 1959）が隣接する大山富盛原第二遺跡（134）がある。大山貝塚は後期前半であるが、竪穴住居跡を確認している前三遺跡は室川式から宇佐浜式土器が出土することから、後期後半～晩期と時期的にやや後出する。今回報告する喜友名前原第三遺跡（69）・喜友名東原第三遺跡（71）から北方約 300mに位置する喜友名東原ヌバタキ遺跡（66）では晩期後半の仲原式の 50 基以上の竪穴建物跡が、北東約 500mに位置する上原濡原遺跡では縄文時代晩期後半の仲原式の土坑や畝・畦状遺構が確認されており、当該期の遺跡が多く展開する地点である。今回の調査では、後・晩期と考えられる堆積層を確認しており、その関係性を検討していく必要がある。

弥生～平安並行時代　現時点では明確に当該期の遺跡は確認できていないが、大山苧久保原遺跡の範囲において行った試掘調査により、細片であるが当該期の土器片を確認している（県埋文 2004）。

グスク時代　野嵩タマタ原遺跡（２）や大謝名軍花原第二遺跡（206）などの植栽痕と考えられる列状ピットが確認されている耕作関連遺跡や、喜友名前原第二遺跡（68）など掘建柱建物が確認されている集落跡など、多くの遺跡が分布している。当該期の集落跡は飛行場内北西側に多く見られるが、耕作関連遺跡については南東側にもその分布域が広がっている。また、この中位段丘で見られる当該期の遺跡は集落跡であっても、飛行場西側の低位段丘に位置する遺跡に比べて遺物が少ない傾向にあるというのも特徴と言えようか。

近世以降　現時点で調査が不可能な滑走路を除いた飛行場内全域に、古墓群を中心として多くの遺跡が分布する。古墓群では、飛行場内を横断する谷地形に多くの墓が立ち並ぶ宜野湾シリガーラ古墓群（272）などが良好に残存している。宜野湾・神山・新城の３集落が戦後の米軍による接収以前まで存在しており、新城古集落遺跡（40）では米軍パイプライン建設のため調査が行われ、18 世紀から形成されたことが確認されている。近代の遺跡としては、屋敷跡が残る赤道渡呂寒原屋取古集落遺跡（272）や、祭祀遺跡である宜野湾クシヌウタキ遺跡（259）、闘牛場跡である神山後原ウシナー跡（234）などがある。このように、近世～近代の遺跡は、第二次世界大戦以後に失われた本地域の文化・歴史を考える上で非常に重要な遺跡であり、今後の適切な調査・保存・活用を検討していく必要があろう。



第3図　普天間飛行場内及び周辺の遺跡

第３章　調査の方法

普天間飛行場は、第二次世界大戦中、昭和 20 年４月下旬に米陸軍が重爆撃機用滑走路建設工事に着手し、大規模な造成・削平がなされたのであるが、逆にそれ以後の開発はほとんど及ばない地域も残された。そのため、周辺地域に比べると埋蔵文化財の把握が十分ではなく、分布調査においては詳細な調査が必要とされている。

そこで、普天間飛行場内においては、平成 13 年度より国土座標軸第ＸＶ座標系に基づき、日本測地系による座標値 X＝31000、Y＝26500 を基準として、第Ⅰ区分を 300m、第Ⅱ区分を 30m、第Ⅲ区分を６ｍごととしてグリッドを設定している。この区分により『フテ 36－Ａ１－ア』などのように表記している（第４図）。試掘調査については、第Ⅱ区分のグリッド、30m間隔で行うことにより、遺跡の有無を確認することになっている。

今回の調査は、平成 11・12 年度の試掘調査で遺構が確認されたことにより、周知の遺跡となった喜友名前原第三遺跡と喜友名東原第三遺跡の詳細な範囲と内容を確認することが目的である。その方法として、遺構が確認された試掘グリッドを繋ぎ、細長いトレンチを設定することにより、全体の堆積状況・遺構の広がりが把握できるのではないかと考えた。そこで、まず周辺の地形も把握できるよう調査予定地において広めに伐採を行った。次に調査区の設定を行うのであるが、両遺跡の範囲はほぼ平坦で東西方向に広がるものと推定されていたので、試掘グリッドの基軸線に基づき、原則的に東西方向で、幅４ｍ、長さ 30mを基本として各トレンチを設定することにした。但し、遺構の広がりに合わせて、南北方向やより長いトレンチを設定したものもある。

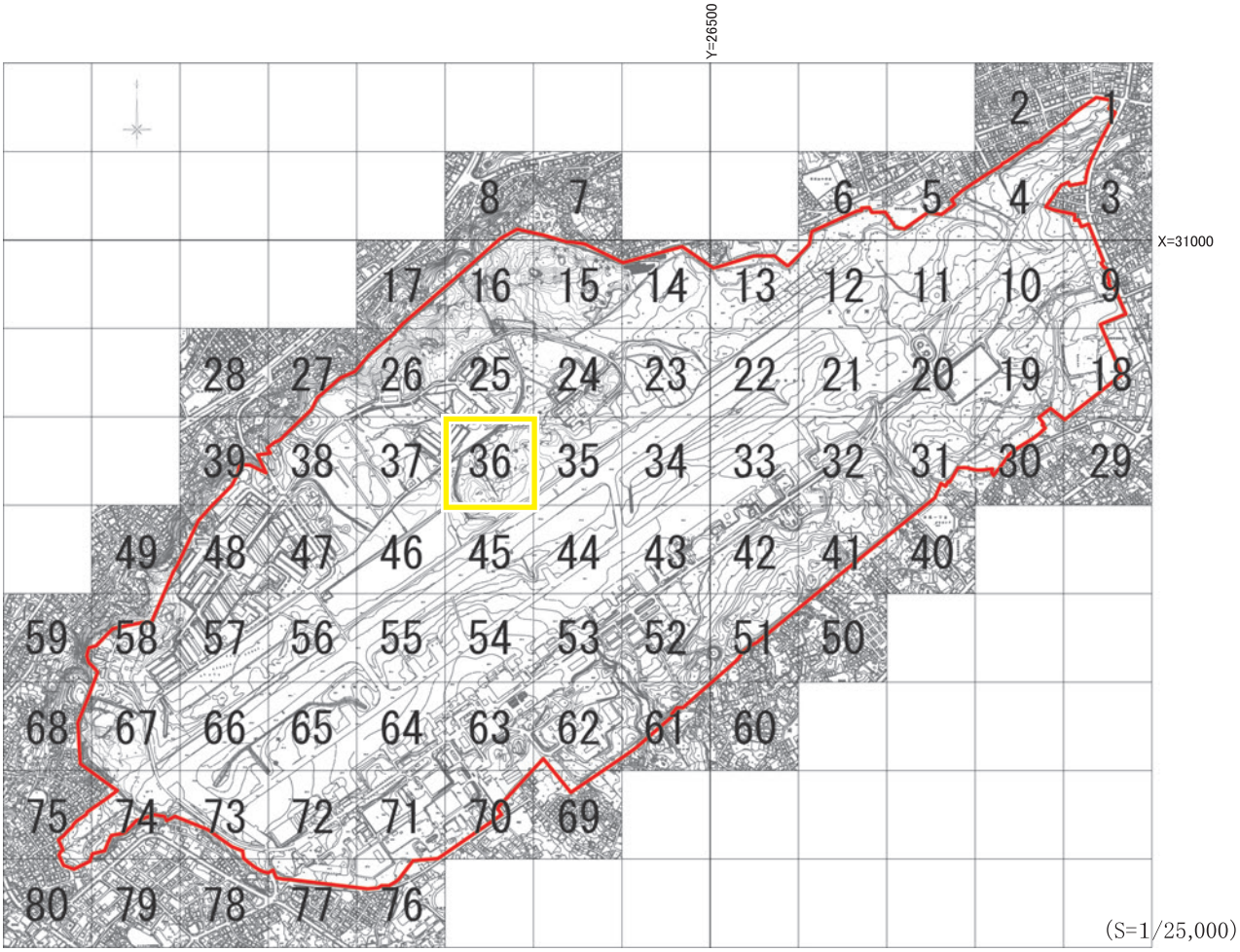
トレンチ設定後、安全対策として不発弾の有無を確認するため磁気探査を行ったところ、今回幸いにも不発弾はなかった。ここでやっと、表土・盛土を重機により掘削していくのである。その後、堆積状況を確認するために、各トレンチの長辺方向に幅１ｍ以内のサブトレンチを先行して人力により掘削した。この層序を把握した後に、トレンチ全体を掘り下げるのではなく、必要に応じて部分的に層序ごとに調査を進めることとし、最低限の掘削に留めて保存していくことにした。また、掘削は基本的に安全性の観点から２ｍ以内の掘削に留めており、深掘りが必要な場合は小面積について重機で行いすぐに埋め戻した。このような過程を経て、幅２～４ｍ、長さ 30～60mのトレンチを喜友名前原第三遺跡で６本、喜友名東原第三遺跡で５本、合計 11 本のトレンチの調査を行い、終了後は全てのトレンチを重機により埋め戻した。

現地での実測作業は、今回の調査では複雑な堆積状況を呈するところが多いこともあり、断面図が重要となったが、原則的には長辺側である北壁の断面図を必ず作成し、必要に応じて他方向の壁面も行った。平面図は、遺構が確認された面に対して、座標値及びグリッドを基準としてトータルステーションを用いながら、基本的には手作業による実測を行った。

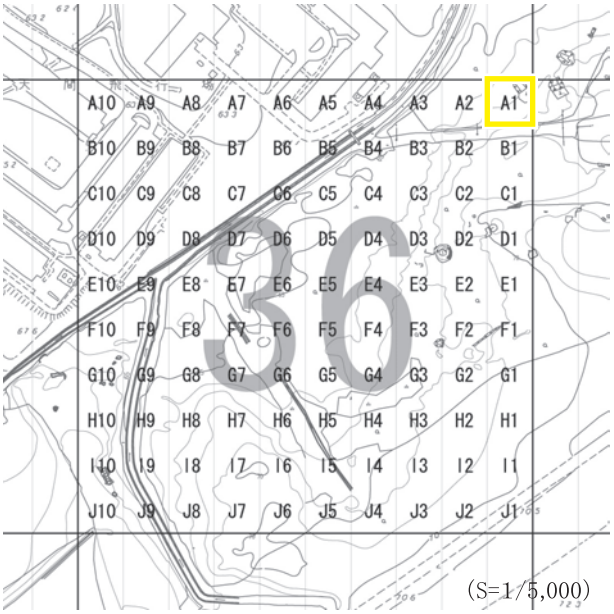
現地での写真撮影は、調査の過程においては 35mm、遺構全景については６×７cm 判のフィルムカメラを用いて、各々白黒とカラーリバーサルフィルムを使用した。また、デジタルカメラ（フジフィルム Fine Pix S1 Pro 613 万画素）も使用している。

自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、放射性炭素年代測定による土層の年代、花粉分析等による環境復元を目的に行った。試料採取については、一部は当センターで行ったが、多くは現場で相互に協議し行った。

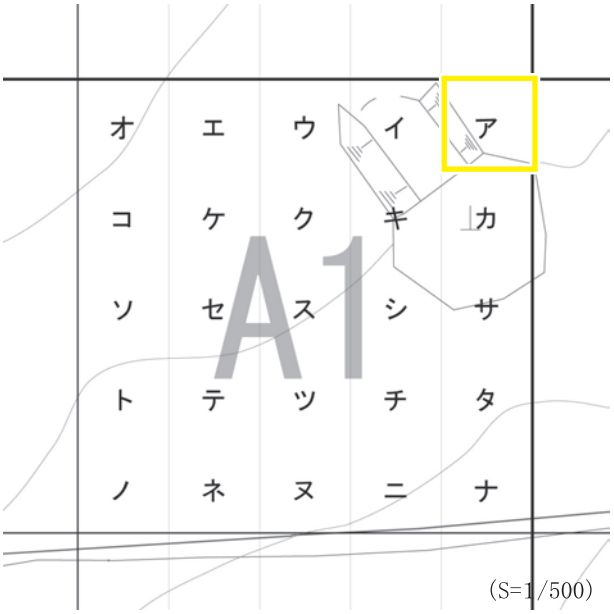
整理作業は、まずは現場での土層図を整理し、今回の調査区全体に共通する基本層序を構築し、層名を統一した。遺構面も、各トレンチのどの面が共通または異なるのかを整理し、所属時期・性格を検討していった。また、現地調査時には、各トレンチをグリッド名で呼称していたが煩雑になるため、喜友名前原第三遺跡は１～５－２トレンチ、喜友名東原第三遺跡は１～５トレンチとした。以上の検討・作業を経ながら、報告に必要な各トレンチの断面図そして遺構図、遺物を選択した。



第Ⅰ区画(300mグリッド)



第Ⅱ区画(30mグリッド)



第Ⅲ区画(6mグリッド)

第４図　普天間飛行場内地区割　（例：フテ 36-A1-ア）

第４章　基本層序

今回の調査では、先述したように現地での各トレンチにおいて分類した土層を、出土遺物と明確な土壌の違いにより、下記のとおり大きく６層に整理したが、基本的には『基地内文化財Ⅳ』で設定したものとほぼ同様の理解である。一方、普天間飛行場内においては、宜野湾市教育委員会が基盤層である島尻マージに注目した基本層序を設定しており（宜野湾市 2005・2006・2009）、その対応関係が分かるものは本章で記した。

以下、各層の土色・土質の代表的な様相（図版３－１・２）を述べ、想定される時期・その性格、分布状況等について概略する。各トレンチでの詳細な状況は、個別に後述する。なお、各トレンチの層序の厚さや遺構、対応関係については、第１表に概略してまとめた。また、今回の両遺跡については、後述する層序ごとに遺構面が複数確認されており、その認識についても整理する。

Ⅰ層　表土・盛土

褐色細～極細砂。石灰岩細～中礫が多く混じり、客土もしくは近年までの耕作土と考えられ、近現代の陶磁器や鉄・ガラスやビニールなどが出土している。宜野湾市Ⅰ層に相当する。

Ⅱ層　基地造成以前の旧表土・耕作土

黄褐色～褐色シルト。下層に比べると細砂～極細砂が含まれ、石灰岩細～中礫も混入する地点も多い。土壌の攪拌が進み均質化しており、このⅡ層下面に耕具痕や溝も見られることから、多くは旧耕作土と考えられる。近世の沖縄産陶磁器を中心に、少量の中国清代青花・白磁が出土している。宜野湾市Ⅱ層ユニット①に相当する。

Ⅲ層　近世～グスク時代の人為・自然堆積層

にぶい黄褐色～暗褐色シルト。Ⅱ層よりも色調が暗くしまりが良い。出土遺物はⅡ層に比べると激減するが、中国産陶器、土器・石材がわずかに出土する。これらから明確な時期を確定するのは困難であるが、宜野湾市Ⅱ層ユニット②～④（宜野湾市 2005）や大謝名軍花原第二遺跡４層（県埋文 2006）と類していることから、大まかにグスク時代と捉えておく。Ⅲ層は色調及び混入物よりさらに３つに分けられるが、出土遺物は少なく、時期差は明確ではない。

ⅢＡ層…にぶい黄褐色～褐色シルト。Ⅴ層に由来する明褐色シルトブロック及び焼土の可能性が高い赤色粒が混入。前原４・５－２トレンチではピットが見られ、植栽痕と思われる径 20cm 程度の列状ピットと考えられるものもある。

ⅢＢ層…暗褐色シルト。上下の層に比べると、混入物が目立たない。前原４・５－１、東原１・３・５トレンチでピットが見られ、径 20～30cm、深さ 20cm 以下のものが多い。前原５－１トレンチのものは、一定間隔で並ぶため、柱穴の可能性が高い。

ⅢＣ層…暗褐色～褐色シルト。明褐色シルトブロックや赤色粒が多く混入する点で、ⅢＡ層と共通している。前原４、東原５トレンチでピットが見られるが、径 10cm、深さ５cm 以下のものが多い。

Ⅳ層　縄文時代後・晩期の自然堆積層

土質はⅢ層よりもさらに締りがよく、基盤であるⅤ層に近い。出土遺物は少く小片だが、縄文時代後・晩期と思われる土器・石器・石材の小片が出土している。Ⅳ層は色調・土質では２つに分けられる。

ⅣＡ層…暗褐色シルト。焼土・炭が含まれており、層厚は 10cm 以下と非常に薄いく、Ⅴ層と土質が近いことから、地表面として機能することで土壌化した土層と考えられる。そのため、今回の調査では明確な遺構は見つかっていないが、周辺に遺構が存在する可能性もある。

ⅣＢ層…褐色シルト～細砂。ⅣA 層に比べるとかなり砂っぽい。東原１トレンチのみで見つかっており層厚は最深部では１ｍを越えており、流水などによる堆積層と思われる。宜野湾市第６期試掘調査で確認された上原濡原遺跡周辺のⅡ層ユニット⑤と土質・色調では類している（宜野湾市 2009）。

Ⅴ層　琉球石灰岩の風化土壌、島尻マージ

宜野湾市Ⅲ～Ⅶ層に相当するもので、色調及び土質から大まかに対応できる。本報告書で、地山またはマージという場合は本層のことである。

ＶＡ層…暗褐色～褐色シルト　マンガン斑が多く見られる（宜野湾市Ⅲ・Ⅳ層）。

ＶＢ層…明褐色シルト（宜野湾市Ⅴ層）。

ＶＣ層…褐色～黄褐色砂混じりシルト（宜野湾市Ⅵ層）。

ＶＤ層…暗褐色～黄褐色粘土～シルト　クチャブロックや風化した石灰岩礫が多く混じる（宜野湾市Ⅶ層）。

Ⅵ層　琉球石灰岩

今回の調査では、風化が進み塊状に割れて礫混じり粘土になっている地点が多く、風化岩盤と称している。本報告書では、岩盤とは本層を示す。検出されるレベルに違いがあるが、ほぼ全域で確認できている。

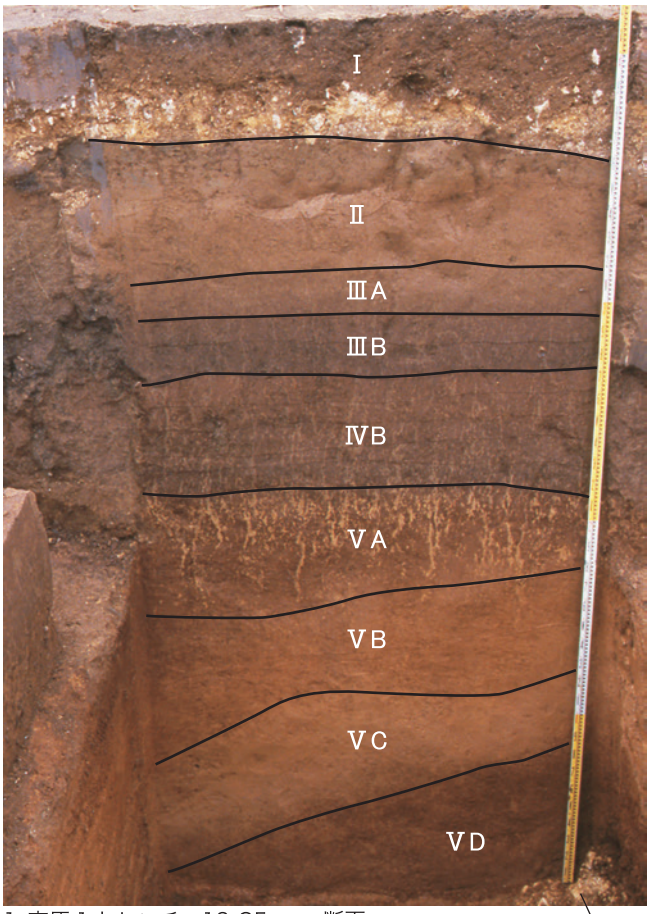
遺構面の認識（図版３－３）

遺構と土層の関係として、それを覆う上層（ここでは「○層」とする）と、それが掘り込まれた下層つまり基盤層（「△層」）があると想定できる。つまり、遺構面としては次の２つのパターンで考えることができる。

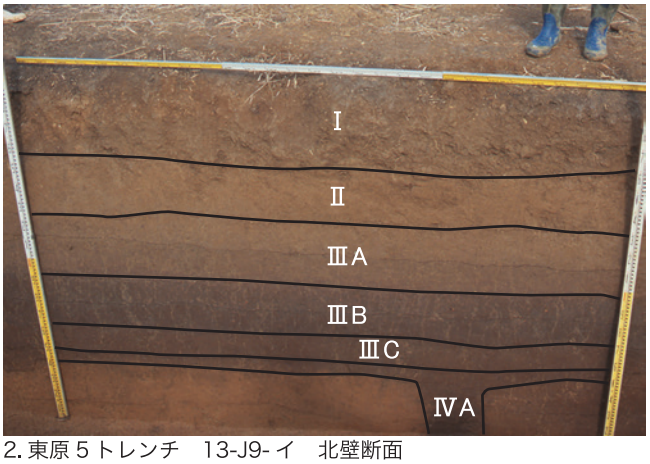
①○層下面　検出された遺構はその直上の土層、つまり○層を埋土とする場合である。

②△層上面　検出された遺構が掘りこまれた下層である△層の上面という意味で、それは遺構の埋土が○層や△層でなく、全く別の層の場合が考えられる。

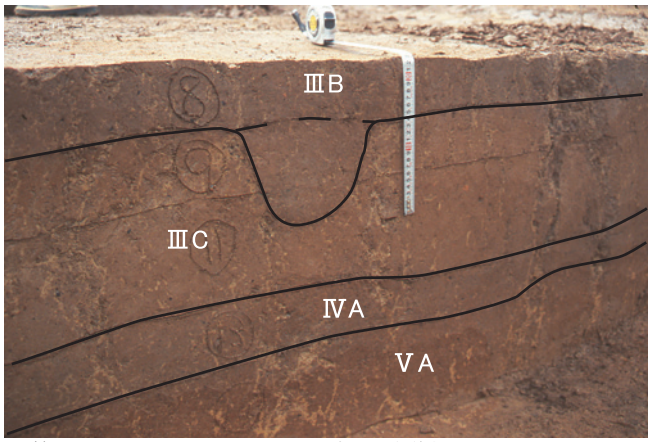
今回の調査では、基本的に①のパターンが多く、○層下面という意味で○面と称することにした。



1. 東原１トレンチ　13-G5- エ　断面



2. 東原５トレンチ　13-J9- イ　北壁断面



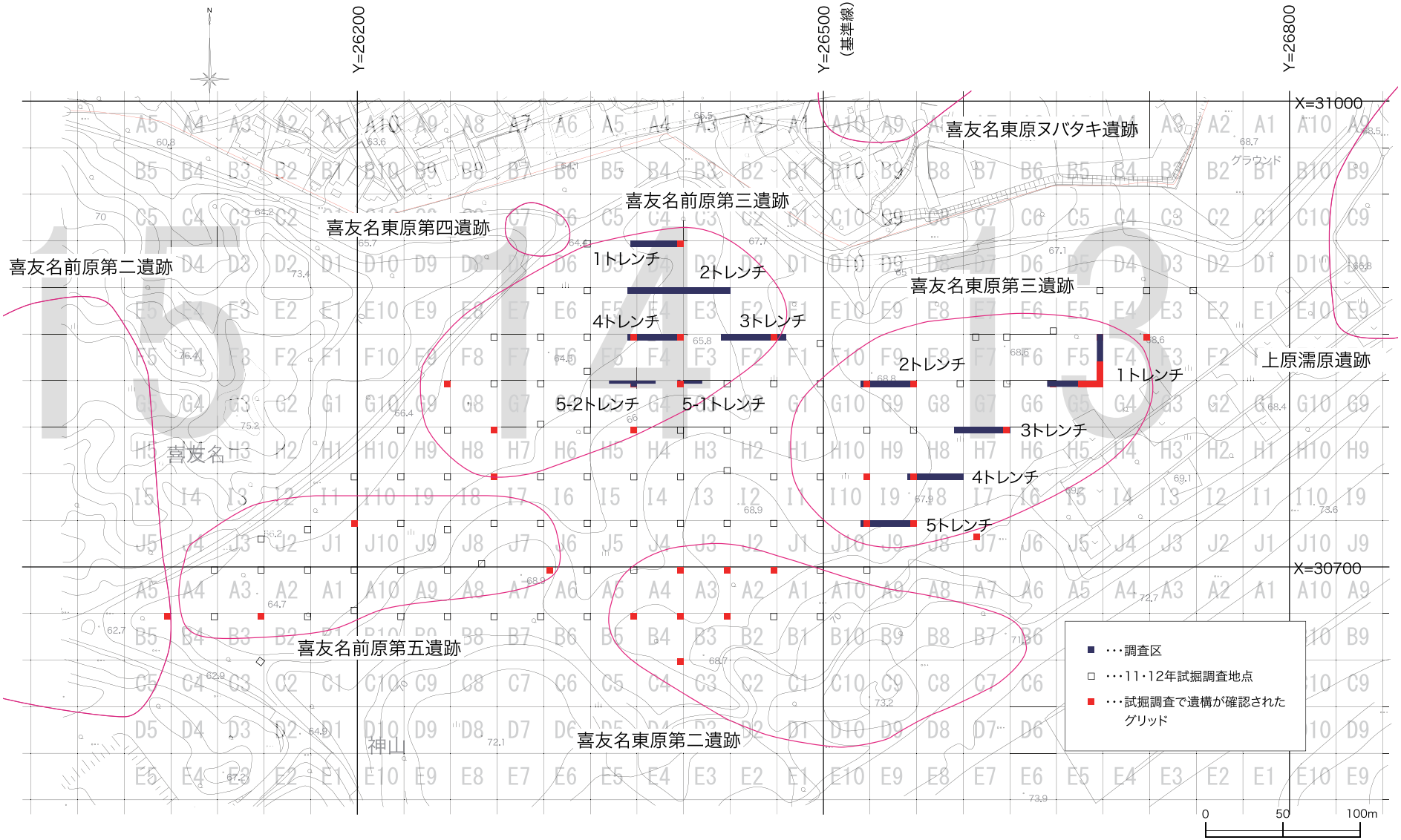
3. 前原４トレンチ　14-F4- ウ　ピット堆積状況

図版3　基本層序

第１表　層序対応表

基本層序	時期・性格	主要な土層		喜友名前原第三遺跡						喜友名東原第三遺跡				
		土色	堆積物	1	2	3	4	5-1	5-2	1	2	3	4	5
地表面レベル (m)				64.8～65.3	64.8～65.5	65.8～66.3	65.0～65.3	65.5	65.1～65.3	68.0～68.5	67.3～68.7	67.9～68.6	67.5～68.1	67.5～67.9
Ⅰ層	表土・盛土	褐色	細～極細砂	10～30	10～40	20～80	20～70	10～20	20～50	50～160	10～130	10～100	10～100	10～100
Ⅱ層	旧表土・耕作土	黄褐色	細礫混シルト	30～100 溝・耕具痕	20～80 溝	20～80 溝	10～40 溝・耕具痕	20～60 溝	50 土坑・植栽痕	0～100	0～70 溝	0～30	10～40 溝	30～50 溝・耕具痕
ⅢA層	グスク時代～近世の堆積層	にぶい黄褐～褐色	シルト	0～10	0～30	×	30～50 植栽痕・溝	×	10～20 ピット	0～40	×	0～30	×	20～40
ⅢB層		暗褐色	シルト	×	×	×	10～30 ピット	0～10 柱穴	0～10	20～60 柱穴？・ピット	×	0～30 柱穴？	×	20～40 ピット・焼土
ⅢC層		暗褐～褐色	シルト	×	×	×	0～30 ピット・焼土	×	0～10	×	×	×	×	0～20 ピット
ⅣA層	縄文時代後・晩期の堆積層	暗褐色	シルト	0～10 焼土	0～10	0～10	0～10	×	0～10	×	×	×	×	0～40 ピット
ⅣB層		黒褐～褐色	シルト～細砂	×	×	×	×	×	×	0～100 ピット	×	×	×	×
Ⅴ層マージ検出レベル (m)				64.4～64.9	64.4～65.2	64.8～65.8	63.7～64.6	64.9～65.3	64.0～64.5	65.2～67.5	67.0～67.5	67.0～67.8	67.2～67.6	66.0～66.9
ⅤA層	島尻マージ	暗褐～褐色	シルト（マンガン斑多）	0～70	0～70	0～160	10～50	0～40+	0～60+	20～110	0～60	0～30	0～60	0～70
ⅤB層		明褐色	シルト	50～130+	20～120+	20～100	0～50	20～	40～	180～280	20～110+	10～60	30～60	50～90
ⅤC層		褐～黄褐色	砂混シルト	20～50	20～40	0～50	30～50	未	未	50～	50～90+	10～50	20～50	80～
ⅤD層		暗褐～黄褐色	粘土～シルト	30～80	50～70	50～100	50～100	未	未	50～	30～	0～30+	0～20+	未
Ⅵ層（琉球石灰岩）検出最高レベル (m)				64.0	64.3	64.8	63.1	未	未	61.0	66.7	67.2	66.9	未

※1　遺跡名の下段はトレンチ番号
※2　その下段は各層の厚さと、遺構が確認された場合は種別を表記 (cm 単位)
※3　遺構の種別は、遺構記号ではなく、一般的な用語としての溝・耕具痕・柱穴・植栽痕・ピット（性格が不明なもの）として表示した



第５図　平成１７年度調査範囲図

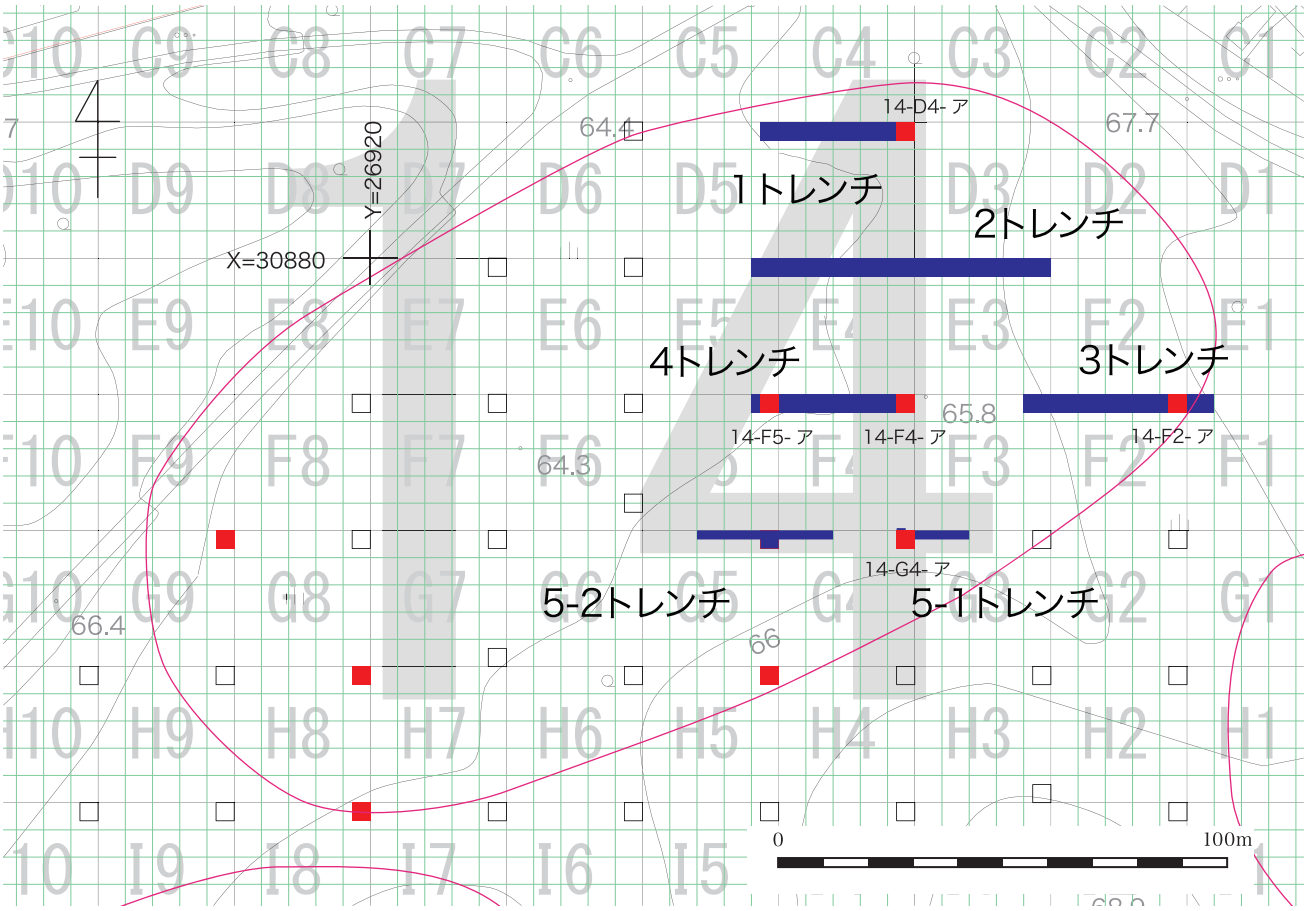
第５章　喜友名前原第三遺跡

第１節　概要

喜友名前原第三遺跡は、先述のように平成 11・12 年度の試掘調査により周知の遺跡として認識されている。普天間飛行場内の中央北側、現在はススキ等が生い茂るなだらかな平坦地に位置している。現地表面の標高は北西側が約 65mで、南東側がやや高くなり約 66mである。本遺跡の近辺には、この普天間飛行場内の試掘調査で確認された喜友名東原第四遺跡が北西側、喜友名東原第三遺跡が南東側、喜友名前原第五遺跡が南西側、喜友名東原第二遺跡が南東側に位置しており、非常に遺跡の分布が密集しているところと言える（第５図）。しかしながら、現時点ではこれらの遺跡の範囲確認調査は行っておらず、その内容はまだ明らかとは言えない。

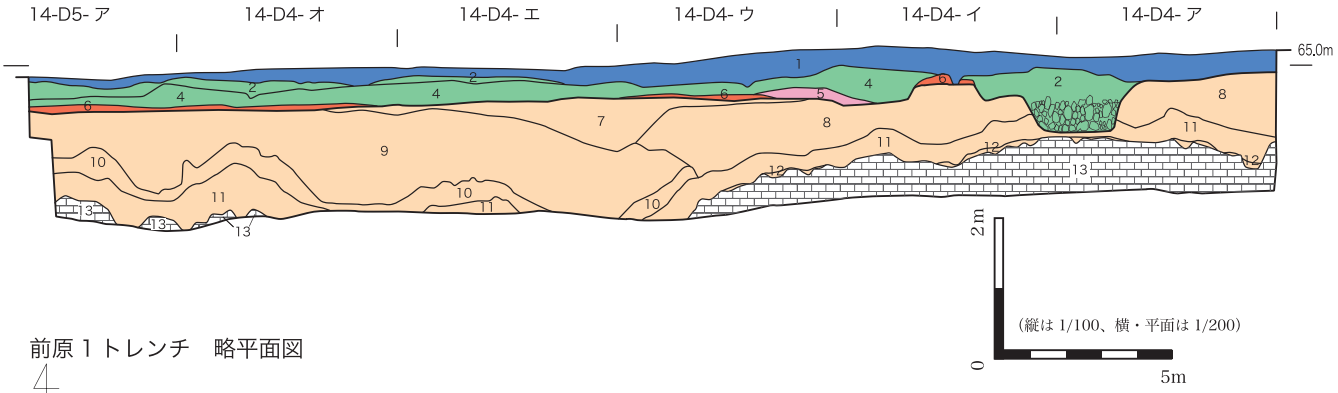
今回の調査区（第６図）は、試掘調査においてピット等の遺構が確認されたとする 14－D4－ア・Ｆ２－ア・Ｆ４－ア・Ｆ５－ア・Ｇ４－アの範囲、つまり遺跡の東半に当たる部分である。今回は、これらのグリッドをつなぐように東西方向のトレンチを６本の調査を行うことになった。現地表面では比較的平坦で標高 65mの地点が多いが、最も東側の３トレンチは 66mとやや高い地点にある。

以下、トレンチごとに基本層序（ローマ数字）に基づき、層序や遺構について記述する。そのため、各トレンチで確認されていない層序番号も存在する。断面図の土層で示している算用数字は現地調査で付した土層番号であり、基本層序との対応関係は各トレンチの層序表で記している。遺構の埋土等で細分が必要な場合は（）を付して、算用数字の土層番号で示している。遺物はその概要を記し、必要に応じて個々の写真を掲載し、説明を加えた。

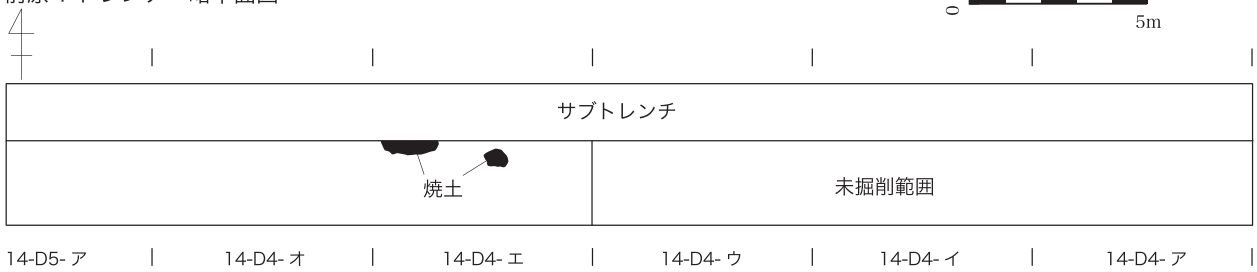


第6図　喜友名前原第三遺跡　トレンチ配置図

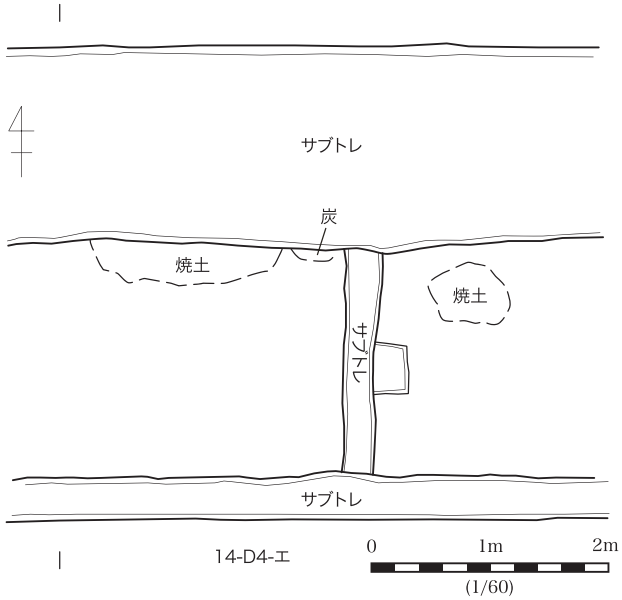
前原１トレンチ　北壁断面

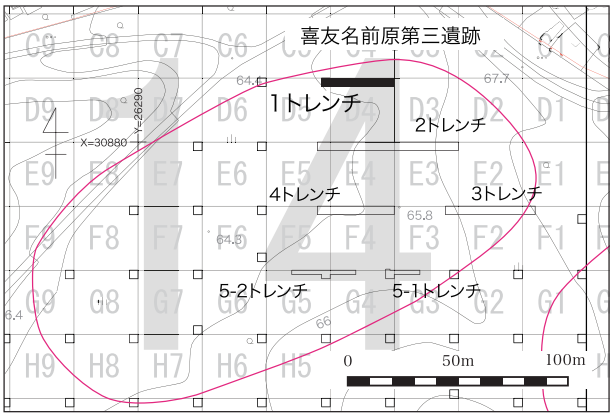


前原１トレンチ　略平面図



前原１トレンチ　ⅣA 面　遺構平面図





第７図　喜友名前原第三遺跡　１トレンチ　断面・遺構図

第２表　前原１トレンチ　層序表

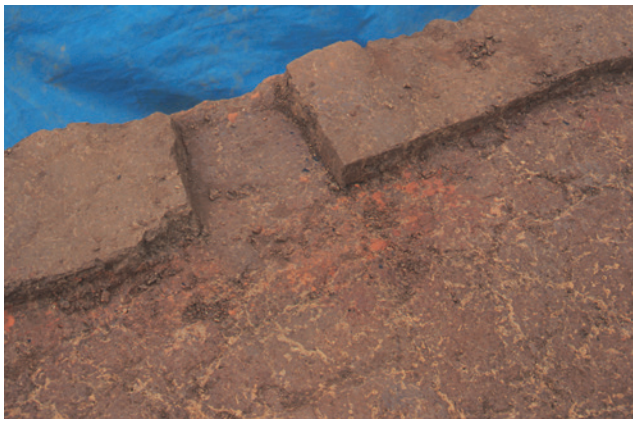
層序	土層No	土色		土質	混入物など
Ⅰ層	1	10YR 4/3	にぶい黄褐色	極細砂～細砂	石灰岩中礫が5%混入 腐葉土
Ⅱ層	2	10YR 4/4	褐色	シルト～極細砂	マンガン斑・粒あり
	3	10YR 4/4	褐色	極細砂	マンガン斑・粒あり
	4	10YR 4/4	褐色	シルト～極細砂	7.5Y5/8明褐色ブロックが5%混入　5層よりもマンガン斑・粒が少ない
ⅢA層	5	10YR 4/3	にぶい黄褐色	シルト～極細砂	7.5Y5/8明褐色ブロック10%混入　マンガン斑・粒あり
ⅣA層	6	10YR 3/4	暗褐色	シルト～極細砂	マンガン粒・赤色粒 1～5層よりも硬くしまる
VA層	7	7.5YR 3/4	暗褐色	シルト～極細砂	縦状痕・マンガン粒含
VB層	8	7.5YR 5/8	暗褐色	シルト	中砂～細砂が混入
	9	7.5YR 5/8	暗褐色	シルト	上方はマンガン斑あり
VC層	10	10YR 5/8	黄褐色	シルト	細砂～中砂が多く混入
VD層	11	10YR 6/6	暗黄褐色	粘土～シルト	下方は10YR5/8黄褐色粘土を呈する部分あり
	12	7.5YR 3/4	暗褐色	粘土～シルト	
VI層	13	2.5Y 8/4	淡黄色	風化岩盤	風化が進み塊状に割れている

1.　トレンチ全景 (東より)

2.　1 トレンチ西側 (14-D5- ア、B4- オ) 北壁断面

3.　1 トレンチ東側 (14-D4- ア・イ) 北壁断面

4.　1 トレンチ中央部 (14-D4- ウ・エ) 北壁断面



5.　1 トレンチ　Ⅳ層面　焼土検出状況

6.　1 トレンチ　Ⅱ層下面　耕具痕検出状況

7.　1 トレンチ　Ⅴ層面　耕具痕半裁状況

図版4　喜友名前原第三遺跡　1トレンチ

第２節　１トレンチ（第７図、図版４）

喜友名前原第三遺跡の範囲の最北端にあたり、長さ 34m、幅４mのトレンチで、地表面は標高 64.8～65.3m の平坦地である。調査は北壁側に幅１mのサブトレンチを設定後、Ⅰ層は全範囲を掘削したが、Ⅱ層以下は遺構の有無の確認のためⅣA層が堆積している14－Ｄ４－エから西側に14－Ｄ５－アにかけてⅣB面まで掘削した。

層序（第２表）　Ⅰ層（土層の厚さ＜以下省略＞10～30cm）、Ⅱ層（厚さ 30～100cm）、ⅢA層（0～10cm）、ⅣA層（0～10cm）が堆積しており、マージは 64.4～64.9m、岩盤は 14－Ｄ４－ウより東側において 64.0m より下位で確認した。Ⅰ・Ⅱ層はほぼ全域で見られるが、ⅢA層は 14－Ｄ４－ウでごく一部、ⅣA層は 14－Ｄ４－ウより西側で部分的に見られる。

遺構（第７図）　Ⅱ面、ⅣA面の遺構が確認されている。

Ⅱ面　14－Ｄ４－ア・イにおいて幅５m、深さ 0.9m、断面が台形状で拳から人頭大の石が詰められた遺構が断面で確認できたが、その平面形は検出しておらず、性格は不明である。また 14－Ｄ４－エでは、Ⅱ層を埋土とする一辺５～10cm で平面が三角形を呈した耕具痕が確認されている。

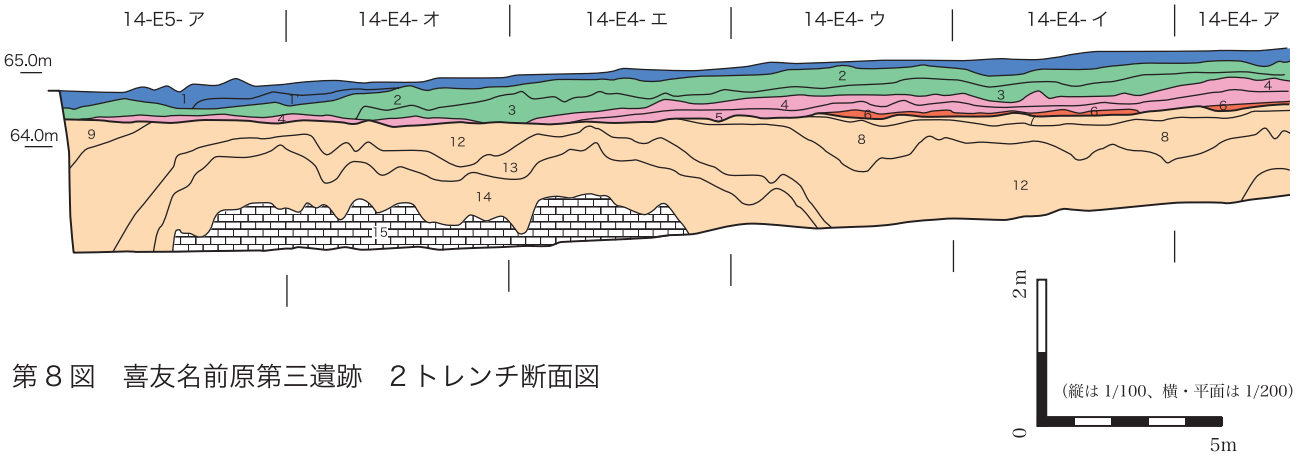
ⅣＡ面　焼土面が２ヶ所、炭が集中する地点が 14－Ｄ４－エで見られる。このグリッドでは、後述するようにⅣA層より土器、石材が出土している。今回の調査区でも東側は掘削しておらず、焼土面が見られることから、この周辺に竪穴建物跡などが存在する可能性も想定されるので、更なる注意が必要と思われる。

遺物（図版５）　Ⅰ層から近現代陶磁器、Ⅱ層から沖縄産陶器、ⅣA層から土器・石材が出土している。

１は土器胴部片、明褐色、石灰等が多く混入、厚さ５mm、縄文後・晩期。14－Ｄ４－エ　ⅣB（６）層出土。

２は土器胴部片、明褐色、石英等が混入、厚さ７mm、縄文後・晩期。14－Ｄ４－エ　ⅣB（６）層出土。

図版5　喜友名前原第三遺跡　1･3･4トレンチ出土遺物



第８図　喜友名前原第三遺跡　２トレンチ断面図

第３表　前原２トレンチ　層序表

層序	土層No.	土色		土質	混入物など
Ⅰ層	1	7.5YR　4/4	褐色	細砂	
Ⅱ層	2	10YR　4/6	褐色	細砂	石灰岩中礫混入　マンガン斑あり
	3	10YR　5/8	黄褐色	極細砂	石灰岩中礫混入
ⅢA層	4	10YR　4/6	褐色	シルト	マンガン粒あり
	5	10YR　4/4	褐色	シルト	マンガン粒あり　1～3層よりも固くしまる
ⅣA層	6	10YR　3/4	暗褐色	シルト	マンガン粒・赤色粒を極僅かに含む
ⅤA層	7	7.5YR　4/4	褐色	シルト	10TR5/6黄褐色粘土が斑状に混入　マンガン粒あり
	8	7.5YR　4/6	褐色	シルト	10TR5/6黄褐色粘土が斑状に混入　マンガン粒あり
	9	10YR　3/4	暗褐色	シルト	マンガン斑強い
ⅤB層	10	7.5YR　5/6	暗褐色	シルト～極細砂	10TR5/6黄褐色粘土が斑状に混入し下方はやや粘性が強い　マンガン斑あり
	11	7.5YR　5/6	暗褐色	シルト～極細砂	12層上位と比べると粘性が強い。
	12	7.5YR　4/6	褐色	シルト	マンガン粒あり
ⅤC層	13	10YR　5/8	暗褐色	シルト	中砂混入　一部黒ずんでおり、マンガンの影響と見られる
ⅤD層	14	10YR　5/6	黄褐色	シルト～粘土	
Ⅵ層	15	2.5YR　8/4	淡黄	琉球石灰岩盤	風化が進み塊状に割れている

第３節　２トレンチ（第８図、図版６）

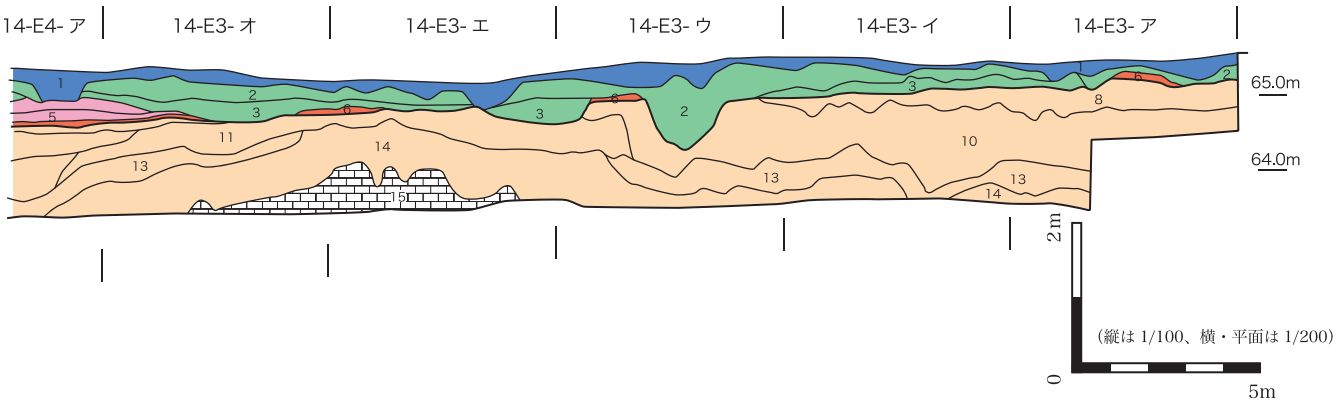
１トレンチより南側 30mに位置し、長さ 66m、幅４ｍのトレンチで、地表面は標高 64.8～65.5ｍで全体的には平坦地である。

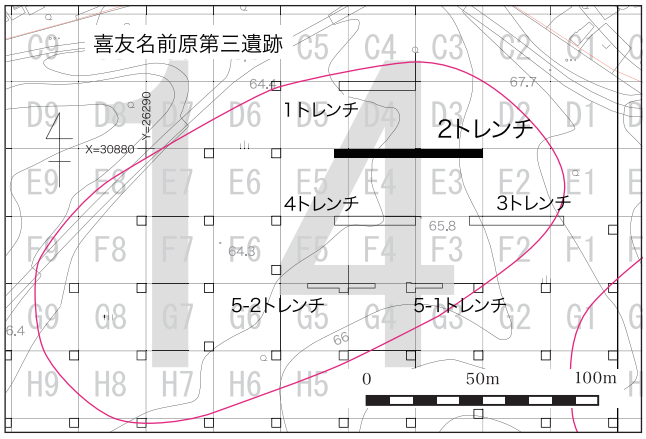
調査は北壁側に幅１ｍのサブトレンチを設定後、Ⅰ層は全範囲を掘削したが、断面観察では明確な遺構は確認できなかったので、それ以下は掘削しなかった。

層序（第３表）　Ⅰ層（10～40cm）、Ⅱ層（20～80cm）、ⅣA層（0～10cm）が堆積しており、マージは 64.4～65.2m、岩盤はトレンチ西側と中央部で 64.3mより下位で確認した。Ⅰ・Ⅱ層はほぼ全域、ⅢA層は 14－Ｅ４－ア～ウで見られている。一方、ⅣA層は全域で部分的に見られているため、本来はほぼ全域に堆積していた可能性がある。

遺構　Ⅱ面の遺構が断面で確認されており、14－Ｅ３－ウで幅２ｍ、深さ１ｍ、断面U字形の遺構が断面で確認されており、南北方向の溝と考えられる。

遺物　Ⅰ層より近現代陶磁器と沖縄産陶器が出土している。





2.　2 トレンチ中央部 (14-E4- ア・イ) 北壁断面

1.　2 トレンチ全景 (東より)

3.　2 トレンチ東側 (14-E3- イ・ウ)　北壁断面

4.　2 トレンチ西側　(14-E5- ア・E4- オ)　北壁断面

図版6　喜友名前原第三遺跡　2トレンチ

第４節　３トレンチ（第９図、図版７）

２トレンチの南東 30mに位置し、長さ 42m、幅４mのトレンチで、地表面は標高 65.8～66.3mと、他のトレンチよりもやや高くなった地点である。

調査は北壁側に幅１mのサブトレンチを設定後、Ⅰ層は全範囲を掘削したが、断面観察では明確な遺構は確認できなかったので、それ以下は掘削しなかった。

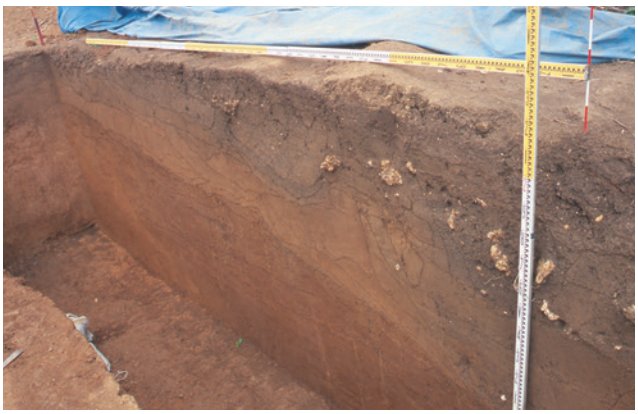
層序（第４表）　Ⅰ層（20～80cm）、Ⅱ層（20～80cm）、ⅣA層（0～10cm）が堆積しており、マージは 64.8～65.8m、岩盤はトレンチ中央部で 64.8mより下位で確認した。Ⅰ・Ⅱ層は全域で見られるが、ⅣA層は 14－Ｆ２－イより東側に堆積している。

遺構　Ⅱ面の遺構が断面で確認されており、14－Ｆ３－アで数度の掘り直しが見られる幅約２m、深さ約 0.5～1.0mの溝がある。

遺物（図版５）　Ⅰ層より、近現代陶磁器、沖縄産陶器、そしてタイ産褐釉陶器が出土している。

３は褐釉陶器の壺胴部片である。釉が黒褐色で細かなひびが多く、胎土が赤灰色を呈することからタイ産のものと思われる。しかし、縦方向の突帯が見られるなどあまり見られない資料である。14－Ｆ２－ア　Ⅰ層出土。

1.　３トレンチ全景 (東より)

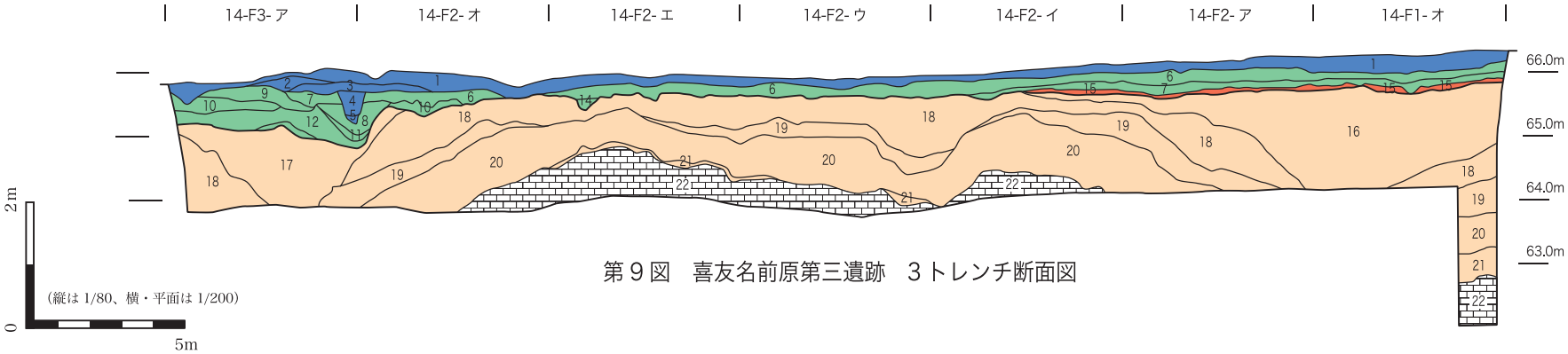


2.　３トレンチ (14-F3- ア) 北壁断面

3.　３トレンチ　中央部　(14-F2- ウ・エ) 北壁断面

4.　３トレンチ　東側 (14-F2- ア・F1- オ) 北壁断面

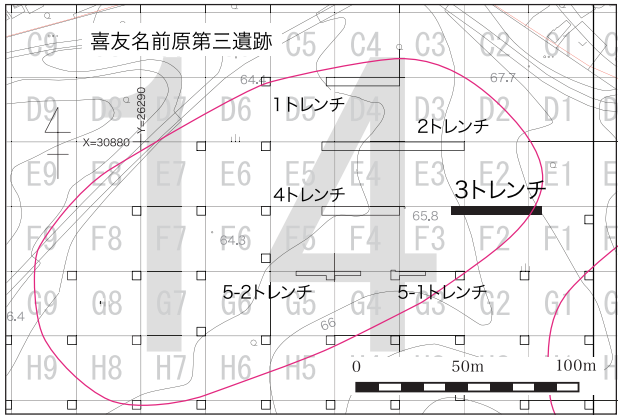
図版7　喜友名前原第三遺跡　3トレンチ



第９図　喜友名前原第三遺跡　３トレンチ断面図

第４表　前原３トレンチ層序表

層序	土層No.	土色		土質	混入物など
Ⅰ層	1	10YR　4/4	褐色	極細～細砂	石灰岩中礫混入
	2	10YR　4/3	にぶい黄褐色	シルト～極細砂	石灰岩中礫多い
	3	10YR　5/3	にぶい黄褐色	極細～細砂	石灰岩中礫混入するが２層より少ない
	4	10YR　4/6	褐色	シルト～極細砂	石灰岩中礫多い
	5	10YR　4/6	褐色	シルト	石灰岩中礫少ない
Ⅱ層	6	10YR　5/6	黄褐色	極細砂	7.5YR5/8 明褐色粘土ブロック　マンガン粒あり
	7	10YR　4/4	褐色	極細砂	マンガン粒、赤色粒多い
	8	10YR　4/6	褐色	極細砂	石灰岩中礫、マンガン粒わずかに混入
	9	10YR　4/4	褐色	シルト～極細砂	マンガン粒、赤色粒含む
	10	10YR　5/6	黄褐色	シルト	マンガン粒やや多い
	11	10YR　5/8	黄褐色	極細～細砂	
	12	10YR　6/8	明黄褐色	極細～細砂	マンガン斑あり
	13	10YR　6/8	明黄褐色	シルト～極細砂	マンガン斑 12 層よりさらに多い
	14	10YR　4/4	褐色	シルト～極細砂	7.5YR5/8 明褐色粘土ブロック混入
ⅣA 層	15	10YR　3/4	暗褐色	シルト～極細砂	上層よりもしまりが良く 18 層の影響を受ける。マンガン粒、赤色粒多い。
ⅤA 層	16	7.5YR　3/4	暗褐色	シルト～極細砂	7.5YR　5/8 明褐色シルト混入　縦状の乾裂が多く、周囲にはマンガン斑あり　マンガン粒あり
	17	7.5YR　4/6	褐色	シルト～極細砂	縦状の乾裂が多い　マンガン粒は 16 層よりも少し多い
ⅤB 層	18	7.5YR　5/8	明褐色	シルト	石灰岩中礫～細砂が 5% 混入　上方、特に F2 側はマンガンにより 7.5YR　3/4 暗褐色化を呈する
ⅤC 層	19	10YR　5/8	黄褐色	シルト	細砂～中砂が多く混入
ⅤD 層	20	10YR　6/6	明黄褐色	粘土～シルト	下方、10YR5/8 黄褐色粘土化する
	21	7.5YR　3/4	暗褐色	粘土～シルト	
Ⅵ層	22			琉球石灰岩盤	風化が進み塊状に割れている



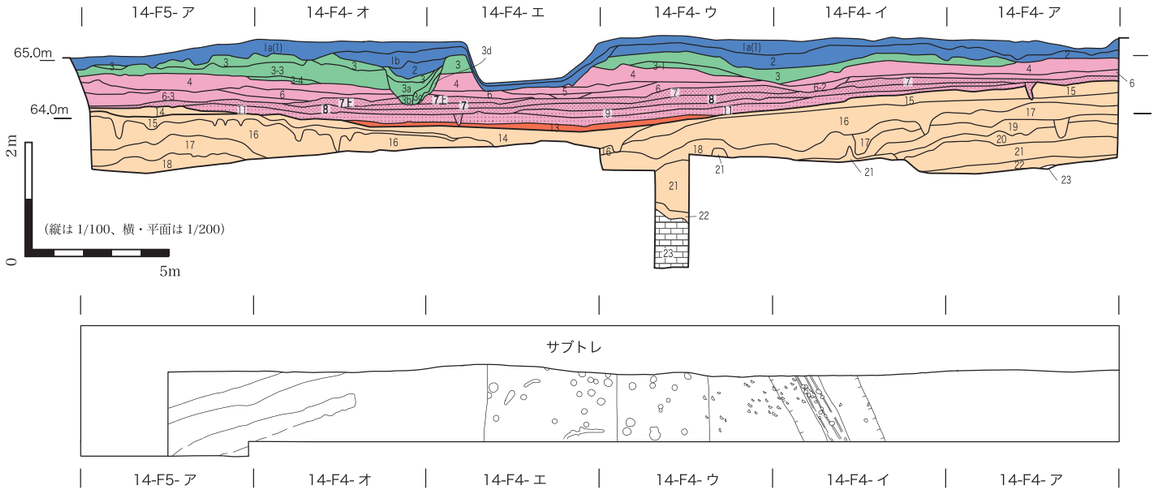
第５節　４トレンチ（第10図、図版８～12）

２トレンチからは南側30m、また３トレンチからは西側24mに位置し、長さ36m、幅４mのトレンチで、地表面は標高65.0～65.3mと、３トレンチよりは１mほど低い地点にあたる。調査は北壁に幅１m、部分的に1.5mのサブトレンチを掘削後、Ⅰ層までは全範囲までは全範囲を掘り下げ、それより下層は断面により遺構が確認

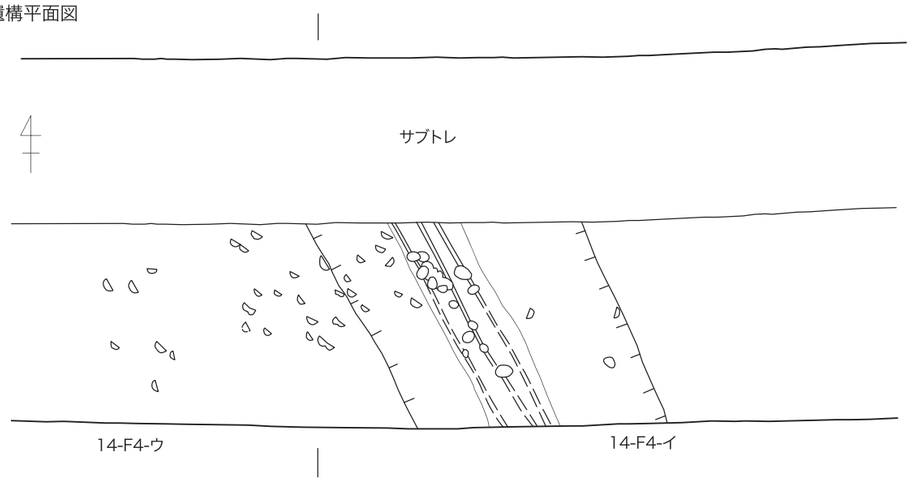
第５表　前原４トレンチ　層序表

層序	土層No.	土色		土質	混入物など
Ⅰ層	1	10YR　4/6	土褐色	シルト	腐葉土
	2	10YR　4/4	褐色	シルト～極細砂	
Ⅱ層	3	10YR　5/6	黄褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルトがブロックで5%混入　赤色粒、マンガン粒5%含む
	3-2	10YR　5/4	にぶい黄褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルトがブロックで30%混入　マンガン粒、赤色粒５%含
	3-3	10YR　4/4 - 4/6 間	黄褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルトがブロックで1%混　マンガン粒、赤色粒５%含
	3-4	10YR　5/6 - 4/6 間	黄褐色～褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルトがブロックで3%混　マンガン粒、赤色粒５%含
	溝－a	10YR　5/8	黄褐色	シルト～極細砂	10YR 4/4 褐色シルトがブロックで15%混　マンガン粒、赤色粒５%含
	溝－b	10YR　6/7	明黄褐	極細砂	10YR 4/4 褐色シルトがブロックで20%混　マンガン粒、赤色粒１%含
	溝－c	10YR　6/6	明黄褐	極細砂	10YR 4/4 褐色シルトがブロックで20%混　マンガン粒、赤色粒１%含
	溝－d	10YR　6/5	明黄褐	極細砂	10YR 4/4 褐色シルトがブロックで20%混　マンガン粒、赤色粒１%含
ⅢA 層	4	10YR　4/6	褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルトがブロックで10%混。マンガン粒、赤色粒5%含
	5	10YR　4/6	褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルトがブロックで3% 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルトがブロックで5%混　マンガン粒、赤色粒3%含
	6	10YR　4/6 - 4/4 間	褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルトがブロックで3% 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルトがブロック10%混　マンガン粒、赤色粒5%含
	6-2	10YR　4/4	褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルトがブロックで10%混　マンガン粒、赤色粒5%含
	6-3	10YR　4/4	褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルトがブロックで2%混　マンガン粒、赤色粒5%含
ⅢB 層	7 上	10YR　3/4	暗褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルトがブロックで1%混　マンガン粒、赤色粒5%含
	7	10YR　3/4	暗褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルトがブロックで1%混　マンガン粒、赤色粒3%含
	8	10YR　3/3	暗褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルトがブロックで1%混　マンガン粒、赤色粒5%含
ⅢC 層	9	10YR　4/6 - 3/4 間	褐色～暗褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルトがブロックで30%混　マンガン粒、赤色粒5%含
	10	欠番			
	11	10YR　4/4 - 3/4 間	褐色～暗褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルトがブロックで7%混　マンガン粒、赤色粒3%含
	12	欠番			
ⅣA 層	13	10YR　2/3	黒褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルトがブロックで1%混　マンガン粒、赤色粒3%含
VA 層	14	7.5YR　3/4	暗褐色	シルト	マンガン粒3%含　乾裂が極めて多い
	15	7.5YR　4/4	褐色	シルト	マンガン粒1%含
VB 層	16	7.5YR　5/8	明褐色	粘土～シルト	石灰岩細礫2%混
	17	7.5YR　5/6	明褐色	粘土～シルト	石灰岩細礫10%混
VC 層	18	7.5YR　6/8 - 5/6	橙～明褐色	シルト	石灰岩細礫40%混
	19	7.5YR　6/8 - 5/6	橙～明褐色	シルト	石灰岩細礫20%混
	20	7.5YR　5/6 - 5/8 間	明褐色	シルト	石灰岩細礫10%混
VD 層	21	10YR　6/6	明黄褐色	粘土～シルト	
	22	10YR　5/6	黄褐色	粘土～シルト	粘質は比較的強い
Ⅵ層	23			琉球石灰岩盤	風化が進み塊状に割れている

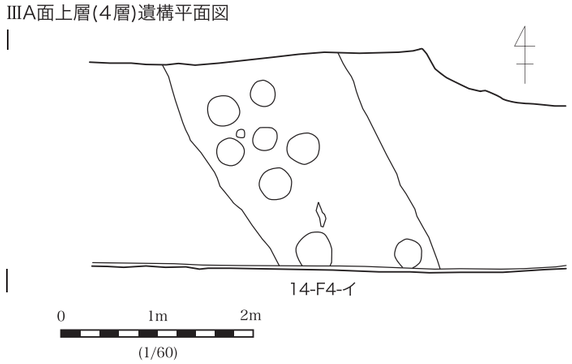
前原４トレンチ　北壁断面図



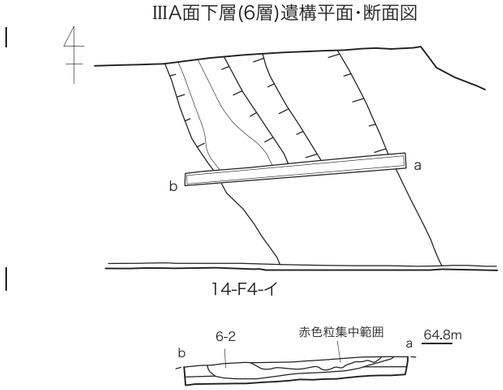
II面遺構平面図



IIIA面上層(4層)遺構平面図

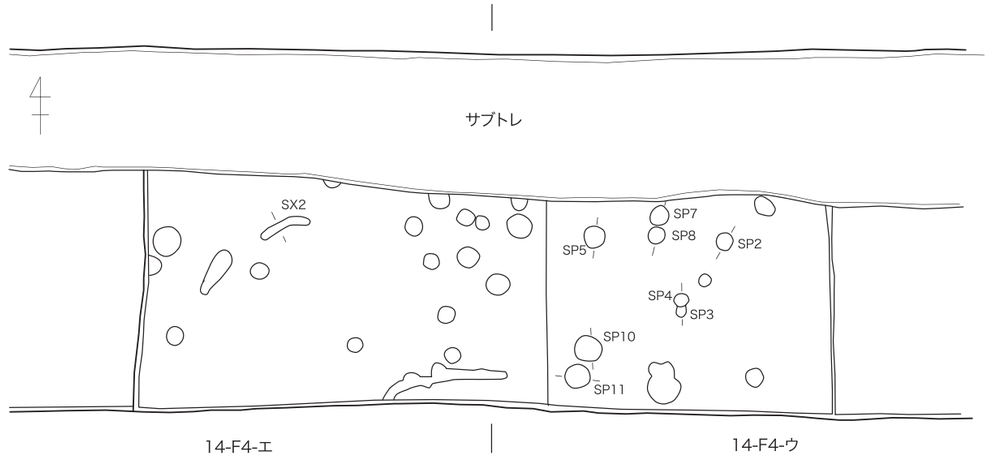


IIIA面下層(6層)遺構平面・断面図

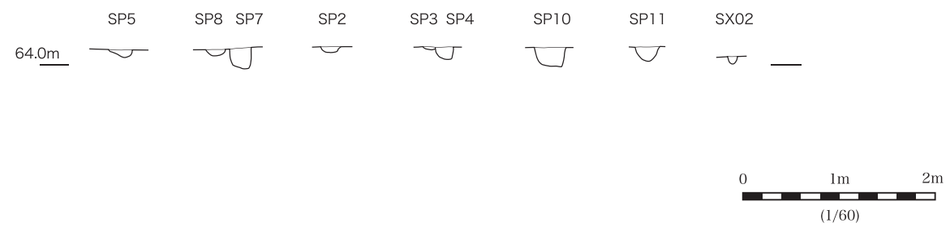


第 10 図　喜友名前原第三遺跡　４トレンチ　断面・遺構図

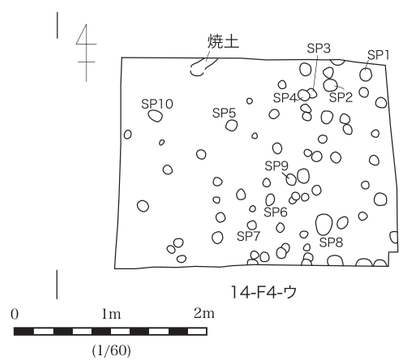
IIIB 面遺構平面・断面図

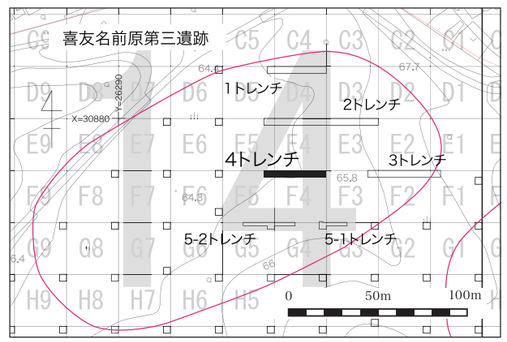


IIIB 面ピット断面図



IIIC 面遺構平面図





1.　４トレンチ全景 (西から)

3.　４トレンチ全景 (東から)

3.　４トレンチ　中央部 (14-F4- ウ) 北壁断面

図版8　喜友名前原第三遺跡　4トレンチ(1)

1.　4トレンチ西側(14-F5-ア･F4-オ)北壁断面

2.　４トレンチ東側 (14-F4- ア・イ) 北壁断面

3.　４トレンチ西側 (14-F5- ア) II 面　遺構検出状況

4.　４トレンチ東側 (14-F4- イ) II 面遺構検出状況 (部分)

5.　４トレンチ東側　II 面 (14-F4- イ) 遺構検出状況

図版9　喜友名前原第三遺跡　4トレンチ(2)

されたⅡ層までは14－４Ｆ－エより14－Ｆ４－アの長さ22mの範囲、ⅢＢ層までは14－Ｆ４－ウ・エにおいて長さ８ｍの範囲、ⅣＡ層までは14－Ｆ４－ウの長さ３ｍの範囲と部分的に掘り下げた。

層序（第５表）　Ⅰ層（20～70cm）、Ⅱ層（10～40m）、ⅢＡ層（30～50cm）、ⅢＢ層（10～30cm）、ⅢＣ層（0～30cm）、ⅣＡ層（0～10cm）が堆積しており、マージは63.7～64.6m、岩盤は深掘りを行った14－Ｆ４－ウの63.1mで確認しており、周辺のトレンチよりも１ｍほど低い。Ⅰ～ⅢＢ層は全域、ⅢＣ層は14－Ｆ４－オより東側、ⅣＡ層は 14－Ｆ４－ウよりオの間で確認されており、全体的にトレンチ中央部である 14－Ｆ４－エが 0.5ｍほど低くなっている。最下層のⅣＡ層は東西端が標高約 64mであるが、中央部に当たる 14－Ｆ４－エ付近は63.5mとなっている。このことから東西に落ち込む緩やかな迫地となっており、この地形に沿って各層は堆積していたようだ。

遺構（第10図）　Ⅱ・ⅢＡ～Ｃ面で確認している。

Ⅱ面　14－Ｆ５－アからＦ４－オにかけて、東へ 70°の方向で、幅 0.7m、深さ 0.8mの溝があり、すぐ南側にもほぼ同規模の溝を確認したが掘削は行っていない。14－Ｆ４－イ～ウにおいて、幅 2.5m、深さ約 10cmの浅い溝に三角形もしくは半月状、細長い鋤溝状の耕具痕が見られる。

ⅢＡ面　Ⅱ面で耕具痕が確認できた 4－Ｆ４－イにおいて、径約 30cm の円形プランが８基確認できた。これらには、赤色粒が多く混じるが、その深さは５cm 程度である。その平面形態からは、普天間飛行場内では野嵩タマタ原遺跡や大謝名軍花原第二遺跡などで確認されているいわゆる植栽痕とする列状ピットに類している（宜野湾市 2006・県埋文 2006）。この列状ピットが確認されている範囲の下層には、西へ 20°の方向で、幅２ｍ、深さ 10cm の皿状を呈した６－２層が堆積しており、何らかの関連性が考えられよう。

ⅢＢ面　14－Ｆ４－ウ・エにおいて、径約 20cm、深さ 10～20cm のピットが 29 基見られるが、柱穴と考えられるには深さがやや浅く断面形も丸底であるが、列状ピット群や耕具痕に比べると深く、その性格は断定できない。埋土は全体的に暗褐色を呈し、赤色粒の集中は見られないことが、ⅢＡ層やⅢＣ層とは異なる。また、14－Ｆ４－エでは、幅 10cm、深さ 10cm の断面Ｖ字形の掘り形を呈する円弧状遺構（ＳＸ）が３基確認されており、近年、類例が天界寺跡（沖縄県埋文 2002、山本 2003）や嘉数トゥンヤマ遺跡（宜野湾市 2010）などでも見られ、竪穴建物跡の周溝とする見解もある。

ⅢＣ面　14－Ｆ４－ウにおいて、径 10cm、深さ５cm 以下のピットが 69 基見られるが、先述のⅢＢ面より更に規模が小さい。埋土はⅢＣ上層（９層）で、焼土と考えられる赤色粒が多く見られる。なお、焼土面も見られるのでこの面で何らかの火を使った活動があったものと想定される。また、ⅢＣ下層の 11 層においても焼土面が見られている。

1.　４トレンチ　東側 (14-F4- イ)ⅢA 面遺構検出状況

2.　４トレンチ　東側 (14-F4- イ)ⅢA 面　SP2 半裁状況

図版10　喜友名前原第三遺跡　4トレンチ(3)

3.　4トレンチ中央 (14-F4- ウ・エ)ⅢB 面　遺構検出状況 (東から)

2.　4トレンチ中央 (14-F4- ウ・エ)ⅢB 面　遺構検出状況 (西から)

3.　4トレンチ中央 (14-F4- ウ・エ)ⅢB 面　SP2 半裁状況

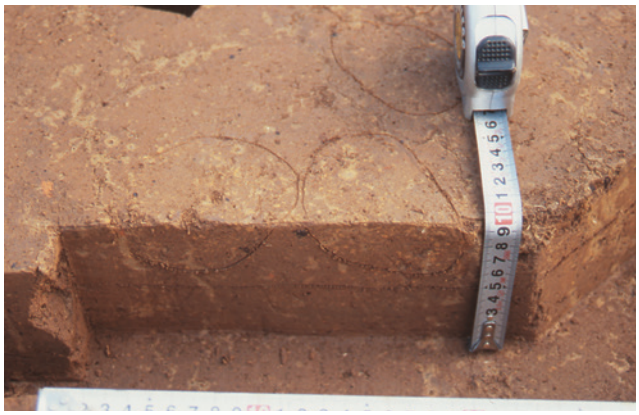
4.　4トレンチ中央 (14-F4- ウ・エ)ⅢB 面　SX2　半裁状況

5.　4トレンチ中央 (14-F4- ウ・エ)ⅢB 面　SP7(右)SP8(左)
半裁状況

図版11　喜友名前原第三遺跡　4トレンチ(4)

1.　4トレンチ中央部(14-F4-ウ)ⅢC面　遺構検出状況

2.　４トレンチ中央部 (14-F4- ウ)ⅢC 面　遺構検出状況 (拡大)



3.　４トレンチ (14-F4- ウ)ⅢC 面　SP3(左)SP4(右) 半裁状況

4.　４トレンチ中央部 (14-F4- ウ)ⅢC 面　SP1　半裁状況

図版12　喜友名前原第三遺跡　4トレンチ(5)

遺物（図版５）　Ⅰ層より近現代陶磁器と沖縄産陶器、Ⅱ層より沖縄産陶器・石材、ⅢA層より沖縄産陶器、石材、ⅢB層より石材、ⅢC層より土器・石材、ⅣA層より石材が出土している。

４は輝緑岩製磨石片。非常に研磨されており、全体的に赤変しており火を受けたものと思われる。長さ 5.0cm。14－Ｆ４－ウ　ⅢB（７）層出土。

５はチャートの石核で、剥離面が５面あり、その内２面にネガティブバルブが見られる。長さ 3.7cm、幅 2.2cm、厚さ 1.6cm。14－Ｆ４－ウ　Ⅱ層出土。

６は中国産褐釉陶器壺の胴部。４トレンチから東に 30m離れた 14－Ｆ６－ナ付近での表採。

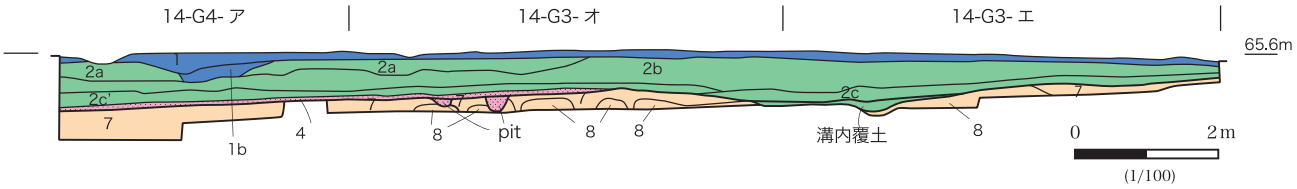
第６節　５－１トレンチ（第 11 図、図版 13）

４トレンチの南東側 30mに位置し、長さ 14m、幅は２ｍで東端が４×４ｍとしたトレンチで、地表面が標高 65.5mと周辺よりはわずかに高い地点に当たる。試掘調査では 14－Ｇ４－アにおいてマージ面でピットが確認されていたので、北壁に幅 0.7mのサブトレンチを設定し、土層を再確認してマージ面まで掘削した。

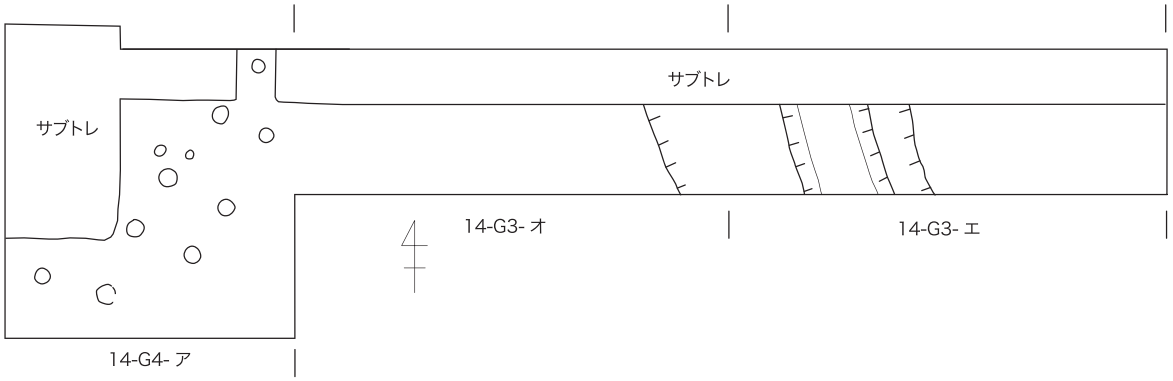
層序（第６表）　Ⅰ層（10～20cm）、Ⅱ層（20～60cm）、ⅢB 層（0～10cm）が堆積し、マージは 64.9～65.3ｍで確認しているが、岩盤は深掘りを行っていないので確認できていない。Ⅰ・Ⅱ層は全域、ⅢB層は 14－Ｇ３－オより西側で確認されている。

遺構（第 12 図）　Ⅱ面、ⅢB面で確認している。

前原 5-1 トレンチ　北壁断面



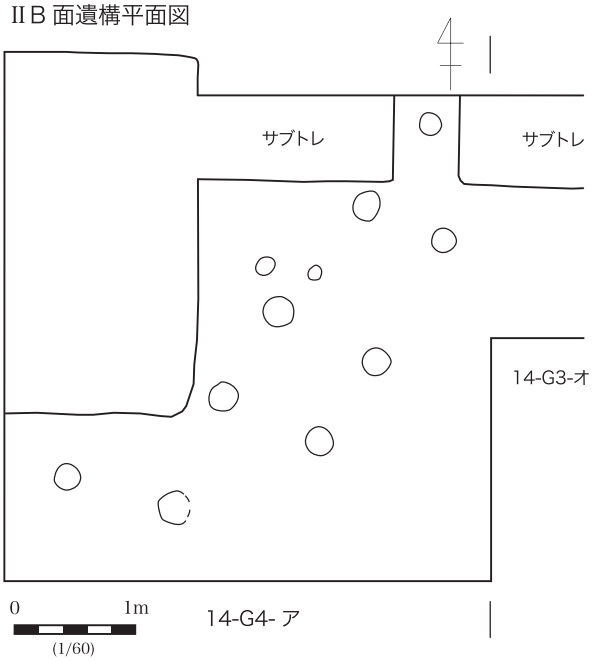
前原 5-1 トレンチ　全体平面図

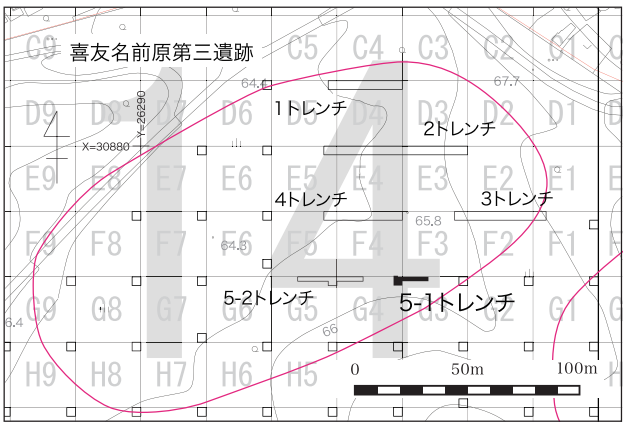


第 6 表　5-1 トレンチ　層序表

層序	土層 No.	土色		土質	混入物など
Ⅰ層	1 a	10YR　4/6	褐色	シルト	腐葉土
	1 b	10YR　4/4	褐色	シルト～極細砂	
Ⅱ層	2 a	10YR　5/6	黄褐色	シルト	7.5YR5/8 明褐色シルトがブロックで 5% 混　赤色粒、マンガン粒 5% 含
	2 b	10YR　5/4	にぶい黄褐色	シルト	7.5YR5/8 明褐色シルトがブロックで 30% 混　マンガン粒、赤色粒 5 % 含
	2 c	10YR　4/4 - 4/6 間	黄褐色	シルト	7.5YR5/8 明褐色シルトがブロックで 1% 混　マンガン粒、赤色粒 5 % 含
	2 c´	10YR　5/6 - 4/6 間	黄褐色～褐色	シルト	7.5YR5/8 明褐色シルトがブロックで 3% 混　マンガン粒、赤色粒 5% 含
ⅢB 層	4	10YR　3/4	暗褐色	シルト	7.5YR5/8 明褐色シルトがブロックで 1% 混　マンガン粒、赤色粒 3% 含
VA 層	7	7.5YR　4/4	褐色	シルト	マンガン粒 1% 含
VB 層	8	7.5YR　5/8	明褐色	シルト	

ⅡB 面遺構平面図





第 11 図　喜友名前原第三遺跡　5-1 トレンチ　断面・遺構図

1.　5-1トレンチ全景(東より)

2.　5-1 トレンチ全景 (西より)

3.　5-1 トレンチ中央部 (14-G3- オ) 北壁断面

4．5-1 トレンチ西側 (14-G4- ア) 北壁断面

5.　5-1 トレンチ西側 (14-G4- ア) 遺構検出状況

図版13　喜友名前原第三遺跡　5-1トレンチ

Ⅱ面　14－Ｇ３－エ・オにおいて、西へ15°の方向で、幅約３ｍ、深さ約30cmの溝が見られる。断面は全体的には浅い皿状で深さ10cmほどだが、中央部が20cmほど深くなっている。その性格は不明だが、耕作に関連する区画溝などが考えられようか。

ⅢＢ面　４×４ｍとトレンチを広げた14－Ｇ４－アにおいて径約20～40cmのピットが見られた。平面で確認したピットは掘削していないが、北壁断面でも確認されているものからは、深さは約20～40cmを測り、断面形　状は台形を呈し底面も平坦である。このような特徴から考えると、掘建柱建物跡の柱穴の可能性が高い。平面では９基、断面では確認できた２基を合わせて、11基を数える。２間×１間の建物プランが想定されるが、具体的な様相は今後の周辺の調査が必要であろう。

遺物（図版15）　Ⅰ層より沖縄産陶器・青磁、Ⅱ層より沖縄産陶器、清代青花が出土している。

11は、青磁碗の胴部片である。14－Ｇ４－ア　Ⅰ層出土。

第７節　５－２トレンチ（第12・13図、図版14）

５－２トレンチは５－１トレンチ西側14mに位置し、長さ30m、幅２ｍで中央部が４×６ｍとなっているトレンチで、地表面が標高65.1～65.3mとわずかに低い。調査は北壁に幅0.7mのサブトレンチを設定した後、Ⅱ層までは全範囲、ⅣＡ層までは14－Ｇ４－オより東側を掘り下げた。

層序（第７表）　Ⅰ層（20～50cm）、Ⅱ層（50cm）、ⅢＡ層（10～20cm）、ⅢＢ層（0～10cm）、ⅢＣ層（0～10cm）、ⅣＡ層（0～10cm）が堆積しており、マージは64.0～64.5mで確認しているが、岩盤は深掘りを行っていないので確認できていない。Ⅰ～ⅢＡ層は全域、ⅢＢ・Ｃ層は14－Ｇ５－アより東側で、ⅣＡ層は14－Ｇ４－オより東側で確認されている。５－１トレンチではⅣＡ層が確認されていないことと、トレンチ東端である14－Ｇ－エで標高が64.0mと最も低いことから、４トレンチの迫地がここまで延びているものと思われる。

遺構（第12・13図）　Ⅱ面、ⅢＡ面で確認されている。

Ⅱ面　14－Ｇ４－エにおいて２ａ層を埋土とした西へ35°の方向で、推定長辺約2.5m、短辺約1.8m、深さ約１ｍの土坑（ＳＫ１）が確認されている。その堆積は東へ一気に流れ込んでいる。同じグリッドの下層である赤色粒を含む２ｂ層を埋土とした径30cm、深さは約5cmのピットが見られ、列状ピット群、植栽痕の可能性がある。また、14－Ｇ５－イでは２ｂ層を埋土として、西へ45°の方向で、幅0.6m、深さ20cmの溝がある。

Ⅲ面　14－Ｇ４－エでは、10～30cmのやや不定形なピットが見られ、焼土と思われる赤色粒が集中して見られるが、深さは約5cmと浅い。先述したⅡ面のピットと同様な堆積であるが、整然ではない。

遺物（図版15）　Ⅰ層より近現代陶磁器・沖縄産陶器・土器・石材、Ⅱ層より沖縄産陶器・青磁・褐釉陶器・土器・石材、ⅢＡ層より沖縄産陶器・清代青花・石材、ⅢＣ層より土器・石材、ⅣＡ層より土器・石材が出土している。

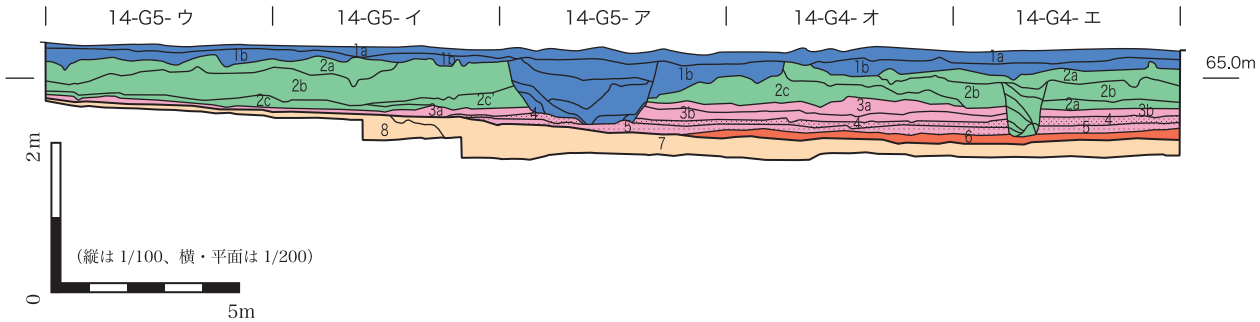
７は土器胴部片、明褐色、石英が混入、厚さ５mm、縄文後・晩期。14－Ｇ４－エ　ⅣＡ（６）層出土。

８は砂岩製磨石片で、端部に敲打痕が見られ、本来は楕円形を呈していたものと思われる。残存長2.5cm、残存幅6.1cm、厚さ4.8cm。非常に研磨されている。14－Ｇ５－ア　ⅢＡ（３）層出土。

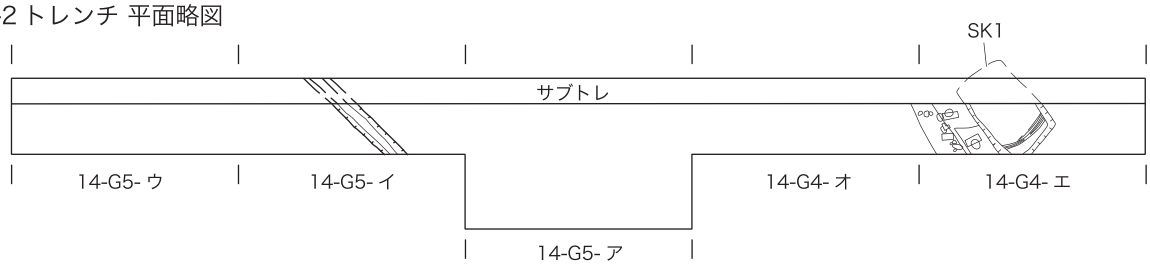
９は砂岩片で、明瞭な加工痕は見られない。長さ8.7cm、幅5.8cm、厚さ3.0cm。14－Ｇ４－エ　ⅢＡ（３ａ）層出土。

10は土器口縁片、黄褐色、石英・片岩等が多く混 入、厚さ６mm。内面は黒変が見られる。ゆるやかに外反する口縁をもち、仲原式。14－Ｇ４－エ　Ⅱ層出土。

前原 5-2 トレンチ　北壁断面図



前原 5-2 トレンチ 平面略図

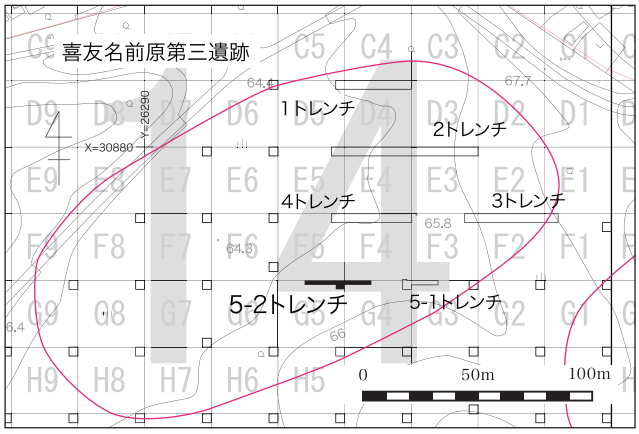


第 12 図　喜友名前原第三遺跡　5-2 トレンチ　断面図

12 は土器胴部片、明赤褐色、混入物は目立たず、厚さ 5 mm、グスク土器。14－G 4 －オ　I 層出土。

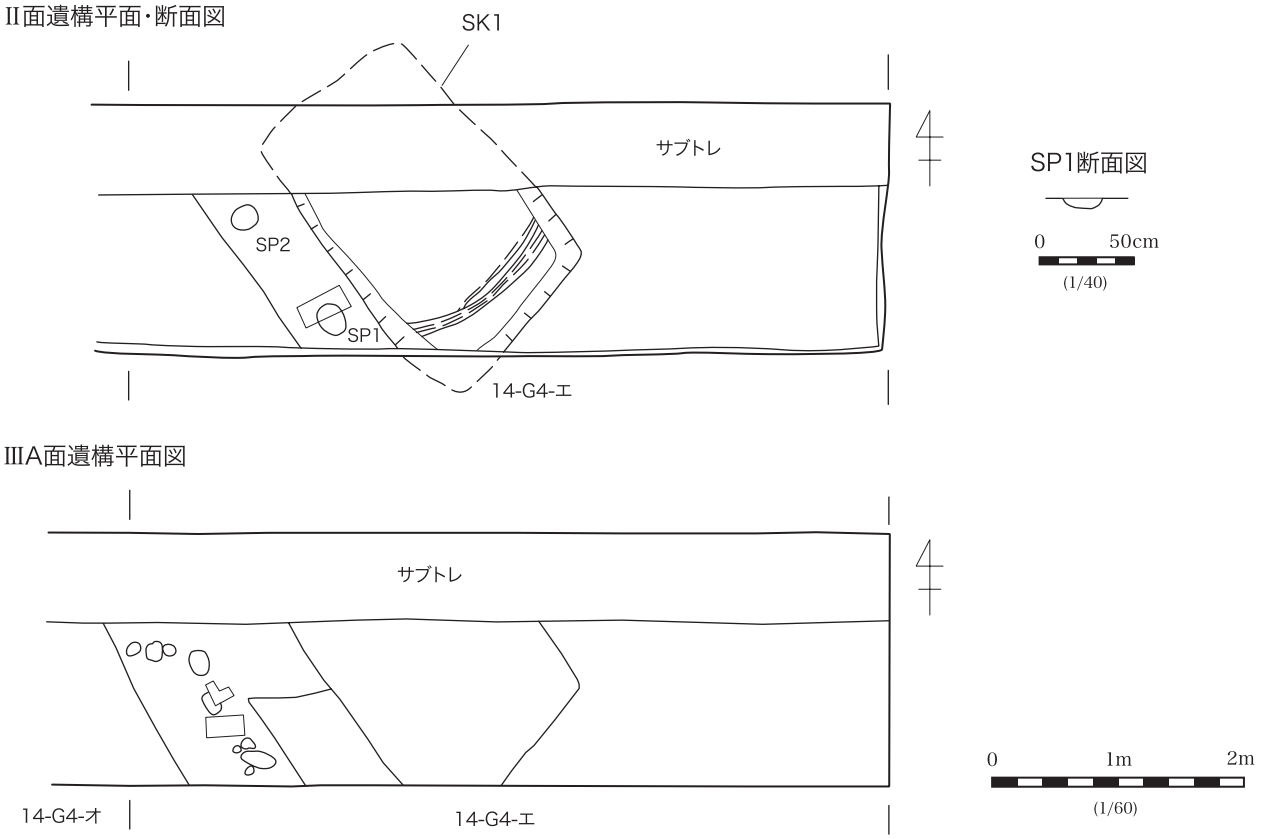
13 は青磁で稜花皿の口縁か。14－G 4 －エⅡ層出土。

14 は中国産褐釉陶器壺の胴部片。 14－G 4 －オⅡ層出土。



第 7 表　前原 5-2 トレンチ　層序表

層序	土層 No.	土色		土質	混入物など
I 層	1 a	10YR　4/6	褐色	シルト	腐葉土
	1 b	10YR　4/4	褐色	シルト～極細砂	
II 層	2 a	10YR　5/6	黄褐色	シルト	7.5YR5/8 明褐色シルトがブロックで 5% 混　赤色粒、マンガン粒 5% 含
	2 b	10YR　5/4	にぶい黄褐色	シルト	7.5YR5/8 明褐色シルトがブロックで 30% 混　マンガン粒、赤色粒 5 % 含
	2 c	10YR　4/4 - 4/6 間	黄褐色	シルト	7.5YR5/8 明褐色シルトがブロックで 1% 混　マンガン粒、赤色粒 5 % 含
	2 c´	10YR　5/6 - 4/6 間	黄褐色～褐色	シルト	7.5YR5/8 明褐色シルトがブロックで 3% 混　マンガン粒、赤色粒 5% 含
IIIA 層	3 a	10YR　4/6	褐色	シルト	7.5YR5/8 明褐色シルトがブロックで 10% 混　マンガン粒、赤色粒 5% 含
	3 b	10YR　4/4	褐色	シルト	7.5YR5/8 明褐色シルトがブロックで 10% 混　マンガン粒、赤色粒 5% 含
IIIB 層	4	10YR　3/4	暗褐色	シルト	7.5YR5/8 明褐色シルトがブロックで 1% 混　マンガン粒、赤色粒 3% 含
IIIC 層	5	10YR　4/6 - 3/4 間	褐色～暗褐色	シルト	7.5YR5/8 明褐色シルトがブロックで 30% 混　マンガン粒、赤色粒 5% 含
IVA 層	6	10YR　2/3	黒褐色	シルト	7.5YR5/8 明褐色シルトがブロックで 1% 混　マンガン粒、赤色粒 10% 含
VA 層	7	7.5YR　4/4	褐色	シルト	マンガン粒 1% 含
VB 層	8	7.5YR 5/8	明褐色	シルト	



第 13 図　喜友名前原第三遺跡　5-2 トレンチ　遺構図

第８節　小結

以上、各トレンチの層序・遺構・遺物について記述してきた。今回の調査では、喜友名前原第三遺跡の東側において６本のトレンチ調査を行ったことになる。ここでは、遺構面ごとにその様相をまとめる。

マージ面（旧地形）　４トレンチ中央部が 63.7mと最も低く、南側の５－２トレンチにかけて標高 64mで周辺よりも１mほど低くなっている。つまり、４トレンチから５－２トレンチに向かって南北に伸びる浅い迫地になっていたものと思われる。一方、東側の３トレンチと５－１トレンチは標高 65mと微高地となっている。この旧地形が、後述するように遺構の分布に反映しているものと考えられる。

ⅣＡ面（縄文時代後・晩期）　ⅣＡ層から小片ではあるが縄文後・晩期の土器、石器・石材が出土しており、５－１トレンチを除きほぼ全域に見られている。層厚が 10cm 以下と非常に薄く、基盤層であるマージと土質が近いことから、旧地表として機能した土壌化層と考えられる。１トレンチで焼土面が見られており、近辺に竪穴建物等の遺構が存在する可能性も想定されよう。この段階では、４・５－２トレンチの迫地は埋まっていない。

ⅢＣ面（グスク時代か）　先述した迫地がある４・５－２トレンチのみにⅢＣ層が確認されている。この面の遺構としては、焼土と思われる赤色粒が多く含まれる小ピット群や焼土面が見られることから、火を使うような何らかの活動があったものと思われる。しかしながら、出土遺物はほとんどなく、先述の縄文後・晩期土器や石器が見られるのみで、土質からはⅢ層の範疇にあるので、現時点では概ねグスク時代と考えておく。

ⅢＢ面（グスク時代）　４・５－１・５－２トレンチにおいてⅢＢ層が確認され、微高地である５－１トレンチでは柱穴群が見られることが重要である。一方、迫地であった４トレンチでも、柱穴とするにはやや浅いがピットが見られる。つまり、少数の建物と近接した迫地での土地利用が見られたものと考える。出土遺物はほとんど

1.　5-2トレンチ　全景(西より)

2.　5-2 トレンチ西側 (14-G5- イ) 北壁断面

3.　5-2 トレンチ中央部 (14-G5- ア) 北壁断面

4.　5-2 トレンチ東側 (14-G4- エ) 北壁断面

5.　5-2 トレンチ東側　II 面　SK1 検出状況

6.　5-2 トレンチ東側 (14-G4- オ) 出土状況

7.　5-2 トレンチ東側 (14-G4- エ) II 面　SP1 半裁状況

8.　5-2 トレンチ中央部 (14-G5- ア) IIIA 層　石器出土状況

図版14　喜友名前原第三遺跡　5-2トレンチ

図版15　喜友名前原第三遺跡　5-1･2トレンチ出土遺物

ないが、Ⅰ・Ⅱ層からは 15～16 世紀と思われる褐釉陶器や青磁片、グスク土器が出土していることから、この遺構面の時期の一端を示す可能性も考えたい。

ⅢＡ面（グスク時代～近世）　１・２・４・５－２トレンチにおいてⅢＡ層が堆積し、４・５－２トレンチにおいては植栽痕とされる列状ピットも確認されており、耕作地として利用が想定される。４・５－２トレンチの迫地もほとんど埋まってしまい、ほぼ平坦地となっていたと思われる。つまり、この時期から本遺跡では耕作地としての土地利用が進んでいったものと考えられよう。出土遺物はほとんどないが、土層の色調はⅢ層、土質はⅡ層に類していることから、グスク時代～近世と考えた。

Ⅱ面（近世）　全てのトレンチで溝や耕具痕が確認されており、近代の土地利用に見られるように全域が耕作地として利用されたものと思われる。

このように、喜友名前原第三遺跡の東側においては、縄文時代後・晩期の広範囲に見られる旧地表層、グスク時代の建物跡と近接する浅い迫地に営まれた耕作地があったことが想定される。ただ、遺物は非常に少なく、また各面のピット群の調査も不十分であり、調査を行っていない西側のトレンチ調査が必要となろう。

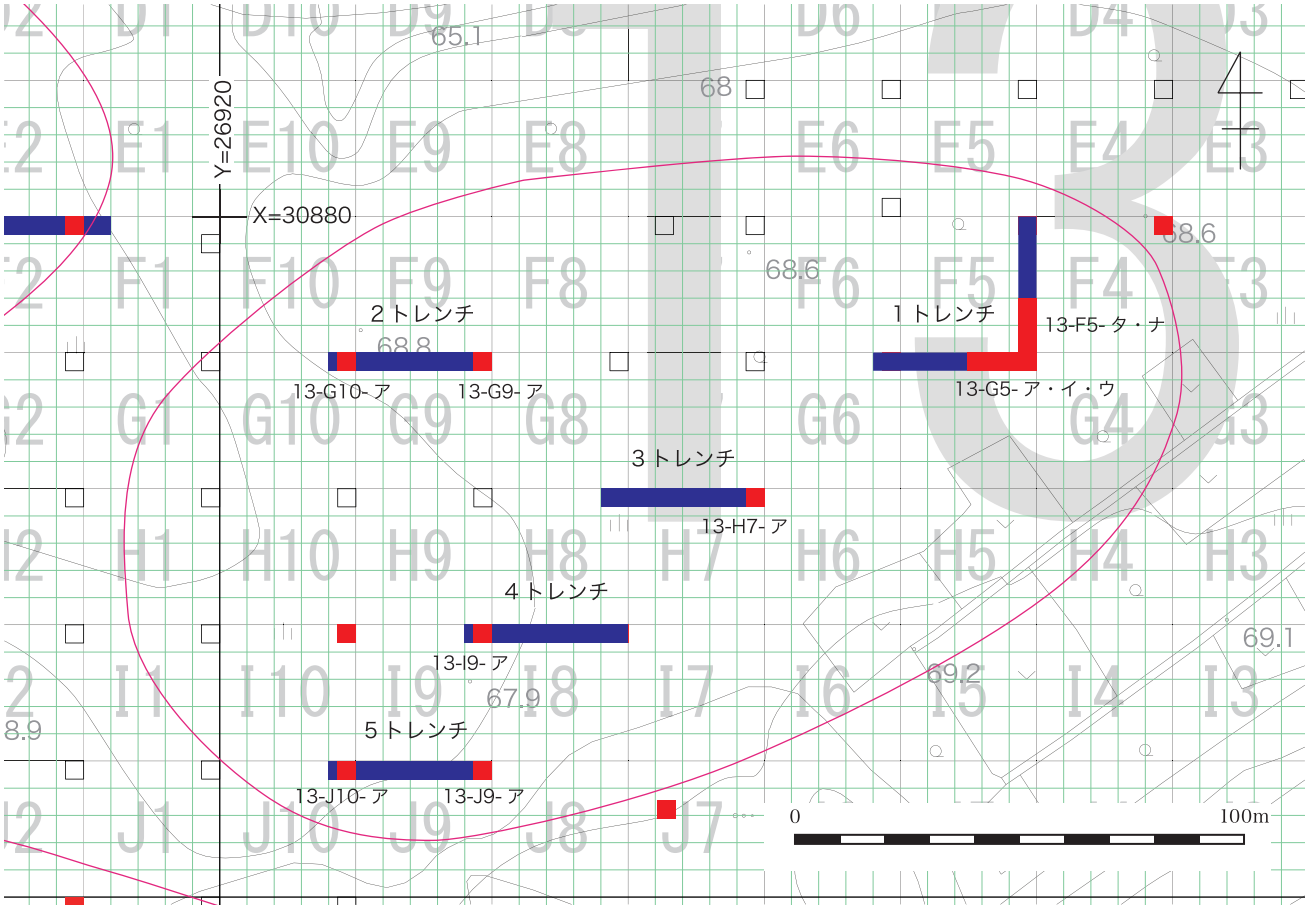
第６章　喜友名東原第三遺跡

第１節 概要

喜友名東原第三遺跡は、喜友名前原第三遺跡のすぐ東方に位置し、同様に平成 11・12 年度の試掘調査により確認された周知の遺跡である。現地表面においては、東端が標高約 68mとやや高いが、全体的には約 67mとほぼ平坦地である。先述の喜友名前原第三遺跡よりは２～３ｍほど高くなっている地点である。なお、本遺跡の東方は約 300m離れた地点に上原濡原遺跡が分布している（第３図）。

今回の調査区（第６図）は、試掘調査でピット等の遺構が確認されたグリッドである 13－Ｆ５－タ・ナ、Ｇ５－ア～ウ、G10－ア、Ｇ９－ア、13－Ｈ７－ア、Ｉ９－ア、Ｊ９－ア、Ｊ10－アの範囲、つまり喜友名東原第三遺跡の主に南東側において、５本のトレンチを設定した（第 14 図）。５本のトレンチは原則的に東西方向に長さ 30m程度のトレンチであるが、１トレンチは既に試掘調査時において北側にも伸ばしたＬ字形のトレンチを設定されており、さらにそれを延長した形となっている。

以下、トレンチごとに基本層序（ローマ数字）に基づき、層序や遺構について記述する。そのため、各トレンチで確認されていない層序番号も存在する。断面図の土層で示している算用数字は現地調査で付した土層番号であり、基本層序との対応関係は各トレンチの層序表で記している。遺構の埋土等で細分が必要な場合は（）を付して、算用数字の土層番号で示している。遺物はその概要を記し、必要に応じて個々の写真を掲載し、説明を加えた。



第14図　喜友名東原第三遺跡　トレンチ配置図

第２節　１トレンチ（第15・16図、図版16～19）

喜友名東原第三遺跡の東端に当たり、幅４ｍで、長さが南北 34m、東西 36mのＬ字形のトレンチである。地表面は68.0～68.5mでそれほど高低差は見られないが、後述するように発掘調査においてマージ面では南側が低くなっており、１ｍほど落ち込む迫地であったことが判明した。

先述したが試掘調査において13－Ｆ５－タ・ナ、Ｇ５－ア～ウを延長させたＬ字形のトレンチを設定し、ⅢＢ面まで掘削し多くのピットが確認されていた。そこで、今回の調査は既に掘削された部分はⅢＢ面まで、今回新たに設定した 13－Ｆ５－ア・カ、Ｇ５－オ、Ｇ６－アについてはＩ層を重機で掘り下げた。その後、南壁に幅0.7mのサブトレンチを設定しＶＡ層まで掘削することで層序の確認を行った。それにより遺構が想定された 13－Ｇ５－イより東側においてはⅡ～ⅢＢ層まで人力で掘削し、ⅢＢ面まで掘り下げ遺構を確認することにした。その後、13－Ｇ５－ウ・エの幅５ｍの範囲をⅣＢ面まで掘り下げて遺構の確認を行った。調査終了後には、北端の 13－Ｆ５－アと最も深くなった中央部の 13－Ｇ５－ウにおいて深掘りを行い、岩盤を確認した。

層序（第８表）　Ｉ層（土層の厚さ＜以下省略＞50～100cm）、Ⅱ層（0～110cm）、ⅢＡ層（0～40cm）、ⅢＢ層（20～60cm）、ⅣB 層（0～110cm）が堆積し、マージは65.2～67.5mで確認し、岩盤は 13－Ｇ５－エにおいて61.0mで検出している。Ⅱ層からⅢＢ層は全範囲で確認されているが、ⅣＢ層は13－Ｆ５－サより南側に見られる。ⅣＢ層は、このトレンチだけで見られる土層で、土器小片が見られるが砂質が強いため、自然堆積による流れ込み土と思われる。

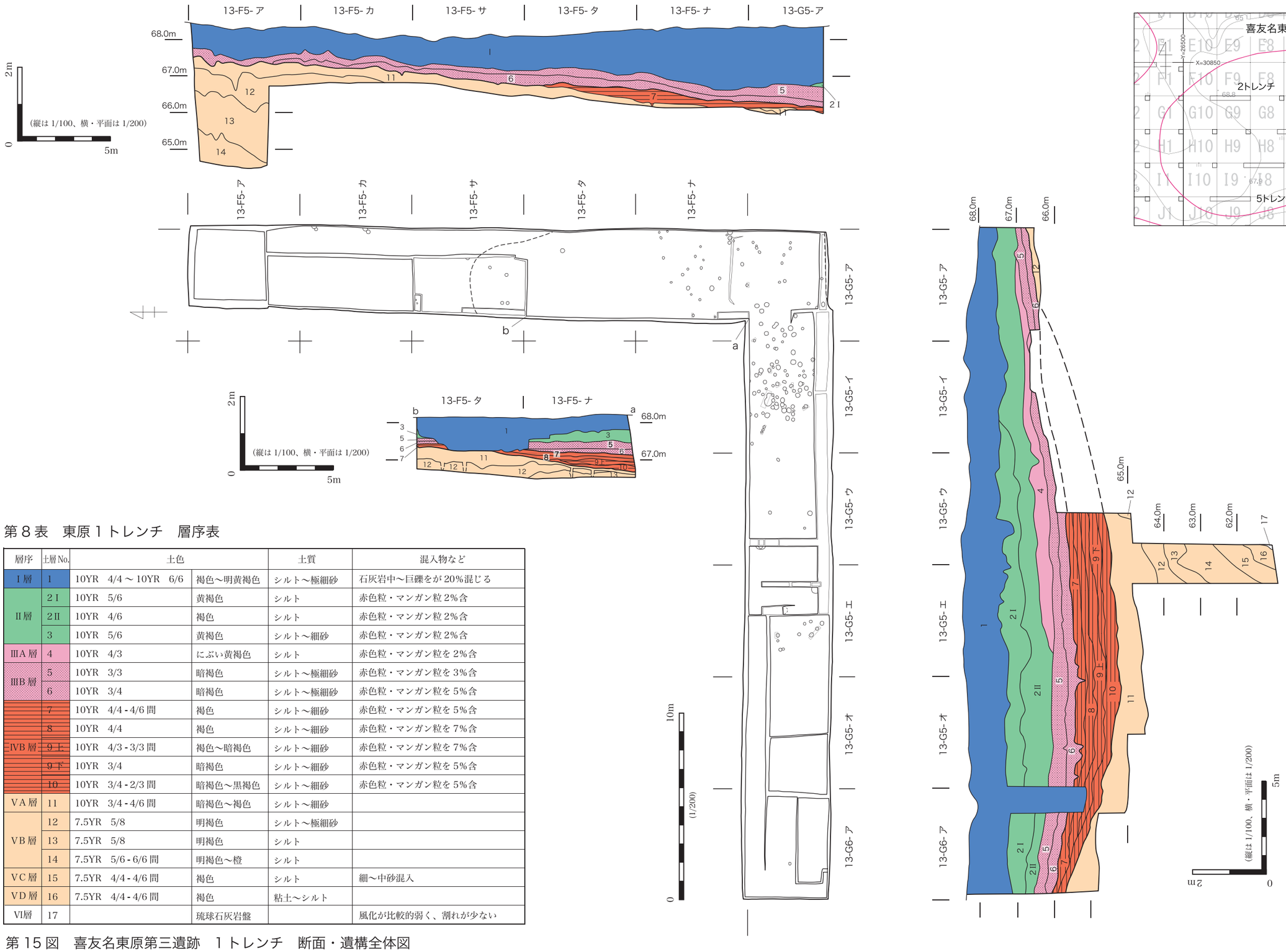
マージ面で見ると、13－Ｇ５－ウ付近がその東西端よりも約１ｍ最も低くなっていることから、東西方向の迫地であった。この迫地にはⅣＢ層が厚く堆積しており、13－Ｆ５－サから落ち込み始め、13－Ｇ６－アでは一部肩部が確認されている。このことから、南北方向は断定できないが、東西方向に 30m以上の迫地であったようだ。このⅣＢ層は砂質土壌で地形に沿って堆積していることから、この迫地は徐々に埋まっていたものと思われる。このⅣＢ層が埋まった段階つまりⅢＢ面においても、まだ 0.5mほど東西端よりは低くなっている状況であるが、後述するようにピットが集中する 13－Ｇ５－ア・イにおいては、ほぼ平坦地であったようである。Ⅱ層は非常に厚く土質も均質であり、上面が全体的に平坦になっていることから、Ｉ層が堆積するまでには迫地の痕跡はほとんどなくなっていたものと想定される。

遺構（第15・16図）　ⅢＢ面、ⅣＢ面で確認されている。

ⅢＢ面　ⅢＢ層が確認されている範囲で、136 基のピットを確認した。先述したが、13－Ｇ５－ア・イにおいてほぼ平坦地で、ピットもこの範囲に密集している。ピットは、平面形は円形で、直径 10～30cm の大きさであり、埋土はⅢＢ層である。任意に 18 基を選び半裁を行った結果、深さは5～30cm を測るが、多くは 10cm 以下で、断面形は丸底を呈するものが多かった。半裁したピットからは遺物は見られなかった。

このような性格が明確ではないピット群が見られる状況は、普天間飛行場内では大謝名軍花原第二遺跡４ｄ面の小ピット群と類しているようにも見える（沖縄県埋文 2006）。しかし、ここでは耕具痕と考えられる断面が直線的な掘り形も見られているので、全く同じとはいえない。その性格を限定することは難しいが、遺構面がほぼ平坦地であることから、柱穴の可能性も考えたい。

ⅣＢ面　13－Ｇ５－ウ・エの幅５ｍの範囲を掘り下げると、その北側から南側に向かって１ｍ近く低くなり傾斜した地形となっている。この範囲で、ⅣＢ面においてピットを２基確認し、半裁を行った。ＳＰ１は直径 50cm、深さ 60cm、断面は深さ 20cm の地点で段がつき下層は径 20cm となっている。ＳＰ２は直径 30cm、深さ 80cm で、底面は部分的に深くなっている。これらの埋土は上下で分層はできるがⅣＢ層の範疇である。ＳＰ２からは土器片が出土している。今回の調査では２基しか検出しておらず、その性格については断定しがたい。



第８表　東原１トレンチ　層序表

層序	土層No.	土色		土質	混入物など
Ⅰ層	1	10YR　4/4 ～ 10YR　6/6	褐色～明黄褐色	シルト～極細砂	石灰岩中～巨礫をが 20%混じる
Ⅱ層	2Ⅰ	10YR　5/6	黄褐色	シルト	赤色粒・マンガン粒 2%含
	2Ⅱ	10YR　4/6	褐色	シルト	赤色粒・マンガン粒 2%含
	3	10YR　5/6	黄褐色	シルト～細砂	赤色粒・マンガン粒 2%含
ⅢA 層	4	10YR　4/3	にぶい黄褐色	シルト	赤色粒・マンガン粒を 2%含
ⅢB 層	5	10YR　3/3	暗褐色	シルト～極細砂	赤色粒・マンガン粒を 3%含
	6	10YR　3/4	暗褐色	シルト～極細砂	赤色粒・マンガン粒を 5%含
ⅣB 層	7	10YR　4/4 - 4/6 間	褐色	シルト～細砂	赤色粒・マンガン粒を 5%含
	8	10YR　4/4	褐色	シルト～細砂	赤色粒・マンガン粒を 7%含
	9上	10YR　4/3 - 3/3 間	褐色～暗褐色	シルト～細砂	赤色粒・マンガン粒を 7%含
	9下	10YR　3/4	暗褐色	シルト～細砂	赤色粒・マンガン粒を 5%含
	10	10YR　3/4 - 2/3 間	暗褐色～黒褐色	シルト～細砂	赤色粒・マンガン粒を 5%含
ⅤA 層	11	10YR　3/4 - 4/6 間	暗褐色～褐色	シルト～細砂	
ⅤB 層	12	7.5YR　5/8	明褐色	シルト～極細砂	
	13	7.5YR　5/8	明褐色	シルト	
	14	7.5YR　5/6 - 6/6 間	明褐色～橙	シルト	
ⅤC 層	15	7.5YR　4/4 - 4/6 間	褐色	シルト	細～中砂混入
ⅤD 層	16	7.5YR　4/4 - 4/6 間	褐色	粘土～シルト	
Ⅵ層	17		琉球石灰岩盤		風化が比較的弱く、割れが少ない

第 15 図　喜友名東原第三遺跡　１トレンチ　断面・遺構全体図

IIIB 面　ピット断面図

※SP1～17 はIIIB 面の遺構である

IVB 面　ピット断面図

※IVB-SP1・2 はIVB 面の遺構である

第 16 図　喜友名第三遺跡　1 トレンチIIIB･IVB 面　遺構図

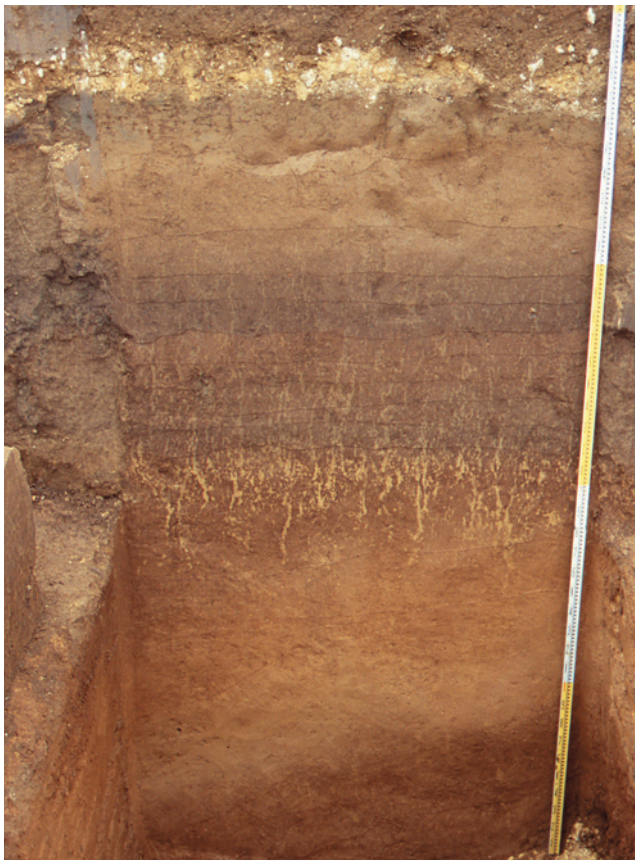
1.　1トレンチ冠水状況(東より)

2.　1トレンチ全景 (南より)

3.　1トレンチ　13-F5- ナ　東壁断面

4.　1トレンチ　13-F5- ナ　西壁断面

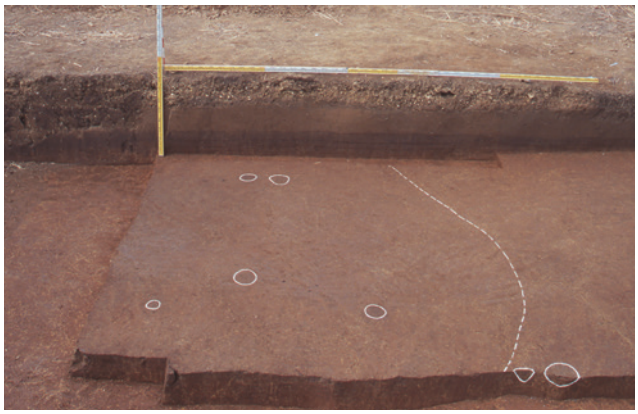
5.　1トレンチ　13-G5- ウ　南壁断面



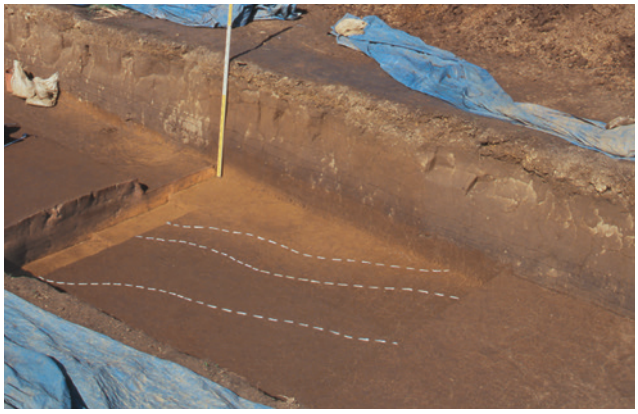
6.　1トレンチ　13-G5- エ　南壁断面

図版16　喜友名東原第三遺跡　1トレンチ(1)

1.　1トレンチ中央部　ⅢB 面　遺構検出状況 (東より)



2.　1トレンチ　13-F5- サ　ⅢB 面遺構検出状況



3.　1トレンチ　13-G5- ウ・エ　ⅣB 面　遺構検出状況

4.　1トレンチ中央部　ⅣB 面　遺構検出状況 (南より)

図版17　喜友名東原第三遺跡　1トレンチ(2)

1.　1トレンチ　ⅢB面　SP5半裁状況

2.　1トレンチ　ⅢB面　SP9半裁状況

3.　1トレンチ　ⅢB面　SP1・2・3半裁状況

4.　1トレンチ　ⅣB面　SP1半裁状況

図版18　喜友名東原第三遺跡　1トレンチ(3)

遺物（図版19）　Ⅱ層からは沖縄産陶器、ⅢB層からは少量だが中国産陶器・土器・石材、ⅣB層からは土器・石材が出土している。

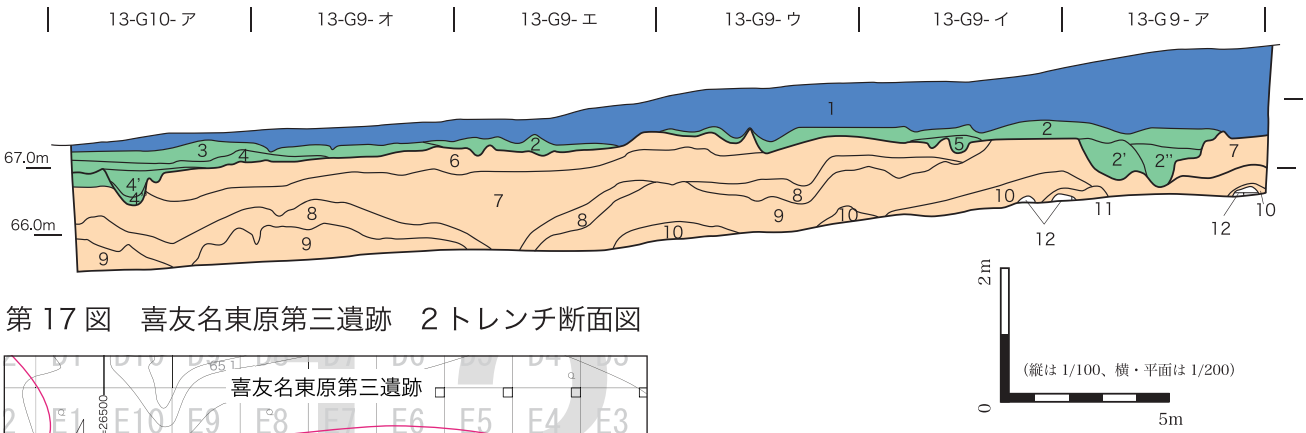
15は中国産緑釉陶器で、瓶などの口縁か。13－F５－オ　ⅢB（５）層出土。

16は土器胴部片、にぶい黄橙色、赤色粒が混入、器壁３mm、仲原式か。13－F５－ウ　ⅣB（９上）層出土。

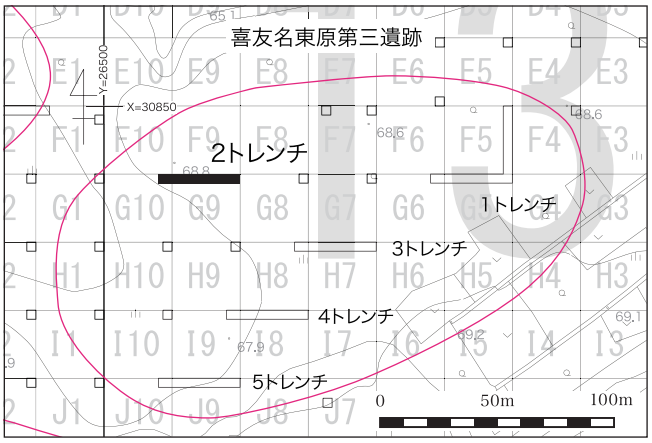
17は土器胴部片、明褐色、混入物が目立たず、器壁５mm、縄文後・晩期。13－F５－ウ　ⅣB（10）層出土。

18は、砂岩製敲石片で、赤変しており火を受けている。長さ6.7cm。13－F５－イ　ⅣB（9）層出土。

図版19　喜友名東原第三遺跡　1トレンチ出土遺物



第 17 図　喜友名東原第三遺跡　２トレンチ断面図



第９表　東原２トレンチ　層序表

層序	土層No.	土色		土質	混入物など
Ⅰ層	1	10YR　5/6	黄褐色	極細砂～シルト	細礫混じり
Ⅱ層	2	7.5YR　5/6	明褐色	極細砂～シルト	細礫、V層のブロック混じり　炭も多く含む
	2'	10YR　5/4	にぶい黄褐色	極細砂～シルト	
	2"	10YR　5/4	にぶい黄褐色	極細砂～シルト	2' と類するが、石灰岩礫を含む点や下部において粘土ブロックが密に含む
	3	7.5YR　4/6	褐色	極細砂～シルト	細礫少量混じる（２層より少ない）　炭・赤色粒子も僅かに含む
	3'	10YR　6/8	明黄褐色	極細砂～シルト	
	4	7.5YR　5/6	明褐色	極細砂～シルト	
	4'	7.5YR　5/6	明褐色	極細砂～シルト	４層下面の溝状遺構の覆土①　下層 (6・7 層）から思われる褐色土ブロックが比較的密に入る
	5	7.5YR　5/8	明褐色	シルト～粘土	
VA 層	6	7.5YR　4/6	褐色	極細砂～シルト	下部にいくほどシルト質が強くなる 10YR6/8 明黄褐色粘土ブロックが不規則に縦位に拡がる
VB 層	7	7.5YR　5/6	明褐色	シルト～粘土	石灰岩細礫が極わずか混じる　10YR6/8 明黄褐色粘土ブロックが不規則に縦位に入り込む
VC 層	8	7.5YR　5/8	明褐色	シルト～粘土	中～粗砂大量に含む
	9	10YR　6/8	明黄褐色	シルト	
VD 層	10	10YR　4/6	褐色	シルト～粘土	
	11	7.5YR　6/8	橙	シルト～粘土	マンガン斑が多く見られる　最下部は 10YR4/6 褐色を呈する
Ⅵ層	12			琉球石灰岩	風化は非常に弱く、割れがほとんどない

第３節　２トレンチ（第 17 図、図版 20）

１トレンチより約 150m離れた喜友名東原第三遺跡の西側部分に当たり、喜友名前原第三遺跡との境界に近く、東西方向に幅４m、長さ 36mのトレンチである。地表面は標高が西端 67.3m、東端 68.7mと東側に向かって高くなっているが、後述するようにマージ面ではそれほど高低差はない。

調査は北壁に約 0.7mのサブトレンチを掘削し、Ⅰ層まで全範囲を掘削した。

層序（第９表）　Ⅰ層（10～130cm）、Ⅱ層（10～70cm）が堆積し、マージ面を 67.0～67.5m、琉球石灰岩を 66.7ｍで確認している。全ての層が全範囲で確認している。

遺構　Ⅱ面において、断面により 13－Ｇ９－アにおいて幅 3.5m、深さ 60cm、13－G10－アにおいて幅１ｍ、深さ 50cm の２条の溝を確認した。

遺物　Ⅰ層より沖縄産陶器が出土している。

第４節　３トレンチ（第 18 図、図版 21）

１トレンチより南西 30mに位置する喜友名東原第三遺跡の中央部に当たり、東西方向に幅４ｍ、長さ 36mのトレンチである。地表面は標高が西端 68.0m、東端 68.6mでやや東側が高いが、後述するようにマージ面では東側が約１ｍ低くなっている。

調査は北壁に１ｍのサブトレンチを設定し、Ⅰ層まで全範囲を掘削し、土層観察によりⅢＢ層を確認した 13－Ｈ７－ア・イをマージ面まで掘り下げた。

層序（第 10 表）　Ⅰ層（10～100cm）、Ⅱ層（10～30cm）、ⅢＡ層（0～30 ㎝）、ⅢＢ層（０～30 ㎝）が堆積し、マージ面を 67.0～67.8m、岩盤を 67.2mで確認している。Ⅰ層は全範囲、Ⅱ層は 13－Ｈ７－オ、ⅢＡ層は 13－Ｈ７－エ、ⅢＢ層は 13－Ｈ７－イより、各々東側へ堆積している。また、マージ面は西端で 67.8m、中央部で 67.5m、東端では 67.0ｍと、東側へ約１ｍ低くなっている。このことは、ⅢＡ層以下が１トレンチに当たる東側

1.　２トレンチ全景 (西より)

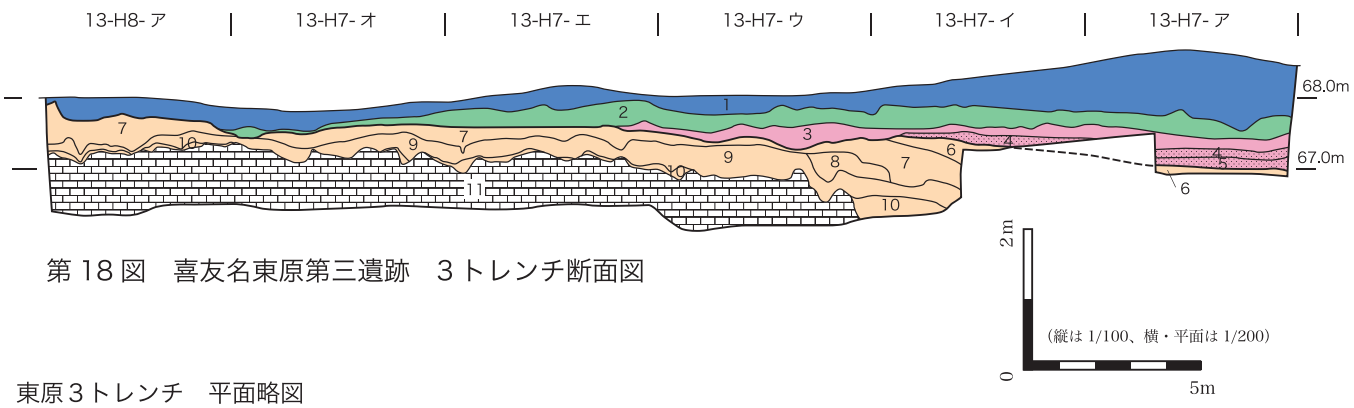
2.　２トレンチ西側 (13-G10- ア) 北壁断面

3.　２トレンチ中央部 (13-G9- ウ・エ) 北壁断面

4.　２トレンチ東側 (13-G9- ア・イ) 北壁断面

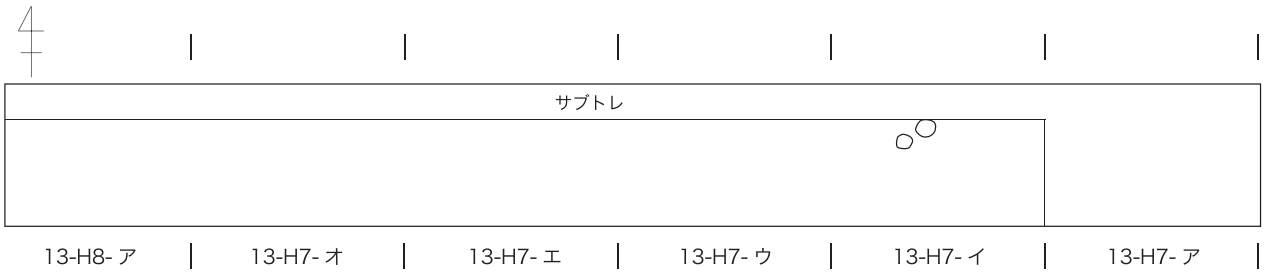
図版20　喜友名東原第三遺跡　2トレンチ

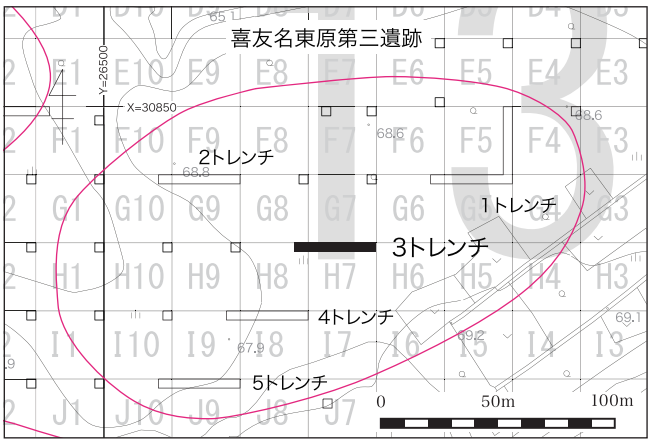
東原３トレンチ　北壁断面図



第 18 図　喜友名東原第三遺跡　３トレンチ断面図

東原３トレンチ　平面略図

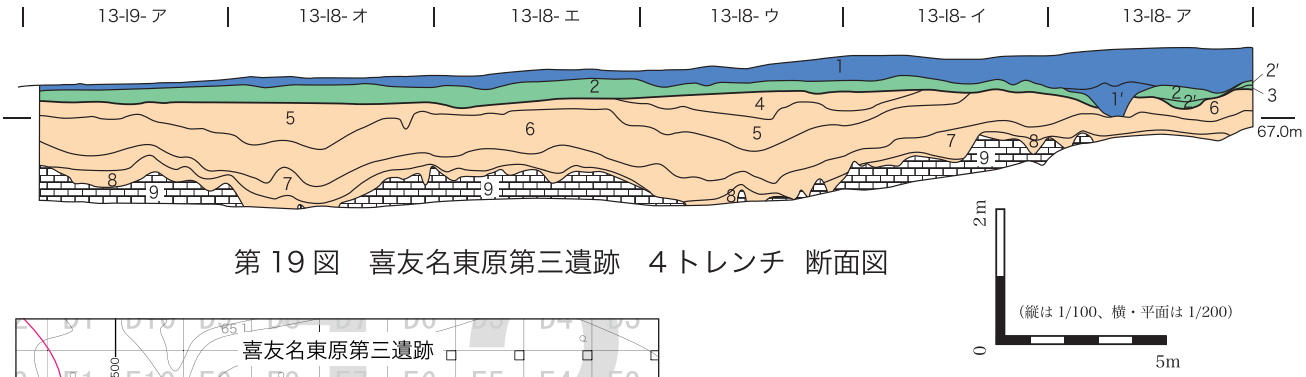




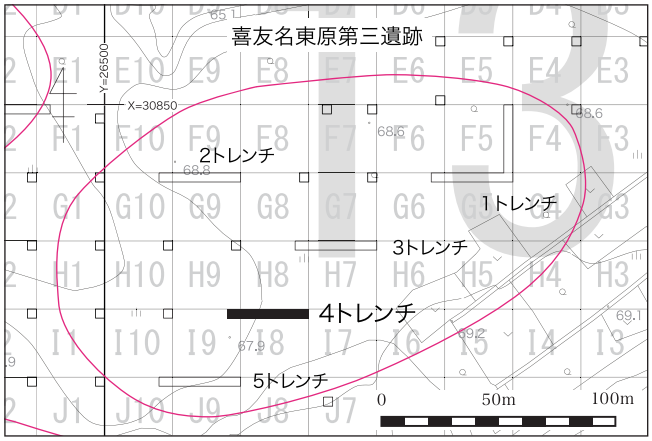
第 10 表　東原３トレンチ層序表

層序	土層 No.	土色		土質	混入物など
Ⅰ層	1	10YR　5/6	黄褐色	細～中砂	石灰岩細～中礫が多く混じる
Ⅱ層	2	7.5YR　5/6	明褐色	極細砂	石灰岩細礫混じる　マンガン粒や赤色粒、炭わずかに含む
ⅢA 層	3	7.5YR　5/8	明褐色	極細砂～シルト	
ⅢB 層	4	10YR　3/3	暗褐色	極細砂～シルト	10YR4/6（褐色）、10YR　5/6（黄褐色）シルトがブロック状に混じる
	5	10YR　3/4	暗褐色	極砂～シルト	10YR4/6（褐色）、10YR　5/6（黄褐色）シルトがブロック状に混じる
VA 層	6	10YR　5/8	黄褐色	シルト～粘土	上部に極細砂が混じり、マンガン斑が密に見られる
VB 層	7	10YR　6/8	明黄褐色	シルト～粘土	マンガン斑がわずかに見られる
	8	7.5YR　5/8	明褐色	粘土	
VC 層	9	10YR　5/6	黄褐色	シルト～粘土	中～粗砂が混入　斑状に 10YR6/8 明黄褐色を呈する部分がある
VD 層	10	10YR　5/6	黄褐色	粘土	石灰岩細礫が混入
VI層	11			琉球石灰岩盤	比較的風化は弱く、割れが少ない

東原４トレンチ　北壁断面図



第 19 図　喜友名東原第三遺跡　４トレンチ　断面図



第 11 表　東原４トレンチ　層序表

層序	土層 No.	土色		土質	混入物など
Ⅰ層	1	10YR　5/6	黄褐色	中砂	石灰岩細～中礫混じる
	1'	7.5YR　5/6	明褐色	中砂	①層下面段階の溝状遺構の覆土　石灰岩細礫わずかに混じる
Ⅱ層	2	7.5YR　4/6	褐色	極細砂～シルト	極僅かに赤色粒とマンガン粒を含む
	2'	10YR　5/8	黄褐色	極細砂～シルト	僅かにマンガン粒を含む　②層下面の溝状遺構の覆土
	3	10YR　3/4	暗褐色	シルト	7.5YR　6/8 明黄褐色粘土ブロックが混じる
ⅤA 層	4	7.5YR　4/4	褐色	極細砂～シルト	10YR　6/8 の明褐色の極細砂が斑状に混じる
	5	7.5YR　5/6	明褐色	シルト	粗砂が混入 宜野湾市Ⅵ層か
ⅤB 層	6	7.5YR　6/8	明黄褐色	シルト～粘土	
ⅤC 層	7	10YR　5/6	黄褐色	シルト～粘土	粗砂が大量に混入
ⅤD 層	8	10YR　4/6	褐色	シルト～粘土	石灰岩細礫がわずかに混入
Ⅵ層	9			琉球石灰岩盤	比較的風化は弱く、割れが少ない

に向かって厚くなっていくことを示すものと思われる。

遺構　ⅢＢ面において、13－Ｈ７－イにおいて直径 20cm の円形ピットを確認しているが、掘削はしていないので深さは分からない。先述したように 30m北東側の１トレンチではⅢＢ層の性格不明のピットが多く確認しているため、同種のピットの可能性もある。しかしながら、本トレンチのピットは比較的明瞭に検出できており、前原５－１トレンチのような柱穴の可能性も否定できない。

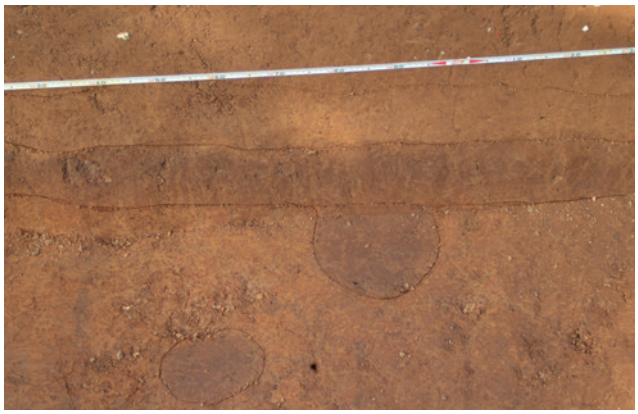
遺物　遺物は出土しなかった。

1.　３トレンチ全景 (西より)

2.　３トレンチ西側 (13-H7- オ・H8- ア) 北壁断面

3.　３トレンチ中央部 (13-H7- ウ・エ) 北壁断面

4.　３トレンチ東側 (13-H7- ア・イ) 北壁断面



5.　３トレンチ東側 (13-H7- イ)ⅢB 面　遺構検出状況

6.　４トレンチ全景 (西より)

7.　４トレンチ東側 (13-I8- ア・イ) 北壁断面

8.　４トレンチ中央部 (13-I8- ウ・エ) 北壁断面

図版21　喜友名東原第三遺跡　3･4トレンチ

第５節　４トレンチ（第19図、図版21）

３トレンチの南西30mに位置し、東西方向に幅４ｍ、長さ36mのトレンチである。地表面の標高は西端67.5ｍ、東端68.1ｍと東側にやや高くなっている。調査は北壁に約0.7ｍのサブトレンチを設定し層序を確認したが、断面で遺構は確認できなかったので、Ⅰ層のみ重機で掘削した。

層序（第11表）　Ⅰ層（10～100cm）、Ⅱ層（10～40cm）が全範囲に堆積し、マージ面は67.2～67.6m、岩盤は66.9mで確認した。

遺構　Ⅱ面において、断面により13－Ｉ８－アにおいて幅３ｍ、深さ50㎝の溝を確認しているが、平面での検出は行っていない。この西側すぐにはⅠ層段階の溝も見られるので、この位置が耕作地等の境界を示す区画であった可能性がある。

遺物　遺物は出土しなかった。

第６節　５トレンチ（第20～24図、図版22～27）

４トレンチの南西30mに位置し、東西方向に幅４ｍ、長さ35mのトレンチである。地表面の標高は西端67.5ｍ、東端67.9mとやや東側に高くなっている。

調査は北壁に幅1.2mのサブトレンチを設定し、Ⅱ層まで全範囲を掘削し、それより下層は13－Ｊ９－ア・イにおいてⅢＢ層までは長さ７ｍ、ⅢＣ層は長さ４ｍ、ⅣＡ層は長さ 2.5mまでと、徐々に範囲を狭めながら掘削を行っていった。

層序（第12表）　Ⅰ層（10～100cm）、Ⅱ層（30～50cm）、ⅢＡ層（20～40cm）、ⅢＢ層（20～40cm）、ⅢＣ層（0～20cm）、ⅣＡ層（0～40cm）が堆積し、マージ面は 66.0～66.9mで検出したが、岩盤は４ｍ掘削しても確認できなかった。Ⅰ～ⅢＢ層まで全範囲で確認できたが、ⅢＣ層は 13－Ｊ９－ア西側より 13－Ｊ９－オまで、ⅣＡ層は13－Ｊ９－イ・ウで確認した。マージ面で見ると、13－Ｊ９－ウ南側で66.0ｍと一番低くなっており、トレンチ東端が66.9ｍ、西端が66.5mと東西方向の浅い迫地となっていたことが想定される。迫地の規模は、東西については25mを測るが、南北は分からない。また、南北方向においては 13－Ｊ９－イにおいて、マージ面が北側で40cm 高くなっており、北から南へ傾斜していたことが分かっている。各層はこの地形に沿って堆積しており、ⅢＡ層の段階ではほぼ平坦地になっていたものと思われる。

遺構（第21～24図）　Ⅱ面、ⅢＡ面、ⅢＢ面、ⅢＣ面、ⅣＡ面で確認している。

Ⅱ面　3－Ｊ９－イ・ウにおいて西へ40°の方向で、幅0.6m、深さ50cm の溝と、そのほぼ下に幅1.6m、深さ40㎝の溝が重なって見られる。また、13－Ｊ９－イでは幅5～10㎝の細長い鋤溝状のものが見られるが、耕具痕と思われる。

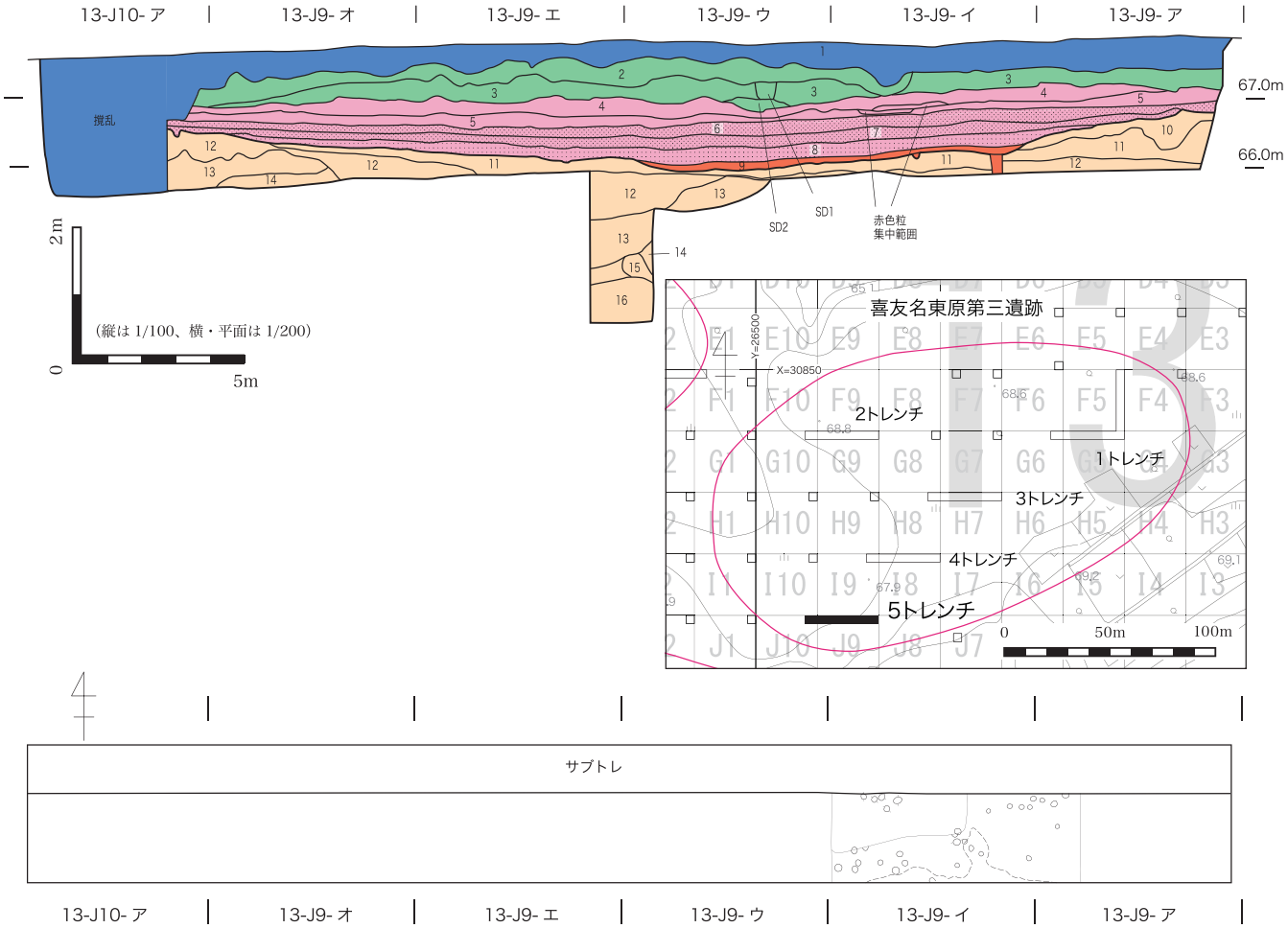
ⅢＡ面　13－Ｊ９－イで、焼土と思われる赤色粒が集中する範囲が断面において見られた。

ⅢＢ面　13－Ｊ９－ア・イにおいて、径20cm のピットが31基確認できた。８基半裁したところ、深さは５～20cm、断面が丸底で、柱穴かは断定できなかった。これらのピットの埋土はⅢＢ（７）層である。調査区の南側には焼土粒が集中する範囲が見られた。

ⅢＣ面　13－Ｊ９－イにおいて、径10～30cm のピットが３基確認でき、半裁を行った。ＳＰ３は深さ30cm を測るが、他は10cm 以下で一定していない。埋土はⅢＣ（８）層である。

ⅣＡ面　13－Ｊ９－イにおいて、径10～20cm のピットを24基確認して、３基について半裁を行った。ＳＰ１は深さ30cm、ＳＰ２は深さ20cm だが、ＳＰ３は深さ5cm と一定していない。これらのピットの埋土は

東原５トレンチ　北壁断面



第 20 図　喜友名東原第三遺跡　５トレンチ　断面図

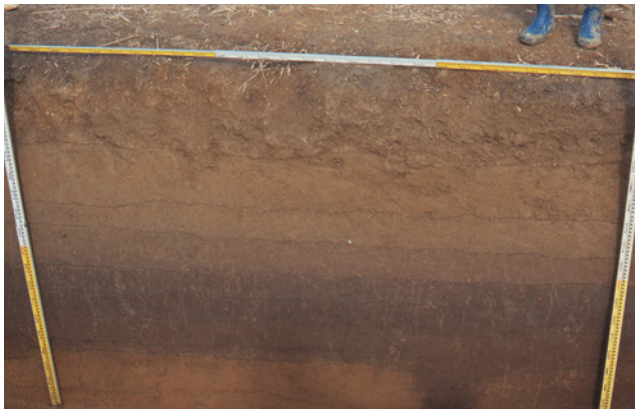
第 12 表　東原５トレンチ　層序表

層序	土層 No.	土色		土質	混入物など
Ⅰ層	1	7.5YR　4/6	褐色	極細砂～シルト	石灰岩細～中礫混じる
Ⅱ層	2	7.5YR　5/6	明褐色	極細砂～シルト	
	3	7.5YR　4/6	褐色	極細砂～シルト	マンガン粒を比較的密に含んでいる
ⅢA 層	4	10YR　4/6	褐色	極細砂～シルト	マンガン粒を比較的密に含み、赤色粒も僅かに含む
	5	10YR　4/4	褐色	極細砂～シルト	マンガン粒を比較的密に含み、赤色粒も僅かに含む
ⅢB 層	6	10YR　3/4	暗褐色	極細砂～シルト	マンガン粒を比較的密に含んでいる
	7	7.5YR　3/3	暗褐色	極細砂～シルト	マンガン粒・赤色粒を比較的密に含んでいる　６層と比べると粘性が強い
ⅢC 層	8	7.5YR　4/4	褐色	極細砂～シルト	マンガン粒わずかに含む
ⅣA 層	9	7.5YR　3/4	暗褐色	極細砂～シルト	
VA 層	10	7.5YR　4/4	褐色	極細砂～シルト	10YR　5/8 黄褐色のシルト質が縦位に入り込んでおり、顕著である　マンガン粒を僅かに含む
	11	7.5YR　4/6	褐色	シルト～粘土	10 層と比べると粘性が非常に強い　10YR　5/8 黄褐色のシルト質が縦位に入り込んでおり、顕著である　マンガン粒を僅かに含む
VB 層	12	7.5YR　5/6	明褐色	シルト (粘性やや強め)	10YR　5/8 黄褐色のシルト質が縦位に入り込んでいる　マンガン粒を僅かに含む
	13	7.5YR　4/6	褐色	シルト～粘土	12 層と比べると粘性が強い
VC 層	14	7.5YR　4/4	褐色	シルト	粗砂が混入
	15	7.5YR　5/6	明褐色	シルト	7.5YR　5/8 明褐色シルト、石灰岩細礫を僅かに含む
	16	7.5YR　4/3	褐色	シルト	粘性は 15 層に比べて弱い　7.5YR　5/6 明褐色シルトを僅かに含む クチャと思われる 2.5Y 5/2 灰オリーブ色ブロックを多く含む

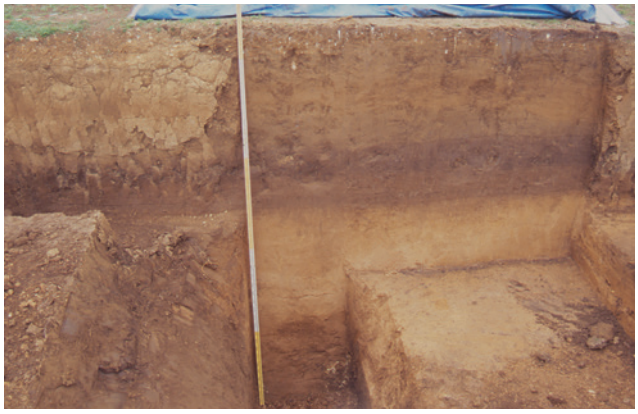
1.　5トレンチ全景 (南東より)

2.　5トレンチ全景 (東より)

3.　5トレンチ東側 (13-J9- ア・イ) 北壁断面

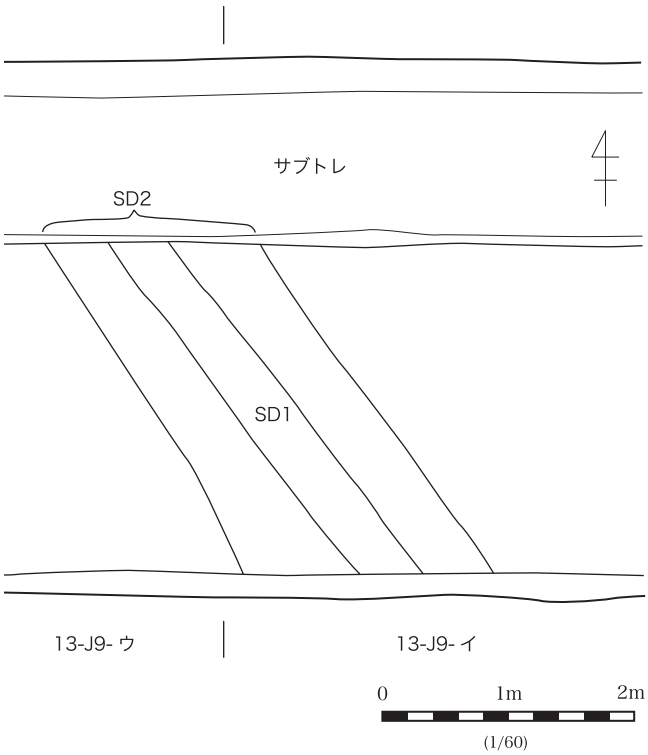


4.　5トレンチ東側 (13-J9- イ) 北壁断面



5.　5トレンチ中央部 (13-J9- ウ) 北壁断面

図版22　喜友名東原第三遺跡　5トレンチ(1)



第21図　喜友名東原第三遺跡　5トレンチ
II面　SD1・2遺構図

1. 5トレンチ　II面　SD1 検出状況

2. 5トレンチ　13-J9-イ　II面　耕具痕検出状況

3. 5トレンチ　SD1・SD2 断面

図版23　喜友名東原第三遺跡　5トレンチ(2)

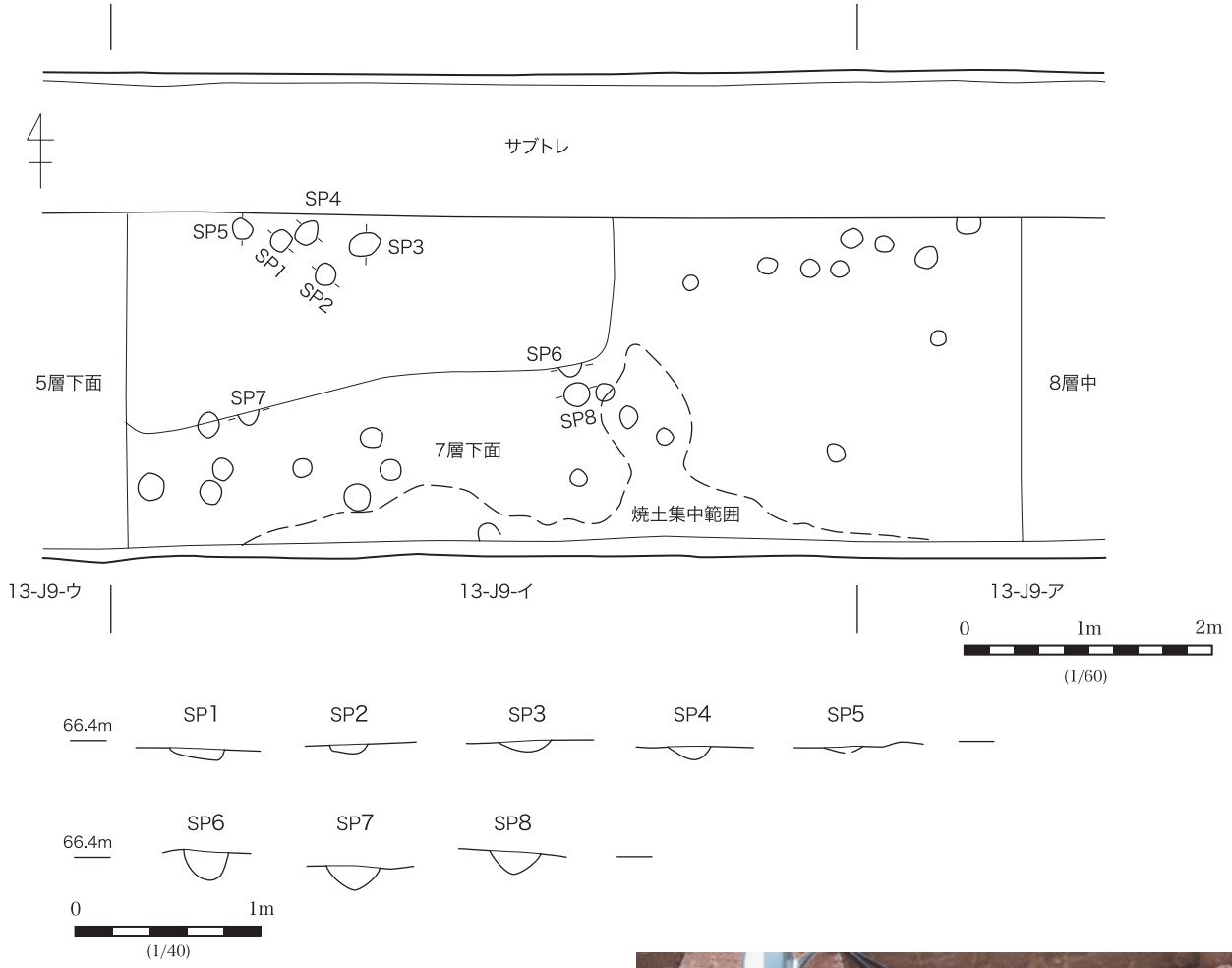
19

20

21

0　5cm

図版24　喜友名東原第三遺跡　5トレンチ出土遺物



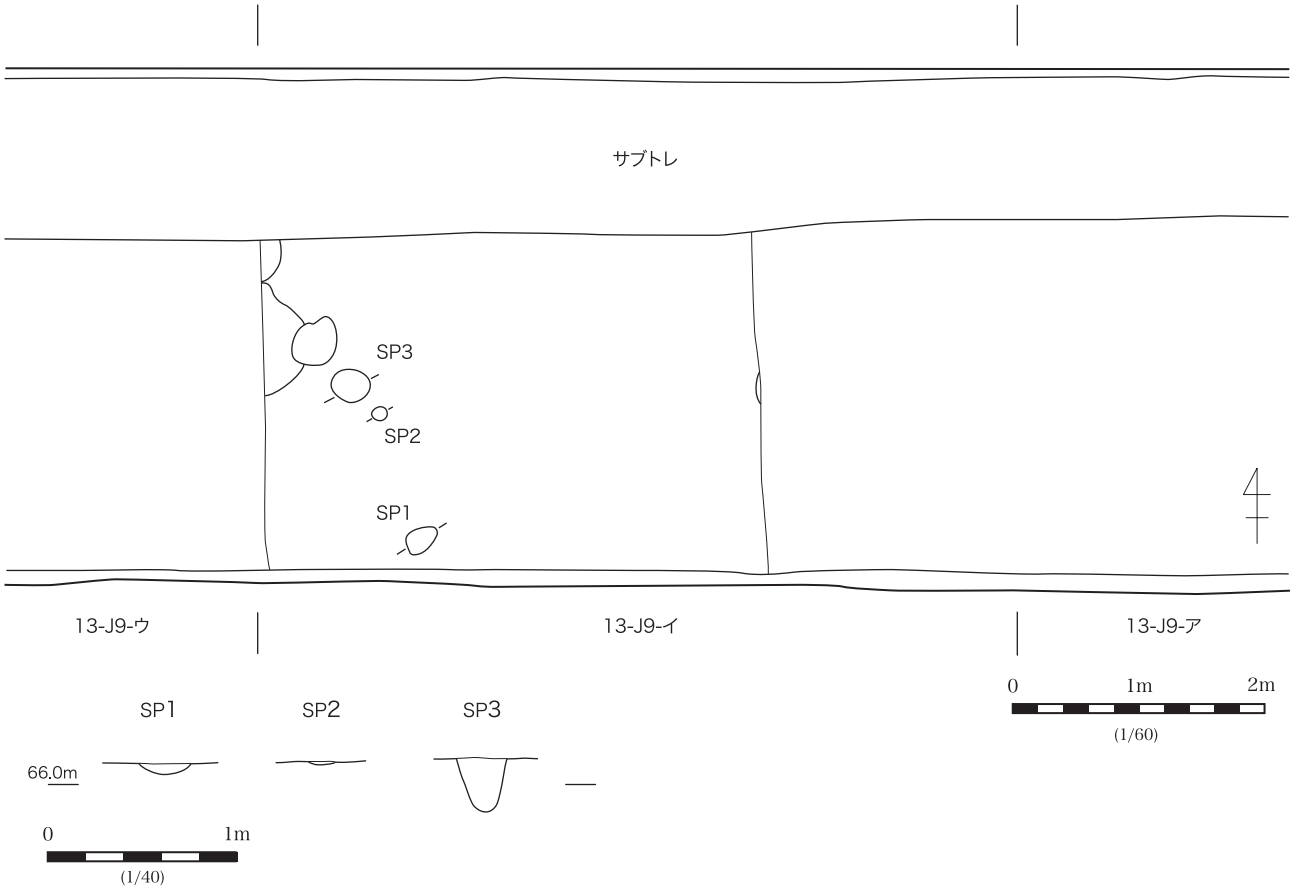
第22図　喜友名東原第三遺跡　5トレンチ
ⅢB面　遺構図

2.　5 トレンチ　13-J9- イ　ⅢB 面　SP4　半裁状況

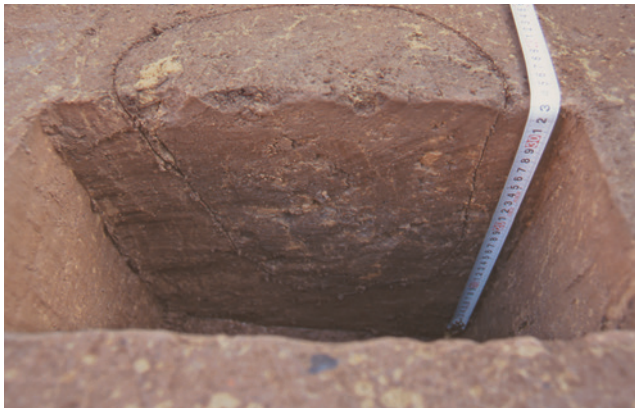
1.　5 トレンチ　13-J9- イ　ⅢB 面　遺構検出状況

3.　5 トレンチ　13-J9- イ　ⅢB 面　焼土集中状況

図版25　喜友名東原第三遺跡　5トレンチ(3)



第 23 図　喜友名東原第三遺跡　5 トレンチ　ⅢC 面　遺構図



2.　5 トレンチ　13-J9- イ　ⅢC 面　SP3 半裁状況

1.　5 トレンチ　13-J9- イ　ⅢC 面　遺構検出状況

図版26　喜友名東原第三遺跡　　5トレンチ(4)

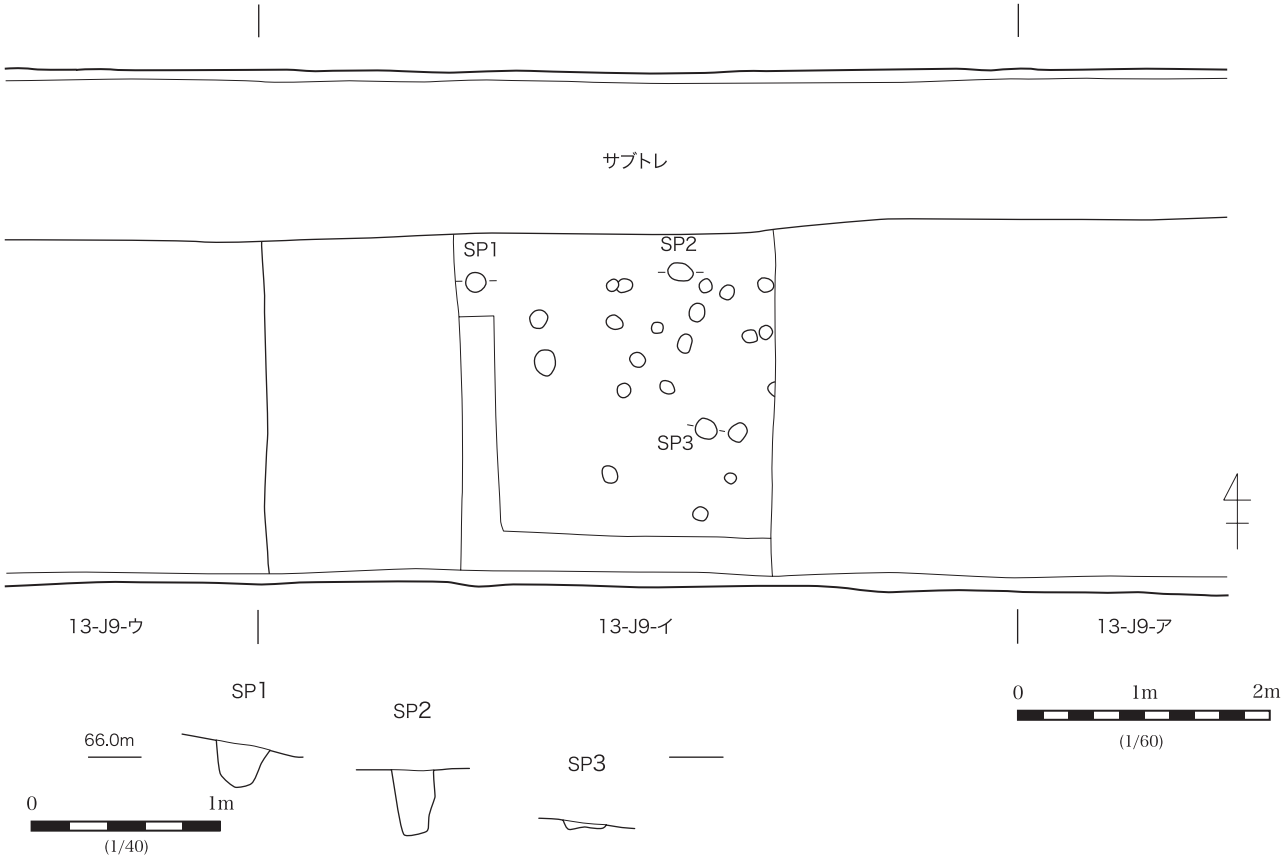
ⅣA（9）層である。

遺物（図版 27）　Ⅰ層より青磁・沖縄産陶器・土器・石材、ⅢA層より白磁、ⅣA層より土器・石材が出土している。

19 は青磁碗で、小片だがおそらく細蓮弁文が描かれる。13－Ｊ９－イ　Ⅰ層出土。

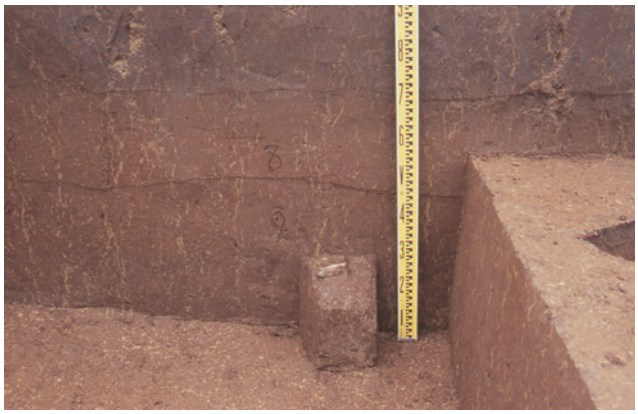
20 は白磁碗で、ビロースクタイプ（白磁Ｃ３群）と思われる。13―Ｊ９－イ　ⅢA（5）層出土。

21 は砂岩で、部分的に赤変しており火を受けているものと思われる。長さ 8.2cm、幅 2.7cm、厚さ 2.1cm。13－Ｊ９－イ　ⅣA（9）層出土。



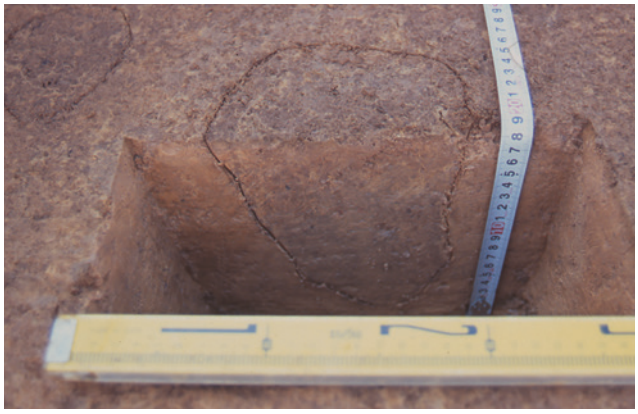
第24図　喜友名東原第三遺跡　5トレンチ　ⅣA面　遺構図

1.　5 トレンチ　13-J9- イ　ⅣA 面　遺構検出状況



2.　5 トレンチ　13-J9- イ　ⅣA 層　遺物出土状況

3.　5 トレンチ　13-J9- イ　Ⅲ･Ⅳ層　堆積状況 (東より)



4.　5 トレンチ　13-J9- イ　ⅣA 面　SP1 半裁状況

図版27　喜友名東原第三遺跡　5トレンチ(5)

第７節　小結

以上、各トレンチについて層序・遺構・遺物について記述してきた。今回の調査では、喜友名東原第三遺跡の主に南東側に５本のトレンチ調査を行ったことになる。ここでは、遺構面ごとに今回の調査で確認できた様相をまとめる。

マージ面（旧地形）　全体的には標高67m前後であり、ほぼ平坦地であったものと思われる。ただ、１トレンチと５トレンチにおいて周辺よりも約１m低くなる約30m程度と思われる小規模な迫地が確認できた。この規模については南側に谷を埋められ造成された滑走路があり、より大きな迫地であった可能性も考慮されよう。この２地点は100m程度離れていることと、前者がⅣＢ層、後者がⅣＡ層と堆積する土層が異なることから、別々の迫地と思われる。

ⅣＢ面（縄文時代後・晩期）　１トレンチにおいて、先述した迫地にピットを２基確認しているが、その性格は現時点では分からない。一方、埋土であるⅣＢ層は砂質土壌であるため、この迫地は流水などによる自然堆積で埋まっていったものと思われる。

ⅣＡ面（縄文時代後・晩期）　５トレンチの迫地で多くの小ピットを確認しているが、その性格はやはり不明である。１トレンチのⅣＢ層とは土質は異なるのは先述どおりであるが、時期的には断定できないが同様の土器片と思われるので、縄文時代後・晩期の間で収まるものと思われる。また、この埋土であるⅣＡ層は、喜友名前原第三遺跡と土質・色調では類している。

ⅢＣ面（グスク時代か）　５トレンチにおいて、ピットを確認しているがその性格については現時点で不明である。喜友名前原第三遺跡では、このⅢＣ面のピットでは焼土が含まれたことに比べると、焼土がほとんど見られないといった違いがある。遺物は時期が限定できるものはないが、土質からグスク時代前後と考えたい。

ⅢＢ面（グスク時代）　１・３・５トレンチにおいてピットを確認しており、１・３トレンチはほぼ平坦地、５トレンチはやや埋まった迫地とその地形がやや異なっている。ピット自体からはその性格が決めがたいが、前者については前原５－１トレンチのような柱穴も含まれる可能性を考えたい。一方、後者は焼土が集中する範囲も見られることから、耕作地の可能性も否定できない。この面のピットについては調査範囲を広げるなど、更なる調査が必要と思われる。遺物については、１トレンチで中国産緑釉陶器が出土しており、15～16世紀ごろと思われる。

ⅢＡ面（グスク時代～近世）　１・３・５トレンチではⅢＡ層が堆積している。明確な遺構は確認できていないが、５トレンチでは焼土と思われる赤色粒が集中している部分が見られた。喜友名前原第三遺跡では、ⅢＡ面で植栽痕の可能性があるピットが見られるので、こちらにおいても耕作地の可能性を考えたい。時期については、出土遺物から明確には出来ないが、土質・色調からグスク時代～近世と考えた。

Ⅱ面（近世）　Ⅱ層は全てのトレンチで確認されており、１トレンチを除き、喜友名前原第三遺跡と同様で溝や耕具痕を確認されており、やはり耕作地であったものと思われる。

このように、今回調査を行った喜友名東原第三遺跡の範囲においては、その東端に縄文時代後・晩期の自然堆積で埋まった迫地とグスク時代のピット群、南端には縄文時代後・晩期の旧地表層、迫地に営まれたグスク時代の耕作地があったことが想定される。ただ、遺物は非常に少なく、グスク時代のピット群の調査も不十分であり、今後の調査が必要となろう。

第７章　喜友名前原第三遺跡・喜友名東原第三遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析は、平成 17 年度に行われた沖縄県宜野湾市普天間飛行場内にある喜友名前原第三遺跡および喜友名東原第三遺跡の範囲確認調査を対象としている。その結果、耕作痕と考えられるピット集中部や溝などの遺構が検出されており、グスク時代～近世の耕作地である可能性が想定されている。

本報告では、古環境変遷および堆積層の土壌特性の検討を目的として、放射性炭素年代測定、花粉分析、微細物分析、土壌理化学分析・粒度分析を実施する。

第 13 表　分析試料・分析項目一覧

遺跡名	グリッド名	試料番号	層序対応	分析項目 14C	花粉	洗出	土理	粒度
喜友名前原第三遺跡	前原1トレンチ（フテ14-D5-エ）	炭	ⅣA(6)	●				
喜友名東原第三遺跡	東原1トレンチ（フテ13-G6-ウ）	1	Ⅱ(2-1)					
		2	Ⅱ(2-2)		●		●	●
		3	ⅢA(4)		●		●	●
		4	ⅢB(5)		●		●	●
		5	ⅢB(6)		●		●	●
		6	ⅣB(7)		●		●	●
		7	ⅣB(8)		●		●	●
		8	ⅣB(9上)		●		●	●
		9	ⅣB(9下)		●		●	●
		10	ⅣB(10)	●	●		●	●
		11	VA(11)		●		●	●
		ピット1	ⅣBSP1-1			●		
		ピット2	ⅣBSP1-2			●		
		ピット3	ⅣBSP1-3			●		

14C：放射性炭素年代測定　花粉：花粉分析　洗出：微細物洗い出し
土理：土壌理化学分析　粒度：粒度分析

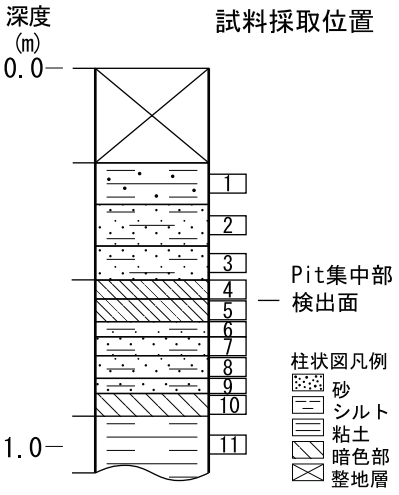
１．試料

喜友名前原第三遺跡の範囲にあたる前原１トレンチ（フテ 14-D4-エ）のⅣＡ層からは、年代測定のため炭化物試料が採取されている。

喜友名東原第三遺跡の範囲にあたる東原１トレンチではピット集中部が検出されている。分析試料は東西方向トレンチのほぼ中央部で採取した。

試料番号 11（ＶＡ層）は、にぶい黄色～褐色を呈し、マンガンの濃集により乱れているが、その様相から島尻マージと考えられる。その上位は試料番号４（ⅢＢ層）が位置する層準までにぶい黄褐色の砂混じり粘土質シルトを呈し、最下位層で焼土粒を多く含む。本地点東側で検出されているピット集中部は、試料番号４、５（ⅢＢ層）が位置する暗褐色層の下位層上面から掘り込まれている。さらにその上位の試料番号１・２（Ⅱ層）、３（ⅢＡ層）はにぶい黄色～褐色の砂質シルトとなり、その砂分は上位に向けて細かく、炭化物・焼土粒も増加する。最上位は現代の整地層である。

試料は整地層以深の各層から１点ずつ、上位から付し、試料番号１－11 の計 11 点を採取している。 模式柱状図と試料採取位置を第 25 図に示す。また、島尻マージ(試料番号 11 採取層準) に落ち込み状のⅣＢ面ＳＰ１が認められる。このＳＰ１の覆土についても上位からピット１－３として計３点の土壌を採取した。



第25図
喜友名東原第三遺跡1トレンチ
フテ13-G-5-ウ南壁模式柱状図
及び試料採取位置

これらのうち、フテ 13－Ｇ５－ウの試料番号２－11 の計 10 点について花粉分析、土壌理化学分析・粒度分析を実施し、ピット１－３の３点について微細物分析を実施する。また、

フテ 13－Ｇ５－ウの試料番号 10 より採取した炭化物およびフテ14－Ｄ４－エの炭について、放射性炭素年代測定を実施する。分析試料・分析項目の一覧を第13表に示す。

２．分析方法

（１）放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去した（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、１gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO_2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO_2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸(HOX-Ⅱ)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に$^{13}C/^{12}C$の測定も行うため、この値を用いて$\delta^{13}C$を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

（２）花粉分析

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛，比重 2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸９，濃硫酸１の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

また、花粉・胞子量のほかに、試料中に含まれる微粒炭量も求める。炭片は20μm以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。微粒炭量は、堆積物１cc あたりに含まれる個数を一覧表に示す。この際、有効数字を考慮し、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸める。

（３）微細物分析

土壌試料(ピット１は975ｇ、ピット２は687ｇ、ピット３は717ｇ程度)を水に一晩浸し、0.5mm 目の篩を通して水洗する。篩内の残渣および回収物を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、種実や炭化材などの植物遺体を抽出する。検出された炭化材や炭化物は、48 時間70℃乾燥後の重量を求め、瓶に入れて保管する。

（４）土壌理化学分析・粒度分析

pH(H_2O)はガラス電極法(土壌環境分析法編集委員会編,1997)、全炭素、有機炭素量はアリソン重量法(METHOD OF SOIL ANALYSIS Part2,1965)、全窒素量は硫酸分解－水蒸気蒸留法、MI(Melanic index)は腐植簡易分析法(本名・山本,1992)、全鉄は蛍光Ｘ線分析法、粒径組成はピペット法に従う。また、酸性シュウ酸塩可溶鉄、マンガンおよびジチオナイトクエン酸可溶鉄、マンガンについて Acid-oxalate 法、Holmgren 法に従い定量し、永塚(1973)の方法により鉄の活性度・結晶化指数を算出する。以下に各項目の操作工程を示す。

・試料調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して２㎜の篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5㎜ 篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で４時間乾燥し、分析試料水分を求める。

・pH(H_2O)

風乾細土 10.0ｇをはかりとり、25ml の蒸留水を加えてガラス棒で撹拌する。30 分間放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pH メーター(ガラス電極法)で pH(H_2O)を測定する。

・全炭素量(T-C)

粉砕土試料約 1000mg をナス型フラスコに精秤し、重クロム酸カリウム約１ｇを添加し、炭素測定装置に装着する。硫酸・リン酸混液 25ml を添加し、10 分間加熱する。加熱終了後、10 分間バブリングした後、CO_2吸収管の重量を測定する。測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から、乾土あたりの全炭素量(%)を求める。

・有機炭素量(Org-C)

粉砕土試料約 1000mg をナス型フラスコに精秤し、硫酸第一鉄溶液約４ml を添加して１分間煮沸する。冷却後、重クロム酸カリウム約１ｇを添加し、炭素測定装置に装着する。硫酸・リン酸混液 25ml を添加し、10 分間加熱する。加熱終了後、10 分間バブリングした後、CO_2吸収管の重量を測定する。測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から、乾土あたりの有機炭素量(%)を求める。さらに、全炭素量から有機炭素量を減じ、無機炭素量(%)を算出する。

・全窒素(T-N)

粉砕土試料 1.00ｇをケルダール分解フラスコに秤り、分解剤約 3.0ｇと硫酸 10ml を加え加熱分解する。分解後、蒸留水約 30ml を加え放冷した後、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素量(%)を求める。さらに、有機炭素量を全窒素量で除し、炭素率(C/N)を算出する。

・MI(Melanic Index)による腐植簡易分析

風乾細土試料約 1.0ｇを 50ml 容遠心管に入れ、分注器で 0.5%NaOH 溶液約 25ml を加える。遠心管に蓋をしてテープで密封し、室温で１時間振とうした後、0.1%高分子凝集剤溶液１－２滴を加え、よく振り混ぜた後、4,000rpm、15 分間の遠心分離で抽出腐植溶液を得る。吸光度の測定は、得られた抽出腐植溶液約 1ml を試験管にとり、0.1%NaOH 溶液 20ml を分注器で加え(NaOH の濃度は約 0.1%となる)、分光光度計により 450、520nm の吸光度を測定する(450nm の吸光度が１を越えた試料は、さらに 0.1%NaOH 溶液で希釈して測定)。測定は抽出後、３時間以内に行い、結果の表示を MI(=K_{450}/K_{520})で示す。

・全鉄(蛍光Ｘ線分析法)

蛍光 X 線分析装置を利用し、ガラスビード法により、鉄(Fe_2O_3)の定量を実施する。風乾細土試料の一部を振動ミル(平工製作所製 TI100;10ml 容タングステンカーバイト容器)で微粉砕する。微粉砕試料を磁製坩堝に精秤し、105℃で 24 時間乾燥させ、その重量変化から風乾細土水分を算出する。次に、電気炉を用いて 950℃で２時間灼熱し、灼熱減量を算出する。上記、灼熱後の試料を利用し、ガラスビートを作成する。以下に利用した装置、試料処理法、測定条件を記す。

測定装置：理学電機工業社製 RIX1000(FP 法のグループ定量プログラム)

溶融装置：自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー(3491A1)

溶剤及び希釈率：融剤(四ホウ酸リチウム)5.000g:試料 0.500g

剥離剤：LiI(溶融中２回投入)

溶融温度：1200℃,約７分

Ｘ線管：Cr(50Kv-50mA)

スペクトル：Kα

分光結晶：LiF

検出器：SC

計数時間：PeaK40sec,Back20sec

・酸性シュウ酸塩可溶鉄、マンガン(Acid-oxalate 法)

粉砕土試料 300mg に 0.2M 酸性シュウ酸塩溶液(pH3)を 30ml 加え、暗所で４時間振とうする。振とう後、0.4%高分子凝集剤を２滴加えて軽く振とうした後、3000rpm で 15 分間遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度計により鉄(Fe)、マンガン(Mn)の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄、マンガン量(%)を求める。

・ジチオナイトクエン酸可溶鉄、マンガン(Holmgren 法)

粉砕土試料 500mg に DCB 抽出液 30ml を添加して 16 時間振とうする。振とう後、0.4%高分子凝集剤を２滴加えて軽く振とうした後、遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度計により鉄(Fe)、マンガン(Mn)の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄、マンガン量(%)を求める。

・粒度組成(ピペット法)

風乾細土試料 10.00g に 30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物を分解する。分解終了後、遠心洗浄を行い、脱塩した後、蒸留水約 400ml と分散剤（4%ヘキサメタリン酸ナトリウム)10ml を加え、撹伴しながら 20 分間音波処理を行う。この懸濁液を 500ml 沈底瓶に移し、蒸留水で 500ml に定容する。

沈底瓶を１分間激しく振り、直ちに静置して所定の時間に５cm の深さから懸濁液 10ml を採取する。採取懸濁液は蒸発乾固させ、秤量する(シルト・粘土の合量)。さらに、所定の時間が経過した後、沈底瓶から懸濁液を５cm の深さから 10ml 採取し、蒸発乾固させ、秤量する(粘土含量)。沈底瓶に残ったシルト・粘土はサイフォンを使ってすべて洗い流し、その残査を乾燥・秤量する(砂含量)。これを 0.2mmφの篩で篩い分け、篩上の残留物を秤量する(粗砂含量)。これら測定値をもとに粗砂(2.0-0.2mm)・細砂(0.2-0.02mm)・シルト(0.02-0.002mm)・粘土(0.002mm 以下)４成分の合計を 100 とする各成分の重量%を求め、国際法によって土性区分を行う。

３．結果

（１）放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第 14 表に、暦年較正結果を第 15 表に示す。補正年代は、前原１トレンチ（フテ 14－Ｄ４－エ）ⅣＡ層から採取された炭化物が 1,050±30BP、東原１トレンチ（フテ 13－Ｇ５－ウ）の試料番号 10（ⅣＢ層最下部）から採取された炭化物が 5,750±40BP であった。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5,730±40 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表している。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が 68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が 95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差をσとして計算させた結果、フテ 14－Ｄ４－エの炭（ⅣＡ層）は calAD 974-1,020、フテ 13－Ｇ５－ウの試料番号 10（ⅣＢ層最下部）は calBC 4,678-4,545 である。

第 14 表　放射性炭素年代測定結果

グリッド名	試料名	種類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.
前原1トレンチ (フテ14-D4-エ)	炭(ⅣA層)	炭化物	1,050± 30	-27.14±0.61	1,090± 30	IAA-53243
東原1トレンチ (フテ13-G5-ウ)	10 (ⅣB層最下部)	炭化物	5,750± 40	-29.09±0.59	5,820± 40	IAA-60291

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第 15 表　暦年較正結果

グリッド名	試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)				相対比	Code No.
前原1トレンチ (フテ14-D4-エ)	炭 (ⅣA層)	1,052± 31	σ	cal AD 974 - cal AD 1,020	cal BP 976 - 930	1.000	IAA-53243
			2σ	cal AD 897 - cal AD 921	cal BP 1,053 - 1,029	0.127	
				cal AD 942 - cal AD 1,026	cal BP 1,008 - 924	0.873	
東原1トレンチ (フテ13-G5-ウ)	10 (ⅣB層最下部)	5,749± 37	σ	cal BC 4,678 - cal BC 4,658	cal BP 6,628 - 6,608	0.124	IAA-60291
				cal BC 4,655 - cal BC 4,637	cal BP 6,605 - 6,587	0.150	
				cal BC 4,619 - cal BC 4,545	cal BP 6,569 - 6,495	0.726	
			2σ	cal BC 4,693 - cal BC 4,499	cal BP 6,643 - 6,449	1.000	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

（2）花粉分析

結果を第16表に示す。表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

いずれの試料においても検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。わずかに検出された種類についてみると、木本花粉ではツガ属、マツ属、ヤマモモ属、ノブドウ属、ウコギ科、サカキカズラ属などが１－３個体、草本花粉ではイネ科、クワ科、ナデシコ科、ヨモギ属が１－８個体検出されるにとどまる。また、わずかに検出された花粉化石の保存状態は悪く、そのほとんどが、花粉外膜が壊れている状態で産出していた。

微粒炭量は試料番号２で 29,300 個/cc、試料番号３で 50,000 個/cc、試料番号４で 71,900 個/cc、試料番号５で 111,800 個/cc、試料番号６で 48,500 個/cc、試料番号７で 66,100 個/cc、試料番号８で 42,600 個/cc、試料番号９で 37,700 個/cc、試料番号 10 で 42,100 個/cc、試料番号 11 で 1,900 個/cc である。

（3）微細物分析

分析の結果、いずれの試料からも同定可能な種実遺体は検出されなかった。種実遺体以外では、炭化材がピット１から 0.3g(6mm 角以下)、ピット２、ピット３から 0.01g 程度(3mm 角以下)検出された。その他に、ピット１からは木材組織が認められない、部位・種類ともに不明の炭化物(不明炭化物)が微量(0.01g 未満)確認された。

（4）土壌理化学分析・粒度分析

結果を第17表に示す。有機炭素量についてみると、試料番号 10－２では 0.58-0.83%であるのに対し、最下位の試料番号 11では 0.37%とやや低い値を示す。それ以外の項目については、試料ごとに大きな差違は認められない。

4．考察

（1）喜友名前原第三遺跡

前原１トレンチ（フテ 14―Ｄ４－エ）では、マージ直上の堆積層から採取された炭化物が約 1,000 年前の値

第 16 表　喜友名東原第三遺跡 1 トレンチにおける花粉分析結果

種　類										
試料番号	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
層序対応	Ⅱ(2-2)	ⅢA(4)	ⅢB(5)	ⅢB(6)	ⅣB(7)	ⅣB(8)	ⅣB(9上)	ⅣB(9下)	ⅣB(10)	ⅤA(11)
木本花粉										
ツガ属	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
マツ属	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
ヤマモモ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−
ノブドウ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ウコギ科	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
サカキカズラ属	−	−	−	−	−	1	−	3	−	−
草本花粉										
イネ科	1	2	−	4	7	4	1	8	4	−
クワ科	2	−	−	−	−	1	−	−	−	−
ナデシコ科	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
ヨモギ属	−	−	−	1	1	−	−	−	1	−
不明花粉	1	2	−	1	1	−	−	1	1	−
シダ類胞子										
シダ類胞子	15	23	15	30	43	85	85	138	108	5
合　計										
木本花粉	1	1	0	0	1	2	1	3	0	0
草本花粉	3	2	0	5	8	5	1	9	5	0
不明花粉	1	2	0	1	1	0	0	1	1	0
シダ類胞子	15	23	15	30	43	85	85	138	108	5
総計（不明を除く）	19	26	15	35	52	92	87	150	113	5
1ccあたりの微粒炭量[個]	29,300	50,000	71,900	111,800	48,500	66,100	42,600	37,700	42,100	1,900

第 17 表　喜友名東原第三遺跡 1 トレンチにおける土壌理化学分析・粒度分析結果

試料番号	層序対応	土色	pH (H2O)	全炭素 (%)	有機炭素 (%)	無機炭素 (%)	全窒素 (%)	C/N	腐植		全鉄 Fe_t (%)
									MI	腐植酸型	
2	Ⅱ（2−2）	10YR4/4 褐	7.2	0.58	0.54	0.04	0.09	6	2.15	P/Rp	4.69
3	ⅢA（4）	10YR4/3 にぶい黄褐	7.1	0.68	0.64	0.04	0.09	7	1.80	B	3.92
4	ⅢB（5）	10YR3/4 暗褐	7.1	0.74	0.69	0.05	0.08	9	1.72	B	3.55
5	ⅢB（6）	10YR3/4 暗褐	7.0	0.83	0.83	0.01>	0.09	9	1.72	B	3.58
6	ⅣA（7）	10YR4/3 にぶい黄褐	7.0	0.66	0.66	0.01>	0.09	7	1.84	B	4.03
7	ⅣB（8）	10YR4/3 にぶい黄褐	7.0	0.68	0.60	0.08	0.08	8	1.84	B	3.83
8	ⅣB（9上）	10YR4/3 にぶい黄褐	6.9	0.61	0.61	0.01>	0.08	8	1.77	B	3.65
9	ⅣB（9下）	10YR4/3 にぶい黄褐	6.9	0.64	0.63	0.01	0.07	9	1.75	B	3.45
10	ⅣB(10)	10YR4/3 にぶい黄褐	6.9	0.60	0.60	0.01>	0.07	9	1.71	B	3.26
11	ⅤA（11）	10YR4/3 にぶい黄褐 10YR5/6 黄褐	6.8	0.37	0.37	0.01>	0.07	5	2.34	P/Rp	3.29

試料番号	層序対応	DCB可溶		酸性ｼｭｳ酸塩可溶		活性度	結晶化指数	粒径組成				
		Fe_d (%)	Mn_d (%)	Fe_o (%)	Mn_o (%)	Fe_o/Fe_d	$(Fe_d-Fe_o)/Fe_t$	粗砂 (%)	細砂 (%)	シルト (%)	粘土 (%)	土性
2	Ⅱ（2−2）	3.43	0.08	0.37	0.08	0.11	0.65	1.6	22.1	40.2	36.1	LiC
3	ⅢA（4）	2.88	0.11	0.44	0.11	0.15	0.62	2.7	29.8	35.1	32.4	LiC
4	ⅢB（5）	2.47	0.12	0.41	0.12	0.17	0.58	3.7	37.5	28.2	30.6	LiC
5	ⅢB（6）	2.57	0.14	0.49	0.14	0.19	0.58	3.8	38.7	25.1	32.4	LiC
6	ⅣA（7）	2.82	0.15	0.53	0.15	0.19	0.57	4.6	37.0	21.9	36.5	LiC
7	ⅣB（8）	2.78	0.16	0.51	0.16	0.18	0.59	4.3	38.8	22.0	34.9	LiC
8	ⅣB（9上）	2.54	0.16	0.46	0.17	0.18	0.57	3.9	40.1	22.7	33.3	LiC
9	ⅣB（9下）	2.44	0.16	0.46	0.16	0.19	0.57	4.3	42.0	21.6	32.1	LiC
10	ⅣB(10)	2.32	0.17	0.50	0.18	0.22	0.56	4.2	45.4	21.3	29.1	LiC
11	ⅤA（11）	2.32	0.20	0.46	0.20	0.20	0.57	3.8	42.4	23.4	30.4	LiC

備考）
(1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
(2) 無機炭素：全炭素量−有機炭素量
(3) C/N：有機炭素量/全窒素量
(4) 全鉄(Fet)：蛍光X線分析による。
(5) 活性度：Feo/Fed
(6) 結晶化指数：(Fed−Feo)/Fet

を示した。これまでに普天間基地内で行われた年代測定結果を見ると、マージを基盤とした谷を埋める堆積層最下部では、概ね約 1,280−1000 年前を示している（宜野湾市教育委員会 2006）。今回の結果はこれに調和する。このことは、グスク時代成立前の生産活動が始まった頃の耕地の拡大や、植生破壊による土壌の流入に原因があると推測されている。

（2）喜友名東原第三遺跡

東原１トレンチ（フテ 13−Ｇ５−ウ）の年代観についてみると、試料番号 10 より採取された炭化物の年代が

約 5,700 年前の値を示した。このことから、試料番号 10 採取層準（ⅣＢ層最下部）は約 5,700 年前に堆積し、その上位にはそれ以降の堆積物が累重している可能性がある。近接する上原濡原遺跡でも、貝塚時代中期相当とされる層準から、同一方向に並ぶ溝列が検出されている(宜野湾市 1995)。ただし、喜友名前原第三遺跡の年代値や、検出されたピット群がグスク時代～近世頃の耕作地と推定されていることを考慮すると、やや古い値と言える。これについては、出土遺物および遺構の検討や複数点の放射性炭素年代測定を実施するなどして、検証する余地がある。

花粉分析の結果、試料番号 11,4 以外の試料からは花粉化石が検出されるものの、産出状況が悪く、古植生を検討することは困難である。微細物分析の結果からは、同定可能な種実遺体は検出されなかった。しかしながら、少なくとも木本類では、マツ属、ヤマモモ属、ノブドウ属、ウコギ科、サカキカズラ属が、草本類ではイネ科、クワ科、ナデシコ科、ヨモギ属が検出されることから、これらの植物が周辺域に生育していたことがうかがえる。土壌理化学分析の結果を見ると、いずれの試料においても大きな差違は認められない。人為の影響の多い土壌と島尻マージの土壌理化学成分を比較した例では、野嵩タマタ原遺跡があげられる(宜野湾市 2006)。これによると、人為の影響の大きいⅡ層（宜野湾市）の有機炭素量は 0.64-1.12%であるのに対し、比較した島尻マージの有機炭素量は 0.08-0.18%と低い値を示すとされている。今回の分析結果を見ると、試料番号 10－２採取層準では 0.58-0.83%と比較的高い値を示し、野嵩タマタ原遺跡のⅡ層（宜野湾市）に近い値を示す。特に有機炭素量は試料番号５採取層準（ⅢＢ層）で高い。微粒炭量を見ると、他の試料が約 40,000-70,000 個/cc 程度であるのに対し、同じく試料番号５採取層準（ⅢＢ層）では約 110,000 個/cc を超える。微粒炭は人間活動と密接に関係しているとみられ、福井県の鳥浜貝塚では 6,000 年前から微粒炭が増加することから、山野を焼き払っていたことが推測されている(安田 1987)。本層上面からピットが掘り込まれていることを考慮すると、試料番５採取層準（ⅢＢ層）は耕土層と想定され、認められた有機炭素量および微粒炭量の高い値は、本層堆積時の人為的活動の活発さを反映していると推測される。

一方、島尻マージ（試料番号 11)での微粒炭量は約 2,000 個/cc であり、上位の試料番号 10-2 と比較すると極端に少ない。また、有機炭素量は 0.37%であり、上位層と比較すると低いものの、前述の島尻マージの値と比較するとやや高い。このことから本層は、島尻マージもしくは島尻マージを母材とする堆積層である可能性を示唆している。

引用文献

ALLISON,L.E　1965「Organic Carbon」『METHOD OF SOIL ANALYSIS Part2,Chemical and Microbiological Properties』American Society of Agronomy 1367-1378p

土壌環境分析法編集委員会編　1997『土壌環境分析法』博友社　427p

本名俊正･山本定博　1992「腐植の簡易分析法」『土壌構成成分解析法』博友社　7-35p

永塚鎮男　1973「褐色森林土･黄褐色森林土・赤色土における遊離酸化鉄の存在形態について」『ペドロジスト 』17　70-83p

農林省農林水産技術会議事務局監修　1967『新版標準土色帖』

宜野湾市教育委員会　1995『上原濡原遺跡発掘調査記録』　38p

宜野湾市教育委員会　2006『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』宜野湾市文化財調査報告書第 38 集　160p

Reeuwijk,van,L.P　1986『PROCEDERES FOR SOIL ANALYSIS』International Soil Reference and Information Centre　106p

安田喜憲　1987『文明は緑を食べる』読売新聞社　227p

第８章　総括

ここまで、平成 17 年度に行った宜野湾市普天間飛行場内に所在する喜友名前原第三遺跡と喜友名東原第三遺跡の範囲確認調査における事実記載を行ってきた。本章では、まず今回の調査成果についてその要点を整理し、両遺跡における現時点での位置付けを検討したい。

第１節　調査成果のまとめ

調査成果のまとめとして、両遺跡ごとに時期を追って整理を行い、必要に応じて自然科学分析の成果との対応についても考えたい。

喜友名前原第三遺跡　今回の調査は遺跡範囲東側において行い、縄文時代後・晩期、グスク時代、近世の遺構を確認した。マージ面での旧地形は、南東側の３・５－１トレンチが標高 65mと微高地で西側より約１m高い。

縄文時代後・晩期においては、ほぼ全域で旧地表面（ⅣA層）が確認でき、１トレンチでは焼土の広がりを確認している。建物跡は見つかっていないが、北方 100mに多くの晩期（仲原式）の竪穴建物跡が確認されている喜友名東原ヌバタキ遺跡が位置することから、本遺跡にもこのような遺構が点在するのか、または何らかの土地利用があった可能性が考えられる。このⅣA層であるが、１トレンチ出土炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代 BP 約 1,000 年前が示されており、出土土器との年代とは大きな開きがある。その原因としてこのⅣA層は 10cm 以下と非常に薄く、当方のサンプリングにミスがあった可能性も考慮される。

グスク時代の明確な遺構としては、微高地である５－１トレンチには柱穴群、その西側には４・５－２トレンチで南北方向に伸びる幅 30m、深さ１m程の迫地が確認されている。この迫地では、性格不明である小ピットが多いが、焼土が多く見られることやⅢB面の植栽痕とされる列状ピット群が部分的に確認されているので、畑的な耕作地としての利用が考えられる（宜野湾市 2006、城間・上田 2007）。

近世には、迫地がほぼ埋まって平坦になり、全域に耕作土、耕具痕や溝が確認されており、畑地として近代まで利用されたものと考えられよう。

喜友名東原第三遺跡　今回の調査は、遺跡範囲の南東側において行い、縄文時代後・晩期、グスク時代、近世の遺構を確認した。マージ面での旧地形は、標高 67mのほぼ平坦な地形であるが、東端の１トレンチと南端の５トレンチで、周辺よりも１m低い迫地が見られる。

縄文時代後・晩期においては、１トレンチと５トレンチで共に径約 30mと推定される迫地が見られるが、性格が異なる。前者は、この迫地に厚さ１mに及ぶ砂質の自然堆積層（ⅣB層）が埋まり、平坦地になっていく。この北東 300mに位置する上原濡原遺跡では、迫地に晩期（仲原式）の砂質で厚い堆積層、畝間状の耕作遺構が確認されているので、類似した環境であった可能性がある（宜野湾市 1995・2009）。一方後者の迫地は堆積層が 10～20cm と薄く、喜友名前原第三遺跡のような旧地表層であったと考えられる。また、小ピット群も確認されており、何らかの土地利用があった可能性がある。しかし、ⅣB層について放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代 BP 約 5,700 年前を示しており、出土土器ではその時期まで溯る資料は明確ではなかった。

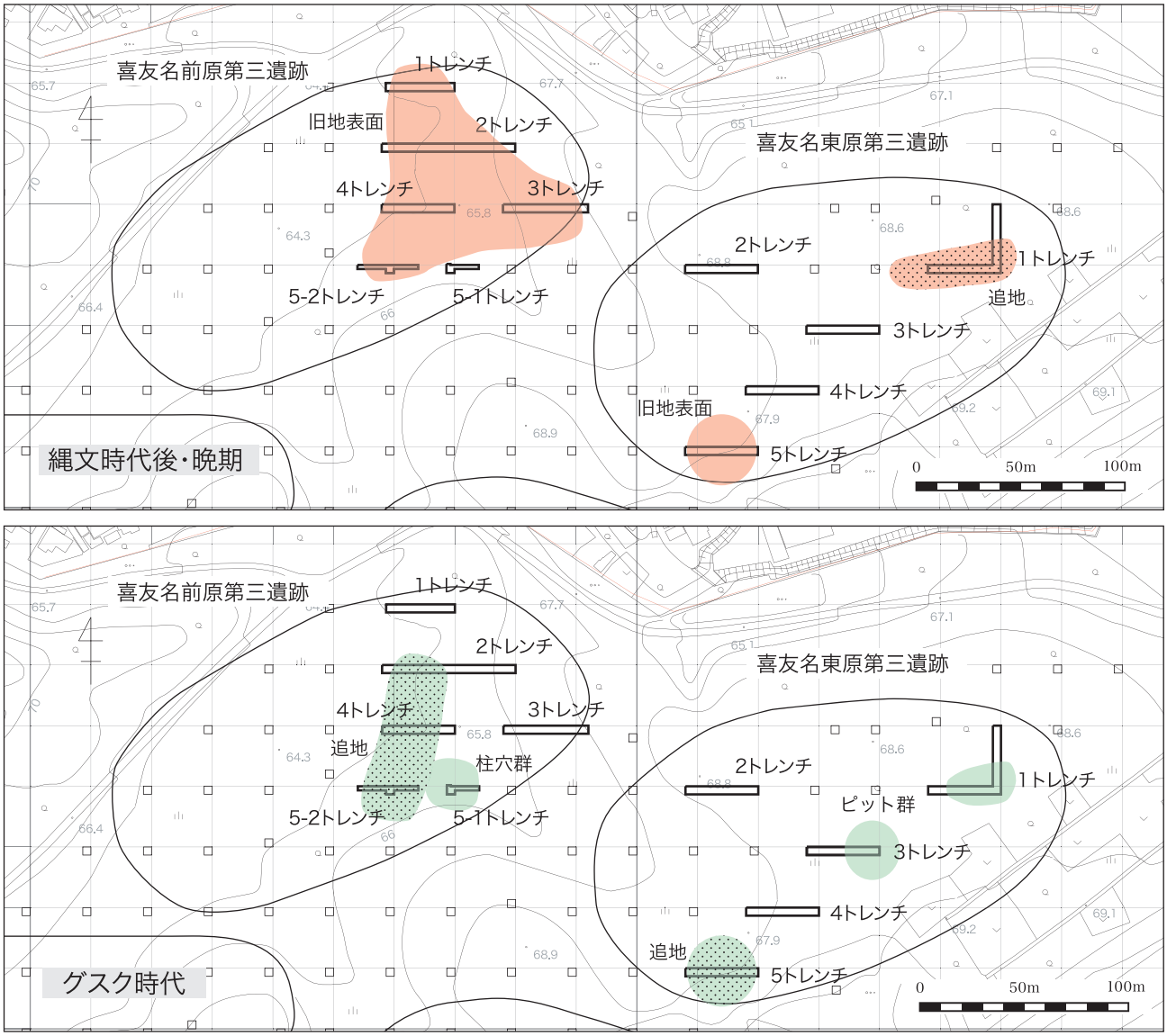
グスク時代においては、東側の１・３トレンチで小ピット群、南端の５トレンチで迫地が確認されている。小ピット群は、建物プランは確認できていないが、地形的には平坦地であるため、柱穴であった可能性も考えたい。一方、先述した迫地であるがこの時期にも埋まっておらず、焼土が集中する範囲が見られるなど喜友名前原第三遺跡のような耕作地の可能性が高い。１トレンチのⅢB層における、花粉・土壌理化学分析によると微粒炭量及び有機炭素量が圧倒的に多く、人為的な活動の活発さを示し、多くのピットが営まれる様相と一致する。

近世には、全域が平坦な地形となり、溝や耕具痕が確認されており畑地として利用されたものと思われる。

小結　両遺跡は隣接し、縄文時代後・晩期とグスク時代の遺構が確認され、その変遷は概ね共通している。そこで、両遺跡を縄文時代後・晩期とグスク時代ごとにその様相をまとめる（第26図）。

縄文時代後・晩期と時期幅を広く捉えているのは、出土土器が小片で明確な型式を断定できないためで、今後の調査に期待したい。遺構は焼土が見られるだけだが、旧地表面が広範囲に確認でき、土器の他、石器・石材も出土するので何らかの土地利用があったのは確実である。このことから、北方に近接する集落跡である喜友名東原ヌバタキ遺跡や耕作関連遺跡とされる上原濡原遺跡の縁辺部としての位置付けが妥当と思われる。

グスク時代には、少数ではあるが建物跡の柱穴の可能性があるピット群とそれに近接して迫地を利用した耕作地が確認できたのは重要な成果である。その時期であるが、遺物が小片で遺構に伴っていないが、青磁細蓮弁紋碗や稜花皿、タイ褐釉陶器や中国産緑釉陶器が出土していることから15～16世紀と考えたい（瀬戸ほか 2007）。ただ、細部においては性格不明の小ピット群が多く、また耕作跡である植栽痕なども不明瞭な状況であるので、今後の調査でその性格や時期が明らかにする必要があろう。



第26図　喜友名前原第三遺跡・喜友名東原第三遺跡遺構分布図

第２節　喜友名・伊佐地域におけるグスク時代の遺跡分布とその様相

以上、喜友名前原第三遺跡及び喜友名東原第三遺跡の調査成果としては、縄文時代後・晩期における近接する集落跡の周縁部としての土地利用、グスク時代における少数の建物跡と迫地単位の耕作地が確認できたことが挙げられる。ここでは、グスク時代においては両遺跡の約１km 圏内には 12 遺跡が分布していることから、これら周辺遺跡の状況を整理することにより、今後の総合的な評価に備えたい（第 27 図）。

喜友名・伊佐遺跡群　宜野湾市教育委員会ではこの両遺跡が位置する中位段丘縁辺から低位段丘にかけての遺跡を喜友名･伊佐遺跡群として、水系を同じくする一つの関連性を持った遺跡群として捉えている（宜野湾市 1994）。また、これらの遺跡はグスク時代の前半と後半に分けられ、各集落が耕作地・鉄生産などの役割分担があり、戦いなどの有事には一つの集団として機能したと位置づけている（宜野湾市 1984）。結論から述べるとこの見解は現時点でも妥当なもので、近年の資料を整理することで少しでも具体的に把握できるものと考えられる。

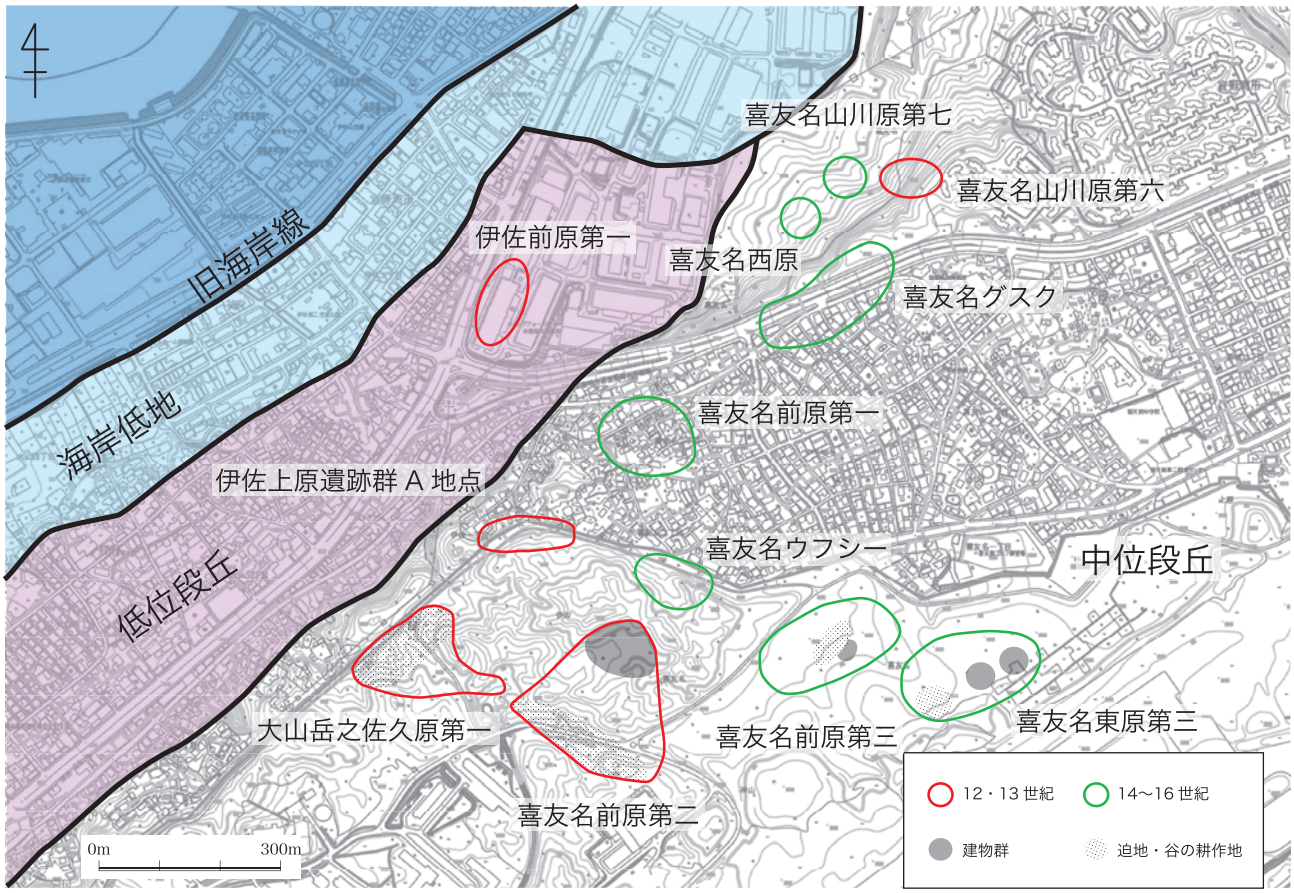
遺跡の分布と立地　喜友名・伊佐地区におけるグスク時代の遺跡は、低位段丘から中位段丘にかけて 12 遺跡が分布している。その立地をまとめると、低位段丘には伊佐前原第一遺跡が見られ、多くの建物跡などが確認されている（宜野湾市 1993・県埋文 2002）。この西側約 500m付近の中位段丘中腹部には、喜友名西原遺跡・喜友名山川原第六・七遺跡が位置し（宜野湾市 1984・1988）、後述するように時期の違いがある。このすぐ南東側の中位段丘端部に喜友名グスクが位置し、かつては周囲に石垣が残存していた（県教委 1999）。喜友名グスクより南方は中位段丘となるが、近接するものから記すと喜友名前原第一遺跡・喜友名ウフシー遺跡（宜野湾市 1988）、その南西には海が望める丘陵頂部に伊佐上原遺跡群Ａ地点（県埋文 2004）、大きく落ち込む谷地に大山岳之佐久原第一遺跡（宜野湾市 1995）が位置する。後二者の遺跡より南方約 100mに見られる小丘陵を挟んで喜友名前原第二遺跡（県埋文 2006）が位置するが、海が全く望めない奥まった地点である。今回の喜友名前原第三及び東原第三遺跡はここから東方 200m、喜友名グスクからは南方 600mの平坦地に立地する。

それでは、近年のグスク土器（宮城・具志堅 2007）や、陶磁器（金武 1990、太宰府市 2000、瀬戸ほか 2007）などの研究成果に基づき、12～13 世紀と 14～16 世紀の２時期に分けてその様相を整理する。以下、遺跡名について重複を避けるため、適宜「喜友名」を省略する。

12～13 世紀　この時期には、低位段丘に位置する伊佐前原第一遺跡において、２×２間総柱を中心とする掘立柱建物群を始め多くの柱穴群、土坑墓、植栽痕が多く見られる畑跡が確認されており、出土遺物も白磁玉縁碗や青磁劃花文碗、カムィヤキなどが多く出土している。このような様相は、ここから北方約４km 離れた後兼久原遺跡・小堀原遺跡でも確認できるため、当地域の中心的な遺跡として位置づけられよう。また、丘陵中腹部に位置する山川原第六遺跡では、建物跡は確認していないが、同様の遺物が比較的出土する。

一方、中位段丘上においては、前原第二遺跡で掘立柱建物跡を 17 基確認し、大型の４×８間の中柱２本を有するものと、小型のものは２×２間総柱が１基と１×２間が 15 基確認された。この建物プランは、12～13 世紀を中心に見られる吹出原型建物とされる母屋と倉庫がセットで見られるとするタイプである（仲宗根 2004）。また､建物群の南側には５m程低くなった迫地があり耕作土と考えられる堆積層が確認されている。しかしながら、出土遺物については、伊佐前原第一遺跡・山川原第六遺跡と比べると非常に少ない。同様に、柱穴群が見られる伊佐上原遺跡群Ａ地点、谷地に位置する大山岳之佐久原第一遺跡でも出土遺物は少ない。

このように、低位段丘の伊佐前原第一遺跡を中心とし、中位段丘の遺跡は遺物が少ないので周縁部、また耕作地と考えられる迫地や谷地に営まれることから生産的な場であったというように、立地による性格の違いがあったものと評価できる。



第 27 図　喜友名周辺地域のグスク時代遺跡分布図

14～16 世紀　先述した 12～13 世紀の遺跡群は 14 世紀にはその遺物が減少し、15 世紀にはほとんど見られなくなる。一方、喜友名グスクにおいて、倉庫とされる 1 × 1 間の建物群などの多くの遺構が確認され、青磁・白磁・天目・備前など様々な陶磁器が出土していることから、この時期の中心地として考えられる。この喜友名グスクは、先述した 12～13 世紀の山川原第六原遺跡のすぐ上方に位置することから、ここから移動した可能性も考えられよう。また、喜友名グスクの下方にはほぼ同時期である柱穴群が確認されている山川原第七遺跡と高麗系瓦が出土する西原遺跡があることから、例えば今帰仁城跡とその前面に集落跡が確認されているように、グスクとその城下の集落跡や関連施設という位置付けができよう（宮城 2006）。

その他、当該期には、前原第一遺跡、ウフシー遺跡、前原第三遺跡・東原第三遺跡があり、全て中位段丘上に分布する。その内容は、前二者では遺物が採集されているだけで、後二者では先述のように少数の建物と迫地での耕作地が見られていることから、喜友名グスクの周縁的な集落もしくは生産地として機能していたと考えられよう。

まとめ　以上、喜友名前原第三遺跡・東原第三遺跡は、15～16 世紀において伊佐・喜友名地域において中心地と考えられる喜友名グスクの周縁・生産地として役割をもっていたのではないかと考えた。ただ、西方約 200mには 12～13 世紀の集落跡である前原第二遺跡が存在しており、ここの人々たちが移動してきたとも考えられよう。また、今回の両遺跡を含めて中位段丘上の遺跡は、遺構に対して遺物が少ないという特徴があり、逆にこのことが各遺跡は独立した存在ではなく、各々が密接に関係をもっていたことを示すものと言えよう。

普天間飛行場内における分布調査は、現在も稼働している米軍基地であるが故に、小規模な調査に止まっている現状ではあるが、少しずつ調査成果も蓄積しているため、地域における各遺跡の評価を積極的に行うことがより必要になってこよう。

引用文献

沖縄県教育委員会・宜野湾市教育委員会　2010『普天間飛行場内遺跡地図（中間報告）』

沖縄県教育委員会　1998『基地内文化財Ⅰ』

1999『喜友名貝塚・喜友名グスク』沖縄県文化財調査報告書第 134 集

沖縄県立埋蔵文化財センター　2002『天界寺跡（Ⅱ）』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第８集

2002『基地内文化財Ⅱ』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 11 集

2004『基地内文化財Ⅲ』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 24 集

2006『基地内文化財Ⅳ』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 38 集

（財）沖縄県文化振興会　2003『沖縄県史　各論編２　考古』

賀川光夫・多和田真淳　1959「宜野湾村大山貝塚の調査概要」『琉球政府文化財要覧』

宜野湾市教育委員会　1984『喜友名遺跡群』宜野湾市文化財調査報告書第５集

1989『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市文化財調査報告書第 10 集

1993『伊佐前原遺跡』宜野湾市文化財調査報告書第 17 集

1994『真志喜森川原遺跡』宜野湾市文化財調査報告書第 18 集

1995『大山岳之佐久原第一遺跡・新城古集落跡』宜野湾市文化財調査報告書第 21 集

1995『上原濡原遺跡発掘調査記録』宜野湾市文化財保護資料第 43 集

2005『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』宜野湾市文化財調査報告書第 36 集

2006『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』宜野湾市文化財調査報告書第 38 集

2007『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』宜野湾市文化財調査報告書第 39 集

2008『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』宜野湾市文化財調査報告書第 41 集

2009『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』宜野湾市文化財調査報告書第 44 集

2010『市内埋蔵文化財発掘調査報告書』宜野湾市文化財調査報告書第 46 集

金武正紀 1990　「沖縄の中国陶磁器」『考古学ジャーナル』No.320

城間肇・上田圭一　2007「いわゆる植栽痕についての一考察－沖縄県内における田畑関連遺跡の集成について－」『南島考古』第 26 号　沖縄考古学会

瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志　2007「沖縄における貿易陶磁研究－14～16 世紀を中心に－」『中世窯業の諸相』第３分冊

太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集

仲宗根求　2004「グスク時代開始期の掘立柱建物についての一考察」『グスク文化を考える』新人物往来社

那須孝悌・趙哲済　2003「地層の見方」『環境考古学マニュアル』同成社

成瀬敏郎・井上克弘　1990「大陸より使者　古環境を語る風成塵」『熱い自然』古今書院

文化庁文化財部記念物課　2010『発掘調査の手引き』

宮城弘樹　2006「グスクと集落の関係について（覚書）－今帰仁城跡を中心として－」『南島考古』第 25 号　沖縄考古学会

宮城弘樹・具志堅亮　2007「中世並行期における南西諸島の在地土器の様相」『廣友会誌』第３号

山本正昭　2003「天界寺考」『紀要　沖縄埋文研究１』沖縄県立埋蔵文化財センター

報　告　書　抄　録

ふりがな	きちないぶんかざい
書名	基地内文化財 5
副書名	普天間飛行場内範囲確認調査　喜友名前原第三遺跡　喜友名東原第三遺跡
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第61集
編著者名	瀬戸哲也
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町上原193-7　TEL　098-835-8752　FAX　098-835-8754
発行年月日	2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
きゆなめーばる 喜友名前原 だいさんいせき 第三遺跡	おきなわけん 沖縄県 ぎのわんし 宜野湾市 あざきゆな 字喜友名	47205		26° 16′ 55″	127° 45′ 43″	20050801 ～ 20051130	794 ㎡	試掘確認調査
きゆなあがりばる 喜友名東原 だいさんいせき 第三遺跡	おきなわけん 沖縄県 ぎのわんし 宜野湾市 あざきゆな 字喜友名	47205		26° 16′ 53″	127° 45′ 52″	20051130 ～ 2006130	836 ㎡	試掘確認調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
喜友名前原第三遺跡	散布地	縄文時代晩期	焼土1	縄文晩期土器、磨石、石材	
	集落	グスク時代	柱穴群	土器、中国産陶磁器（青磁・褐釉）	
	耕作地	グスク時代～近世	列状ピット群、不明ピット群	沖縄産陶器	
喜友名東原第三遺跡	散布地	縄文時代晩期	ピット2	縄文晩期土器、磨石、石材	
	集落	グスク時代	不明ピット群	土器、中国産陶磁器（青磁・白磁・褐釉）	
	耕作地	グスク時代～近世	列状ピット群、不明ピット群	沖縄産陶器	

要約

在沖米軍基地である普天間飛行場内に所在する喜友名前原第三遺跡及び喜友名東原第三遺跡の範囲確認調査を実施した。調査は、範囲内容を確認するために、合計11本のトレンチを設定し、遺構の掘削は最低限に留めた。

その成果としては、喜友名前原第三遺跡では、縄文時代後・晩期の広範囲に見られる旧地表層、グスク時代の柱穴群とそれに接した迫地に営まれた耕作地が確認できた。喜友名東原第三遺跡では、縄文時代後・晩期の自然堆積で埋まった迫地及び旧地表層、グスク時代のピット群と迫地の耕作地が確認できた。

このように、両遺跡は隣接しており、縄文時代後・晩期とグスク時代に人為的活動が見られる点で共通し、また出土遺物が極端に少ない。このことから、縄文時代後・晩期においては、北方に近接する集落跡である喜友名東原ヌバタキ遺跡や耕作関連遺跡とされる上原濡原遺跡の縁辺部として位置付けが出来る。一方、グスク時代においては、両遺跡は14ー16世紀の少数の建物跡と迫地の耕作地で構成される可能性が指摘できた。この時期には周辺においては喜友名グスクが隆盛を迎えていることから、生産地もしくはその周縁として機能していたものと考えられる。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 61 集

基 地 内 文 化 財 5

—普天間飛行場内範囲確認調査—

喜友名前原第三遺跡
喜友名東原第三遺跡

発行年月日　2011 年 3 月 31 日
編　　集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町上原 193-7
TEL　098-835-8751・8752
印　　刷　合資会社　正美堂印刷所
〒901-2226　沖縄県宜野湾市嘉数 3-21-15

OKINAWA PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL CENTER
沖縄県立埋蔵文化財センター